

平成22年度

大分大学

高等教育開発センター報告書

# 目 次

はじめに	1
I 高等教育開発センター事業概要	2
II 各部門活動・事業報告	
1. 新規授業・カリキュラム開発部門	3
2. メディア・IT活用部門	12
3. FD・授業評価部門	35
4. 大学開放推進部門・生涯学習支援システム部門	69
III 付録	
1. センター関係諸規則（投稿規程を含む）	95
2. 高等教育開発センター運営委員会名簿	101



# はじめに

大分大学高等教育開発センター長  
山下 茂

いつもセンターの活動にご支援、ご協力いただきありがとうございます。大分大学高等教育開発センター平成 22 年度の報告書を作成しましたので、お届けします。

平成 22 年度のセンターのメンバーは、センター長が交代、尾澤氏が早稲田大学に移籍され、新しく末本氏が加わるという異動があったといえます。このような状況で新規事業が 2 つも動き始めました。学内の教職員の方々の支援いただきながら、センターが一丸となって取り組んだともいえ、活動も忙しい年度であったといえます。

センターの活動といたしましては、各部門も業務の継続のほか、新規の取り組みが本来業務として加わり、充実してきております。これらに加えて H22 年度の活動では、昨年度から準備してきた連携 GP「戦略的大学連携支援事業」の教育企画である共同授業の実施年度にあたり、センターが授業運営、地域貢献事業運営の実施担当となりました。これはかなりの負担となりましたが、今後の活動に役立つこともありました。この実施についての報告を記載しております。また、全学教育機構が概算要求した「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発」が今年度からはじまることになりました。この取り組みは、高等教育開発センターとしての本来業務にも関わるもので、大事に育てていかななくてはならないものだと思っています。これについても今年度の活動報告を掲載しました。

本報告書では、こうした本センターの事業について、センター内に設置している部門報告として、以下の 4 つの部門に、とりまとめています。

- 新規授業・カリキュラム開発部門
- メディア・IT 活用部門
- FD・授業評価部門
- 大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門

連携 GP などのように、各部門が連携して対応してきた業務につきましては、各部門で取り扱いをしております。

本センター事業の取組みの円滑な推進は、学内教職員のご協力とご支援、ならびに学外の関係者に負うものといえます。年次報告書の刊行にあたり、この場を借りて感謝を申し上げますとともに、今後の本センターの充実・発展のために忌憚のないご批判・ご意見をいただければ幸いに存じます。

平成 23 年 4 月

# I 高等教育開発センター事業概要

高等教育開発センターは「学内外の関係機関との連携の下に、高等教育及び生涯学習に関する調査・研究及び教育事業を積極的に推進し、もって大分大学における教育及び地域社会の発展に寄与すること」を目的として設置されています。こうした目的を達成するための事業の2010年度の成果について、部門ごとに列挙すると以下のようになります。

## 1. 新規授業・カリキュラム開発部門

- ・全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加
- ・平成22年度特別教育研究経費にもとづく事業の実施
- ・GPへの支援と参加
- ・センター教員の教養科目等の担当
- ・きっちよむフォーラム2010「学生教職員共同教育改善シンポジウム」
- ・日本人学生による英語スピーチコンテスト

## 2. メディア・IT活用部門

- ・グローバルキャンパスの運営
- ・遠隔授業の支援
- ・大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援
- ・画像アップロードシステムおよび情報一覧システムの開発
- ・WebClassポートフォリオ・コンテナ利用講習会の実施
- ・教育支援機器の活用支援
- ・学生スタッフの育成

## 3. FD・授業評価部門

- ・クリッカー研修会の実施
- ・大学院FD講演会の実施
- ・大学院学部合同FD講演会（学生のメンタルヘルス講演会）の実施
- ・学内合同研修会「きっちよむフォーラム2010」の実施
- ・日本人学生による英語スピーチコンテストの実施
- ・ポートフォリオ研究会の開催
- ・学生による授業改善のためのアンケート調査

## 4. 大学開放推進部門

- ・公開講座・公開授業の実施
- ・社会人学生に対する学習支援
- ・自治体との連携事業の企画・運営
- ・大学開放事業のあり方の検討

## 5. 生涯学習支援システム部門

- ・自治体や諸団体への支援と連携体制づくり
- ・自治体や諸団体との共同・連携事業の実施
- ・地域指導者育成のための社会人や学生の学習の場の整備
- ・地域社会システムに関する調査研究

## Ⅱ 各部門活動・事業報告

### 1. 新規授業・カリキュラム開発部門

#### (1) 新規授業・カリキュラム開発部門の活動の目的

本部門は旧高等教育開発センターの高等教育開発部門を継承し、全学教育機構の設置に対応して、全学的な教育課題に関する企画・調整業務を担当する。

#### (2) 活動報告（経過および成果を含む）

##### 1) 全学教育機構における教養科目カリキュラム策定作業への参加

全学教育機構運営会議にはセンターから2名（センター長、次長）、全学教育機構主題科目専門部会にセンターから3名（センター長、次長、専任教員1名）が平成22年度の教養教育科目の策定作業に参加し、カリキュラム作成作業に貢献した。

##### 2) 平成22年度特別教育研究経費にもとづく事業の実施

全学教育機構と本センターが、共同して概算要求として特別教育研究経費で申請していた「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発」が採択され、本年度より3年にわたって事業を展開することになった。これは、文部科学省が実施した平成22年度特別経費(プロジェクト分)の「幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実」に申請したものである。以下に、概要と、本年度の実施報告を記載する。

#### <概要>

事業名 「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発」

－学生のふり返りと見通しを促すシステムの開発－

#### 事業概要

社会性を涵養し、自発的な学習態度を育む教育技法を拡大させ、学生の自主的な学習集団造りによって、着実に成果を積み上げていけるような学生を育成することを目指した取り組みである。

本取組では、第一に学生参画型授業、課題探求型学習の推進により、学生の主体的で能動的な学習の促進を図る。第二に 体験活動を組み込んだ授業 社会人講義等の拡大によって学生の社会性を高めることを目的とする。これら授業へのポートフォリオシステム導入によって、多様な教授法に対応したより適正な評価と、学生自身による学習成果の確認を行うことができる。また、ポートフォリオにより明示される学習成果を、スタディポッド等の整備を通じて、学生相互に交流させ、学習コミュニティの形成を図ると共に、多様なメディアとの併用により 主体的な自主学習をより充実させる。ポートフォリオシステムを活用する授業成果・学習成果の蓄積により学生の学習プロセスのふり返りを促して、教養から専門への学習の取り組みを見通すことが可能となる。

(文部科学省への申請書より要約)

#### <今年度の実施内容>

形成的評価を支援するシステムとして、全学で運用している学習管理システム「WebClass」にポートフォリオの機能を装備するとともに、SNS 機能などを組み込んだ学生の学習成果のふり返り、学

習コミュニティを支援する「画像アップロードシステム」を導入した。また、これらのシステムを多くの教員に利用してもらい普及させていくために、「ポートフォリオ研究会」を立ち上げ、FDの一環としても機能させながら運用を始めた。さらに、教授法の検証を行うため、全学共通科目「大分大学を探ろう」、「成人教育法入門」をモデル授業として設定し、ポートフォリオシステムを活用した授業実践を行った。この成果については「きっちよむフォーラム」および「ポートフォリオ研究会」などの全学FDにおいて交流を行っている。

また、グループ学習形式を取る学生参画型授業や体験活動を組み込んだ授業をより効果的に実施できる教室・設備環境の整備と、授業などの際に使用する学習支援機器を揃えた。

○教室整備・・・ 教養棟においてグループ学習用教室（25、26、27号教室）を整備した。グループ単位で作業や活動を容易にはじめられる可動式机と椅子、移動に適したタイルカーペットを用意した。また挟間キャンパスでも、談話や活動を行いやすくする机等を揃えた。授業外においては、談話やグループ活動で利用しやすい場所として、改築で新設されたラウンジに使いやすい家具を配置した。

○携帯端末の活用・iPod Touch 70台、タブレットPC 30台、デジカメ 30台

この事業は、他にメディア教育部門、FD・授業評価部門と共同で実施している。個々の担当した事業の詳細については、それぞれの部門の報告を参照されたい。

### 3) GP への支援と参加

本年も、継続している高大接続 GP「学問探検ゼミを核とした高大接続教育」、大学教育推進プログラム「水辺の地域体験活動による初年時教育への展開」への支援を実施した。さらに今年度は、文部科学省の「大学教育充実のための戦略的・大学連携支援プログラム」として平成20年度より採択されている「地域連携研究、国際教育・留学生支援、教育連携を柱とする地方における高度人材養成拠点の構築」事業（連携GPと略）の教育連携による取り組みである、「大学等連携共同授業プログラム」（以下共同授業）と「大分地域大学等連携講座」（以下連携講座）が実施された。これらは、教育担当理事のもとセンターが中心的な実施母体となって連携校と共同で実施したものである。共同授業のプログラムでは、教養科目を前期・後期1科目ずつ開設した。この取り組みには、別府大学、立命館アジア太平洋大学、日本文理大学、大分県立看護科学大学、大分県立芸術文化短期大学、大分工業高等専門学校が参加している。実施に当たっては、前年度の周到な準備を行っていたため、かなりの成果があったといえよう。

ここでは、新規授業にかかわる事業として、この共同授業の実施概要を以下に掲載する。

授業実施曜日 水曜日 3時間目 （対面授業）

講義科目：前期 「大分の人と学問」

後期 「大分を探ろう」

受講形態：大分大学生・・・教養教育棟 35号教室での対面授業

他大学生・・・VODによるeラーニング

授業の具体的な到達目標

②□ 講義を通して、いろいろな学問分野を学び、理解を深めること。

② レポート提出を通して、自分自身の考えを説得的・論理的に展開できるよう

になること。

評価：毎週ごとのミニツツペーパーの提出

学期全体を通して1回の課題レポート（1200字程度）の提出

（eラーニングでは、それぞれLMS（Moodle）への投稿）

大分大学で上記の成果物を評価（5点評価法）し、これを連携大学に伝えた。

### 【前期】 「大分の人と学問」 講義スケジュール

4月14日	大嶋 誠	大分大学 理事(教育担当)・副学長	ガイダンス
4月21日	望月 聡	大分大学 教育福祉科学部	「関あじ・さば」を科学する
4月28日	井上 正文	大分大学 工学部長	竹の研究①
5月12日	林 浩昭	大分県教育委員会委員長	三浦梅園について
5月19日	隈本 順子	大分大学 国際教育研究センター	国際交流について
5月26日	下田 憲雄	大分大学 経済学部長	現代の経済問題
6月2日	井上 正文	大分大学 工学部長	竹の研究②
6月9日	守山 正胤	大分大学 医学部	医学研究の現状
6月16日	石川 雄一	大分大学 工学部	おおいた過疎地域を元気にする産学連携 ～柚子の抗アレルギー能について～
6月20日	二宮 孝富	大分大学 前経済学部	イコールパートナーシップについて考える 〔全受講生対象の対面授業〕
6月20日	羽野 忠	大分大学長	循環型社会の構築をめざして 〔全受講生対象の対面授業〕
6月23日	山岸 治男	大分大学 教育福祉科学部	地域の教育問題に挑む
6月30日	豊田 寛三	別府大学長	農学の先達：大蔵永常
7月7日	鳥井裕美子	大分大学 教育福祉科学部	天然の奇士・前野良沢と『解体新書』
7月14日	岡田 正彦	大分大学 高等教育開発センター	生涯学習について考える

### 【後期】 「大分を探ろう」 講義スケジュール

10月6日	大嶋 誠	大分大学 理事(教育担当)・副学長	ガイダンス
10月13日	牧田 正裕	立命館アジア太平洋大学 国際経営学部	温泉地再生と着地型ツーリズム ：別府での取り組み
10月20日	牧田 正裕	立命館アジア太平洋大学 国際経営学部	文化と創造性のまちづくり ：現状と課題
10月27日	飯沼 賢司	別府大学 文学部	八幡神とは何か



11月10日	段上 達雄	別府大学 文学部	六郷満山文化 修正鬼会と峰入り
1月14日	岡田 正彦	大分大学 高等教育開発センター	大分を探ろう：グループワーク(1) 〔全受講生対象の対面授業〕
11月14日	岡田 正彦	大分大学 高等教育開発センター	大分を探ろう：グループワーク(2) 〔全受講生対象の対面授業〕
11月17日	小川 伊作	大分県立芸術文化短期 大学 音楽科	豊後に流れた南蛮音楽 ～16世紀の音楽交流～
11月24日	荻野 哉	大分県立芸術文化短期 大学 美術科	芸術学入門～アートの世界
12月8日	山田 繁伸	大分工業高等専門学校 一般科	おおいたの文学碑を歩く
12月15日	島岡 成治	日本文理大学 工学部	大分近世城下町の成立とその後 ～大分のまちの起源を探る～
12月22日	杉浦 嘉雄	日本文理大学 経営経済学部	“おおいた”の夢創造型の地域づくり ～大分からトキを再び日本の大空へ！～
1月12日	渡辺 律子	ハイパーネットワーク 社会研究所	情報社会の最新動向と問題点
1月19日	石井まこと	大分大学 経済学部	大分の労働問題
1月26日	岡田 正彦	大分大学 高等教育開発センター	大分を探ろう：まとめ

この授業の履修状況については、

	前 期		後 期	
	対面講義 大分大学	VOD 連携大学等	対面講義 大分大学	VOD 連携大学等
登録者数	81名	28名	77名	58名
単位取得者数	69名	21名	56名	44名
修了率	85%	75%	73%	76%

となった。受講した学生数の大方が履修を達成できたといえよう。

今回の共同授業では、センターのTAとして工学部修士の森さんに、eラーニングでのメンターの役割をお願いし、メルマガ等のきめの細かいフォローを行ってもらった。この取り組みも、履修状況の維持につながったといえよう。さらに、次に記載した対面授業の取り組みでも中心的な活動を担っていただいた。

この授業において、全受講生対象の対面授業の際に、グループ学習を取り入れた。新しい試みとして本学が当番の回において、大分大学の学生と連携校の学生を一堂に集めた対面授業で、交流型のグループワークを行った。この授業はかなり好評であった。この授業成果を後期の例でまとめておく。

#### ○「大分を探ろう」グループワーク

日時：11月14日(日)1時間目、2時間目

場所：大分大学 教育福祉科学部 200 号教室及び周辺教室

テーマ：「大分の大学生、一日自慢」・・・高校生向けの大学紹介パンフレットに載っているような「大学生の一日」のページをグループで作成する。

グループワーク：約 3 週間前に携帯端末 (iPod) をグループに貸出、メンバーが撮影した写真をネットに開設したサイトにアップしておく。このサイトでは、撮影した写真を閲覧・コメントすることができるため、グループ内で打ち合わせ、議論を行っておいでもらう。

当日活動：メンバーが撮影した写真をもとに「大学生の一日」を各グループで作成させる。このとき、誰の写真を使うか?何人紹介するか、などの基本的な部分や、どういう構成にするか、どうすれば魅力的に伝わるか、グループのオリジナルのポイントはどこか、というような点をグループで話し合い、一枚のポスターにまとめてもらう。その後、ポスター形式の発表会を行い、ピアレビューし合い、参加者で優秀作品を選ぶ。

この共同授業および連携講座の実施の詳細については、本センターの他部門がすべて実施組織であるので、該当の部門を参照されたい。

#### 4) センター教員の教養科目等の担当

本年度から新任の末本哲雄先生が着任された。これまで前任者の尾澤先生が実施していた科目の継続を引き受けていただいた。今年度は、センター業務が多忙であるため、末本先生の新設科目は来年度から開講していただくことにし、センター 4 名の教員で、前期の科目、後期 7 科目担当した。

#### 5) 「きっちよむフォーラム 2010 「学生教職員共同教育改善シンポジウム」

このフォーラムは、FD・授業評価部門の事業であるが、授業やカリキュラムの検討の場でもあり、本部門も関連している。本年度の構成で第 1 部では、学生教職員教育改善研修会として、学生製作の「大分大学版授業NGビデオ Part 2」と、特に新規授業の提案とも言える「『学習ボランティア』の授業化 (企画・体験等の学びのサイクル) による教育効果と今後の充実方策」をセンター教員の中川忠宣先生が授業実践の報告をした。また、第 2 部では、「教育課題・教育実践検討会」として、本学では新しい授業スタイルとなる学生の振り返りを取り入れた取り組みの報告を 2 本用意した。教員免許取得で義務化された履修カルテについて「教員免許取得のために新設された授業科目への対応について」のテーマで、教育福祉科学部の藤田敦先生に 1 本目の報告を、②で報告した形成的評価で活用できるポートフォリオシステムなどによる「体験型・グループワーク等双方向授業での教育改善に向けて」を、経済学部和市原宏一先生と本センター教員の末本哲雄先生が報告を行った。

今年度は下記の日程で実施した。

日時 平成 22 年 11 月 27 日 (水)

第 1 部 学生教職員合同研修会 (13 時 10 分から 14 時 40 分)

第 2 部 教育課題・教育実践検討会 (15 時 50 分から 16 時 20 分)

詳しい報告は、FD・授業評価部門に掲載している。

## 6) 日本人学生による英語スピーチコンテスト

本コンテストは、本学の中期計画「外国語を含むコミュニケーション能力の向上を図る教育を充実させる。特に、英語については、『仕事で英語が使える』人材の育成を目指して教科内容等の改善を図る」を实践するため、平成23年3月3日(木)に開催した。

このコンテストの役割は、まだまだ継続していくものであると考えているが、本センターが今後も行っていくかは、新規事業を立ち上げるという役目が済んだ段階であり、検討を要すると思われる。国際教育センターとの協議を次年度から始めたいと考えている。

本年度の実施報告は、FD・授業評価を参照されたい。

## 7) 中期目標達成のための学生の TOEIC 試験申込手数料の一部負担

昨年度、TOEIC 試験申し込み手数料として 192,600 円、年会費として 100,000 円を負担した。

### (3) センター業務に関わる研修報告(協議会、学会、研究会都への参加)

本年度、全学教育機構の企画である「大学教育学会」(本学は団体会員となっている)への派遣として、愛媛大学で開始された第32回大会に出席した。大変有意義な発表等を聞くことができたので資料として載せる。

日時：平成22年6月5日(土)～6月6日(日)

開催地：愛媛大学 城北キャンパス 共通教育講義等

大会テーマ：「大学の存在意義(レゾナードル)」ー地域社会と大学ー

参加者：大学教職員約450人

(愛媛大生80人がボランティアで運営を手伝った。おもてなしの心)

今回参加した目的であるキーワードは、地域社会と大学、アクティブラーニング、キャリア教育、大学教員職能、FD、eラーニング、高等教育開発である。以下にいくつかの発表等の要点等を記載する。

○基調講演では

演題：「高等教育における地方性と世界性」

講師：小笠原正明 大学教育学会長

大学の地方性と競争力、大学の世界性の概要を、アメリカ、ヨーロッパ(特にドイツ)の大学を例に話をされ、また地方に設置された旧制高校を引き合いに出しながら、現在の日本の地方に位置する大学について、評価の観点から話を展開された。以下は概要である。

・大学評価の時代に「地方性」は生き残れるか？

強い大学の要素

①はっきりした個性 (偏差値や研究成果だけではない)

②地域における存在感 (地域サービスだけではない)

③学生の自学自習および自治能力 (正課だけではない)

地方性は重要な力

・大学評価時代の到来により、第1期中期計画の評価がされたが、何を評価したのだろうかという疑問がある。地方大学が下位に多く位置づけられていたのは、ここでは、「地方性」などは問題外ということか？

- ・機構による検証においては、法人と評価者の意識のズレがあり、なぜ印象がずれるか？の話がされた。法人評価は政策評価であり、本質は資源配分のアカウンタビリティ、高等教育政策の妥当性を示す根拠データだとすれば、政策と評価と整合性がポイントになること再確認することである。第1期の中期計画は、大学審答申「21世紀の大学像と改革政策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－」（1998年）を基に作られたという事実を想起し、評価委員会がこれらの重点項目もどう評価したかを明らかにされないと法人としては困る。

結論：大学の生命－専門分野を総合化するカー

◆高等教育における世界性

- ①開放的性格……国境がない、誰でも参入できる、広がる
- ②科学（学問）のコミュニティー……良いものを評価する力、信頼、競争、フェアネス
- ③資源……才能ある人材、一定の経済的余裕、環境、施設、資金
- ④専門能力……要素還元的能力、普遍性、冷徹、ある種の「非人間性」

評価が容易：国際的に通用する貨幣の性格

◆高等教育における地方性

地方性とは

- ・訓練によって得られる知識・スキル等とは別に、それらに道筋と駆使する動機を与え、瞬時に行動させることのできる力
- ・永続性と愛情を持って何事かを持続させることを可能にする安定した感情
- ・全人的性格 cf 地方にあった旧制高校、教養教育

（高等教育においては）

- ・学問的素養を統合し機能させる力→教養教育に関係

地方性を備えた健全な「世界性」と、地方性を欠いた「世界性」の危うさ

・健全な高等教育の発展ために

- 1) 地域的な多様性はかけがえのない財産だという認識
- 2) 大学等と地域との関係は双方向的だということ
- 3) 健全な地方性を育てるためには時間がかかるということ
- 4) 地域性を尊重した評価のスキームが必要

整合性と一貫性を持った評価環境を！

＝まとめに代えて＝

- ・大学というものは、正規の教育モデルあるいは経営モデルを超えたところに、ある種の生命を持っている。
- ・地方性は大学の「生命」に関係している。

○シンポジウムでは

テーマ：「地域社会と大学」

シンポジスト：小松 親次郎（文部科学省大臣官房審議官）

濱名 篤（関西国際大学長 大会企画委員長）

柳澤 康信（愛媛大学学長）

コメンテーター：西井 泰彦（学校法人京都学園理事長）

- ・今大会テーマである「大学の存在意義（レゾンデートル）」の中でも、特に「地域社会」と「大学」の関係に焦点を当て、大学の存在意義について、文部行政、地域社会、大学の立場からの意見をもとに討議された。

時代、社会や政策変化に対応

18歳人口の減少と経済状況の悪化

学生の確保や多様化する学生への対応  
質保証についての要請  
就職状況の悪化にも対策  
地元の大学に対し、地域振興、地域文化など様々な側面での期待  
(地域における高齢化、過疎化、税収減などの問題に直面)

・このような状況下において、地域社会と大学の新たな関係をどのように考えていくか、という観点で話がされた。

地域の発展（衰退）と大学の発展（淘汰）など両者の関係が連動する可能性が具体的に高まりつつあり事例を紹介された。地域と大学の関係は、これまで以上に地域社会にとっても重視されると考えられる一方、大学にとっての教育資源あるいは教育研究上のパートナーとしての地域社会（行政、産業界、地域住民等を含む）の重要性も高まっていることが確認できた。

◆「地域社会と大学」に関する政策をめぐって

文部科学省大臣官房審議官（高等教育局担当）小松親次郎

この小松氏の講演で印象に残った点は、戦略的・大学間連携のGPなどを行っているが、本当に地域の大学群がそれぞれの大学の存在を明確にしながら、地域とどの様に連携できるか大変難しい取り組みではないかと感じた。また、「国立大学法人法」の中に述べられている法人の使命を担う大学は、法律内に大学名を記載し各地域に配置しているのだという話があり、「地域」という視点ばかりでなく普遍性を担う組織であるという視点の重要さは、今後の大学を考えていく上でもっと拠り所にしていっていいのではないかと思った。

◆「大学と地域社会か、大学間連携と地域社会か」

関西国際大学 濱名 篤

概要については以下の通りである。提示スライドのいくつかをまとめた。

地方において問われる大学の存在意義について、

- ・大学の存在意義が、大学全体としても、地域社会との関係においても、そして個別大学としても問われているとあっていい。
- ・大学は、教育機関としてだけでなく、多くの教職員といった知的資源を有し、学生という若年生活者を抱えている。そういう意味では、文化的、経済的、政治的にも大きな影響力を内包している。
- ・大学の存在が、地域振興のパートナーをはじめ、社会に対しどのように役割を果たし、影響をもたらしているのか、さらに今後どのような存在感を期待されているのであろうか。
- ・大学が地域社会に一方的に貢献するのでも、地域社会が大学を支えるというだけでも不十分であろう。学士課程教育の中で注目されたように、地域社会の中での現場体験を教育に取り込むという点でも両者の関係はより重要となってきた

コメントとして

- 国立大学の機能別分化や、地方国立大学に求められる役割を明確にすることが求められる。地方国立大学の意義が地域貢献だけでは、公立大学に任せればよいことになってしまう。地域における存在意義を高めることができるか検討しつつ、機能別分化を進めることが必要である。あわせて、世界的な教育研究拠点をどうつくっていくかも必要な視点である。
- 大学政策においては、多様な大学を一括りにして論ずるのでなく、大学の機能別分化の分類の在り方を精査し、それぞれに応じた施策を講じる必要がある。

となっているが、この中教審が議論する中での地方大学の役割と機能分化をみると、“連携”か‘撤退’の選択を迫る高等教育政策になっていると言えないか。

そしてまとめとして、地域社会における大学の存在意義は、

- 1) 「大学」が地域社会にもたらす社会経済的貢献はきわめて大きく、それがなくなることは地域社会へのダメージが大きい
- 2) 地域社会における「大学」とは個別大学なのか、地域に存在する大学群（コンソーシアム等の連携）なのか→次第に後者が重要に（地域によっては地元選択の余地は喪失しつつある）
- 3) 教育面における大学と地域社会の連携の実績は分野によっては盛んな部分もあるが、全般には断片的、部分的。→学士課程教育に体系的に組み込まれた地元での学外教育プログラムの必要性
- 4) 地域における大学を存続・定着させていくには、大学（群）、地方行政や産業界等の地域社会との連携・協力が必要（ともに学生を一成・定着させていく）
- 5) 国土計画や地域振興のマスタープランは、政府・中央行政の責任。臨定までは教育機会均等化は進んでいた。

○ラウンドテーブル では

内部質保証システム構築に向けた教学 IR と FD の連動

企画者・報告者：鳥居朋子（立命館大学）、山田剛史（島根大学）

報告者：森雅生（九州大学）、池田輝政（名城大学）

キーワード：内部質保証，FD，教学 IR，学生調査，教務データ

大学はいま評価の時代に入ってきているといえる。この評価には多大な労力が費やされる。国立大学法人には、この作業が数年に1度で対応が巡ってくる。この制度への対応を組織化しておかないと大変であるとおもっていたが、この学会でこのテーマの分科会が設定されており、少しの時間参加した。

高等教育の質保証が国際的な対応できるように、日本では認証評価制度の枠組みの下、大学の主体的な自己点検・評価活動を前提とする内部質保証システムの構築が現実の課題となってきたという。

報告の中では、

・・・内部質保証とは、「機関（プログラム）の一連の活動に関する質の監視（monitoring）と向上（improvement）に用いられる大学内部の仕組み」（大場，2009，178）とされている。これを大学教育の場面に引き寄せれば、学習・教授の質的な改善を第一義的な目的とした自己点検・評価活動を恒常的かつ盤石なものにする点にこそ、大学が自力で内部質保証をシステム化する積極的な意義があると言ってよい。・・・

との話があった。この質保証の評価対象の大きな部分が教務データであろう。これへの対応を行ってきている大学の報告があった。

今後本学にもこの対応が必要になってくるかもしれない。まだ、大学の役割・位置づけが議論されているなかでは、かなりの労力と時間がかかりそうである。

注：IR・・・インスティテューショナル・リサーチ，高等教育機関の自己調査機能

## 2. メディア・IT 活用部門

メディア・IT 活用部門では、「多様なメディアを活用し、授業形態の多様化を図るとともに、自由な学習機会の拡充を進める（大分大学中期計画）」という方針の下、ICT（Information and Communication Technology）を活用した教育の推進に努めている。近年、ICT 活用教育の発展はめざましく、作業の効率化だけでなく、教育の機会増加や質的向上にも大きな期待が寄せられている。本部門では ICT 活用教育の方法開発や実践支援、授業コンテンツの開発支援、遠隔授業の環境整備などを通し、本学の教育課題に対する方策拡充に取り組んでいる。

本報告には、平成 22 年度に実施した主な活動の概要（以下の 7 項目）

- (1) グローバルキャンパスの運営
- (2) 遠隔授業の支援
- (3) 大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援
- (4) 画像アップロードシステムおよび情報一覧システムの開発
- (5) WebClass ポートフォリオ・コンテナ利用講習会の実施
- (6) 教育支援機器の活用支援
- (7) 学生スタッフの育成

および出張報告として「メディア・IT 活用における国内の動向～研修・会議を通して～」を記載する。

### （1）グローバルキャンパスの運営

グローバルキャンパスとは、講義や講演会などをビデオ収録し、高等教育開発センターの Web サイトを通じてオンデマンド配信を行う事業のことである (<http://www.he.oita-u.ac.jp/ogc/>)。本事業は平成 19 年度より継続して行っている。配信されたビデオコンテンツは受講生の復習や欠席者の学習、遠隔地での非同期的学習、授業担当教員のふり返り、活動・成果の記録、生涯学習や地域貢献のために利用されている。

#### 1) 講義ビデオの収録と配信

本年度、グローバル・キャンパスに掲載した講義ビデオの科目を表 1 に示す。本年度は前期 10 科目 73 タイトル、後期 13 科目 134 タイトルの計 207 タイトルを掲載した（昨年度の前期 10 科目、後期 6 科目の合計 143 タイトル）。

表 1 グローバルキャンパスでの通期配信授業（開講曜日順）

実施時期	教員名（所属）	講義名
前期	牧野治敏（高等教育開発センター）	生命観の変遷
	岡田正彦（高等教育開発センター）	アカデミックスキル
	山下 茂（高等教育開発センター）	自然とゆらぎ
	牧野治敏（高等教育開発センター）	日本理科教育史

	金森由美（国際教育研究センター）	表現技術（口頭発表）
	真鍋正規（工学部）	建築設備計画 I
	川野田實夫（全学教育機構） 市原宏一（経済学部） 前田 寛（工学部） 本谷るり（経済学部） 芝原雅彦（教育福祉科学部）	大分の水 I
	川野田實夫（全学教育機構） 芝原雅彦（教育福祉科学部） 前田 寛（工学部）	大分の水 III
	大嶋 誠（理事・副学長）ほか	大分の人と学問
	市原宏一（経済学部） 岡田正彦（高等教育開発センター）	プロジェクト型学習入門
後期	岡田正彦（高等教育開発センター） 中川忠宣（高等教育開発センター）	キャリアデザイン入門
	牧野治敏（高等教育開発センター）	カラダの見方・考え方
	山崎栄一（教育福祉科学部）	日本国憲法
	江島伸興（医学部）	応用数理学
	岡田正彦（高等教育開発センター）	生涯学習論入門
	川野田實夫（全学教育機構） 市原宏一（経済学部） 前田 寛（工学部） 本谷るり（経済学部） 芝原雅彦（教育福祉科学部）	大分の水 II
	真鍋正規（工学部）	建築環境計画 II
	大嶋 誠（理事・副学長）ほか	大分を探ろう
	中川忠宣（高等教育開発センター）	成人教育方法入門
	川野田實夫（全学教育機構）ほか	大分の水 III
	牧野治敏（高等教育開発センター）ほか	生活科指導法(小)
	市原宏一（高等教育開発センター） 岡田正彦（高等教育開発センター）	大分大学を探ろう
	金森由美（国際教育研究センター）	日本語 6 スピーキング

本年度、ビデオ収録を依頼する教員の主目的は欠席者の学習用であることがほとんどであったが、中には自身の授業に対するふり返しとしての活用も望んでいる教員が含まれていた。撮影目的が複数ある場合、撮影の仕方や映すべき対象も異なってくる。本年度は1つの講義に対して1セットのビデオカメラで撮影に臨んでいたが、来年度以降は教員の要望に応じて複数台のビデオカメラの導入を検討するつもりである。



## 2) 講義ビデオの収録と配信

講義以外にも学内の講演会やフォーラムなどの収録・配信を行っている。本年度には、キャリア開発課が主催するキャリアガイダンス、学生支援課主催の「生き生きプロジェクト」の成果発表会、文部科学省 質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）で採択された「学問探検ゼミを核とした高大接続教育」の成果発表会およびシンポジウムなど 23 タイトルをの収録、ビデオコンテンツ化した（表 2）。

表 2 講演会などの配信（一部）

実施時期	主催	講演名
5月12日	キャリア開発課	さあ始めよう！就職活動の事前準備
5月26日	学生支援課	生き生きプロジェクト'09 成果発表会
5月26日	キャリア開発課	適性テスト
6月23日	キャリア開発課	やりたい仕事の見つけ方
9月30日	キャリア開発課	インターンシップ体験と インターンシップ・マナー講座
10月13日	キャリア開発課	就活の取り組みとリクナビの利用講座
10月20日	キャリア開発課	公務員ガイダンス
10月27日	キャリア開発課	自己分析から進めるエントリーシート・ 履歴書・面接対策
2月4日	高大接続教育室	平成 22 年度 学問探検ゼミ報告会
2月17日	高大接続教育室	高大接続の課題を考える ～教育接続と初年次教育～

公開制限を設けていないコンテンツについては、すべて大分大学グローバルキャンパス (<http://www.he.oita-u.ac.jp/ogc/>) にて視聴可能である。

## (2) 遠隔授業の支援

且野原キャンパス教養教育棟 35 号教室と挾間キャンパス医学部 211 号教室にはテレビ会議システムが導入されている。前期火曜日 1 限目「自然とゆらぎ」（且野原から挾間）と後期火曜日 1 限目「応用数学」（挾間から且野原）が本年度の遠隔授業として開講された。メディア・IT 活用部門では、テレビ会議システムとネットワークカメラの操作、および講義映像の収録(図 1)を通して遠隔授業の支援を行った。



図1. ネットワークカメラ（左）と操作システム（右）

ネットワークシステムの稼働は安定しており、映像の遮断が原因で遠隔地での受講中断を余儀なくされるといったトラブルは生じなかった。一方、音声については「授業担当教員の教室で声が反響する」や「説明が聞こえない」などのトラブルが何度か発生した。その原因のほとんどは操作パネルの設定ミスによるものであった。1年間の運用によってトラブル時のチェックポイントや対処方法に関する知見が蓄積され（表3）、年度末には迅速に対応できるようになった。

表3 テレビ会議システムにおける音声トラブルの主な対処方法

○ 対面講義を行っている側を「送信側」、その様子を別会場のスクリーンで見て受講している側を「受信側」とする
<p><b>A. 受信側で聞こえていた音声が聞こえなくなった</b></p> <p>（原因1）マイクを使用していない（発信側の問題）</p> <p>→ 遠隔授業支援者は授業担当教員にマイクの使用を促す （講義中、教員がマイクを置いて話を始めてしまうことがある）</p> <p>（原因2）マイクの電源が切れている（発信側の問題）</p> <p>→ マイクの電源が OFF にしてしまったなら、ON にする → 充電量が少なくなったのであれば、予備のマイクと交換する</p> <p>（原因3）マイクの「使用停止」モードになっている（発信側の問題）</p> <p>→ 転送機のリモコンにあるオレンジのボタンで「使用停止」を解除する （反響防止のため、「使用停止」モードにしていることがある）</p> <p>（原因4）卓上コントローラーの操作を誤った（発信側の問題）</p> <p>→ 遠隔授業支援者が「つまみ」や「ボタン」など適正に戻す （特に「送信」ボタンと「送信音量」に注意を払う）</p> <p>（原因5）卓上コントローラーの操作を誤った（受信側の問題）</p>

→ 遠隔授業支援者が「つまみ」や「ボタン」などを適正に戻してもらう  
(特に「受信ボタン」と「受信音量」に注意してもらう)

## B. 授業をしている教室で音声の反響が起こる

(原因 1) エコキャンセラーが機能していない (すぐに対応できない)

→ 受信側の転送機のリモコンにあるオレンジのボタンを押し、  
マイクの「使用停止」モードにする

(受信側から音声を送る場合は一時的にマイクの「使用停止」モードを解除する)

または

→ 受信側の「送信音量」を下げる

また、特別研究経費「動機づけと形成的評価を重視した学士課程教育開発」にて第 1 大講義室にもテレビ会議システムを導入した。これにより、35 号教室(157 席)を超える場合でも第 1 大講義室(285 席)にて挟間キャンパスとの遠隔授業・遠隔講演会を実施できる。また、テレビ会議システムを通して 35 号教室と第 1 大講義室を連絡することができ、キャリア講演会など第 1 大講義室に参加者が見込まれる場合でも、35 号教室から講演を視聴することが可能となった。

なお、遠隔授業の実施支援にあたっては、教育支援課教育推進グループの工藤達生氏、阿南和慶氏に多大な協力をいただきました。深く感謝を申し上げます。

### (3) 大学連携授業におけるオンデマンド型授業の支援

本年度、文部科学省「戦略的大学連携支援事業」における教育連携の一環として、大分大学を含む 8 大学と合同で連携授業（前期「大分の人と学問」、後期「大分を探ろう」）が開講された。この授業では、大分大学の学生は 35 号教室にて通常の対面型講義、大分大学以外の受講生は講義ビデオを用いた e ラーニングと対面講義を交えたブレンディッド型授業の受講形態で執り行われている。メディア・IT 活用部門は連携校の受講生に向けて e-ラーニングシステム（ここでは Moodle）を運用し、講義ビデオの視聴、オンライン上での議論・質問、レポートの提出を行うための学習基盤を提供した(図 2)。



図 2. Moodle 画面 (左 : トップページ, 右 : レポート提出ページ)

平成 23 年度後期も引き続き連携授業として「大分大学の人と学問」を開講することが決定しており、今回と同様に Moodle を用いた e ラーニングシステムを運用する予定である。e ラーニング型の受講生のレポート提出率や授業後の感想から、メンタリングの重要性を再認識させられることとなった。したがって、メンター人材の育成も次年度の大学連携授業実施に向けた検討課題にあげられる。

連携授業を遂行するにあたり、尾澤重知氏（早稲田大学）ならびに森裕生氏（早稲田大学）には e ラーニングシステムの運行、受講者のメンタリング、グループ活動支援の面で多大なお力添えをいただきました。深く感謝申し上げます。

#### 【関連報告】

1. 末本哲雄・森裕生・尾澤重知・山下茂（2010）「グループワークを取り入れたブレンディッド・ラーニングの実施 ～大学連携授業の学習意欲向上 を目指して～」 第 59 回九州地区大学一般教育協議会議事録, p149-155.
2. 森 裕生, 尾澤 重知, 末本 哲雄, 山下 茂 (2010) 「オムニバス講義を利用したブレンディッド・ラーニングの効果の検討」日本教育工学会 第 26 回全国大会（愛知）P3a-405-23.
3. 森 裕生, 末本 哲雄, 山下 茂, 尾澤 重知 (2010) 「大学間連携における交流型グループワークを実施したブレンディッド・ラーニング型授業の学習促進評価」日本教育工学会 第 26 回全国大会（愛知）P3a-405-44.
4. Yuki MORI, Shohei SHIMADA, Tetsuo SUEMOTO, Shigeru YAMASHITA & Shigeto OZAWA (2010) “An Evaluation of “Face-to-Face” Group Activity on Blended-Learning in University Cooperation” The 18th International Conference on Computers in Education, ICCE 2010 (Malaysia).

#### （４）画像アップロードシステムおよび情報一覧システムの開発

高等教育開発センターでは、特別経費「動機づけと形成的評価を重視した学生課程教育開発」として採択された事業を行っている。課題探求型、体験活動型の授業を展開し、これと連動したポートフォリオシステムによる適正な評価を実施する。また、これによる学生の学習成果確認を明確化し、学習への動機付けを進めるとともに、継続して個々の学生が学習成果のふり返りと教養から専門への見通しを可能とするシステムを開発するものである。本年度、メディア・IT 活用部門が中心となって「画像アップロードシステム」および「情報一覧システム」の開発を行った。

##### 1) 画像アップロードシステム「PicUp!」

本事業にて、iPhone や iPod Touch で写真を撮影し、コメントやメモとともに高等教育開発センターが有するサーバーに転送する iOS アプリ「PicUp!」開発した（図 3 左・中）。PicUp! の名称は「Picture Upload」に由来する。また、同時に開発した PicUp! の Web ページ (<http://www.bundai.net/>) において、他者がアップロードされた画像を閲覧したり、任意のユーザーの写真だけを一望したりできる機能がついている（図 3 右, 図 4 左）。さらに、PicUp! は Twitter と連携しており、アップロード時にボタン選択することで Twitter にもコメントをツイートとして同時投稿でき、その末尾に Web ページの画像に向けてのリンクがつく（図 4 右）。



図 3. PicUp!の iOS アプリ画面



図 4. PicUp!の Web ページ画面

本システムの開発により、野外活動や調査活動などで画像データを容易にサーバーに掲載し、他者と共有できるようになった。PicUp!アプリを使うことで、これまでのデジカメで写真を撮り、パソコンを経由してサイズ縮小の後、アップロードするといった手間が大幅に簡略化できる。さらに Web 上に掲載するによって、ユーザー間で画像共有ができ、メモや相互評価などのコメントも残せるようになっている。文字データ以外の情報共有によって学習方法の拡大や記録の増加、コメントづけを通じた学生間でのコミュニティ形成が期待できる。

## 2) 情報一覧システム

前項の画像アップロードシステムで蓄積した画像だけでなく、文字データやファイルなども含めた学習成果物の集約場所として扱える情報一覧システムの開発を行った ( <http://sns.bundai.net/> )。



図 5. 情報一覧システムの操作イメージ

本システムでは「PicUp!」よりアップロードされた画像、Twitter、ブログ型 SNS (OpenPNE で構築)、メールなどカラムに表示させる (図 5: 中央のカラム部分)。また、ユーザー設定した目的や計画に沿って Web サービス上の情報やファイルをドラッグ&ドロップで集約できるようにした (図 5: 下部の枠内)。

本システムの特徴は、正課外時間を含めた学生生活全般にわたって情報の蓄積および蓄積した情報・ファイル活用の集約・選別・関連づけ・コメント入力によるふり返りを支援する (図 6)。

さらに、各データファイルやプロジェクト (ファイル選別先のまとめり) に対して、他のユーザーがコメントをつけることができ、ユーザーの学習やふり返りを支援する仕組みを有する。

[ メイン画面 ]



[ プロジェクト管理画面 ]



図 6. 情報一覧システム画面

本システムにログインするための ID とパスワードは、メディア・IT 活用部門で発行している。  
(連絡先) メール: suemoto@oita-u.ac.jp, 電話: 097-554-7069

### (5) WebClass ポートフォリオ・コンテナ利用講習会の実施

本学の情報基盤センターでは学習管理システム WebClass を運用している。WebClass には基本機能として資料ファイルの掲載、Web 掲示板の設置、テスト/アンケートの作成、メッセージ送受信などの機能が実装されている。本年度 10 月より、追加機能として「ポートフォリオ・コンテナ」が導入された。ポートフォリオ・コンテナは「ゴール設定-実施-評価-改善」の学習サイクルを想定しており、自己他者と他者評価を受けながら成果物を何度もバージョンアップをしながら質を高めていく授業スタイルを支援する機能である。

(参考) WebClass ポートフォリオ・コンテナを用いた授業展開

最初に教員が課題に対する目標の設定とルーブリックによる評価基準を設定する。受講生は自分の成果物（レポートやプレゼン資料など）をポートフォリオ・コンテナにアップロードする。これにより、自分、他の受講生、教員がその学生の成果物に対して評価コメントを書き込めるようになる(図3)。それぞれ「自己評価」、「相互評価」、「教員評価」と呼び、教員が示した評価基準表（ルーブリック）を参照しながら、評価コメントを入力する。各受講生は自分の成果物に対する評価でふり返りながら、改善しながら課題に取り組んでいく。

この WebClass ポートフォリオ・コンテナの利用説明として、第1回ポートフォリオ研究会（平成22年11月24日）、第3回ポートフォリオ研究会（平成23年2月8日）にて機能紹介と操作演習を行った(図4)。

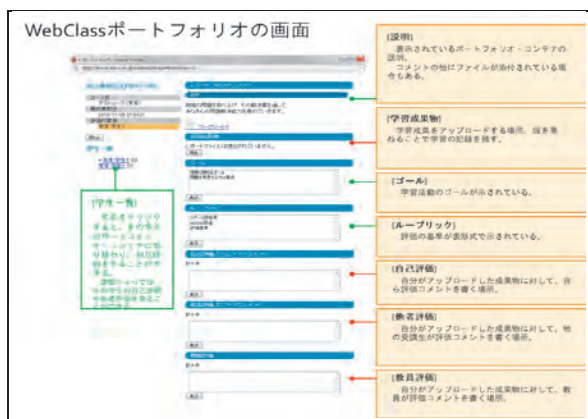


図3. ポートフォリオ・コンテナの画面説明

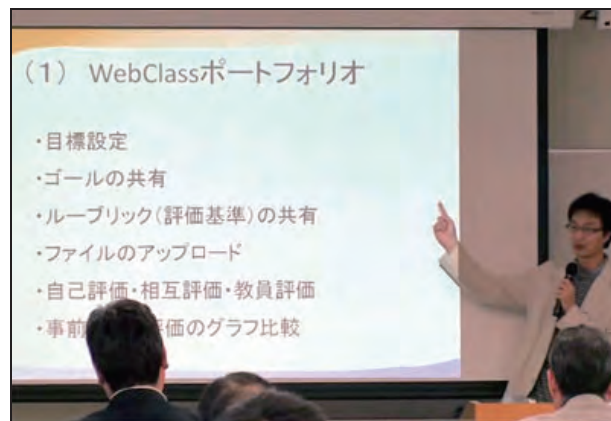


図4. ポートフォリオ研究会での紹介

本年度は「大分大学を探ろう（市原宏一先生ほか、受講生91名）」、「成人教育方法入門（中川忠宣先生、受講生52名）」の授業にて使用された。成人教育方法入門においては、「地域の問題を取り上げ、その解決策の提案すること」という課題に対し、グループを組んだ受講生が各グループの企画書を掲載し、その内容に対する自己評価、受講生間の相互評価、教員評価を受けながら学習を深めた。このような形成的評価を取り入れた学習スタイルの事例を収集し、学内に広報していくことが次年度以降の課題である。

【参考資料】 付録1. WebClass ポートフォリオ・コンテナ操作手順書

## (6) 教育支援機器の活用支援

### 1) クリッカー利用支援

本年度、特別経費「動機づけと形成的評価を重視した学生課程教育開発」にて、400台のクリッ

カー端末（教育福祉科学部・工学部・経済学部）に各 50 台、医学部に 100 台、教養教育棟に 150 台）を配備した。端末の保管は、教育福祉科学部・工学部・経済学部は学務係、医学部は学務課、教養教育棟は高等教育開発センターで行っている。学部に配備した端末数が使用予定数に届かない場合は高等教育開発センターで管理している 150 台より貸し出す体制を整えている（図 5）。

クリッカーの利用普及に向けて、操作講習会の開催、個別相談、クリッカー紹介ビデオの制作を行った。

操作講習会は教養教育棟（2010 年 9 月 27 日）、教育福祉科学部（12 月 9 日(木)に）、工学部（12 月 13 日）、経済学部（12 月 14 日）にて計 4 回行い、いずれも 10 名程度の教員が参加した。クリッカーの概要説明と他大学で事例紹介を行った後、実際に付属ソフト「TurningPoint2008」をインストールしたパソコンを使って質問スライドの作成とクリッカー端末からの反応を体験してもらった。

講習会以外でも教員の依頼に応じ、研究室に赴いての利用相談を行っている。本年度は 8 件の相談に対応した。その後、担当の授業でクリッカーを使うため、高等教育開発センター室に端末を毎週借りに来る教員もおり、授業方法の改善のひとつとして活用されている。

クリッカーの紹介ビデオは、クリッカーの概要、ソフトの簡単な使い方、大分大学での事例紹介を盛り込んだ 7 分 12 秒の紹介ビデオであり（図 6）、高等教育開発センターのホームページより視聴できる（[http://www.he.oita-u.ac.jp/fd/gakunai/FD\\_clickerPV.html](http://www.he.oita-u.ac.jp/fd/gakunai/FD_clickerPV.html)）。

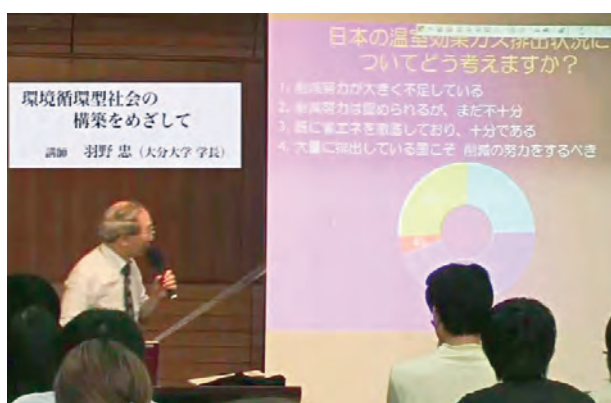


図 5. クリッカー活用授業

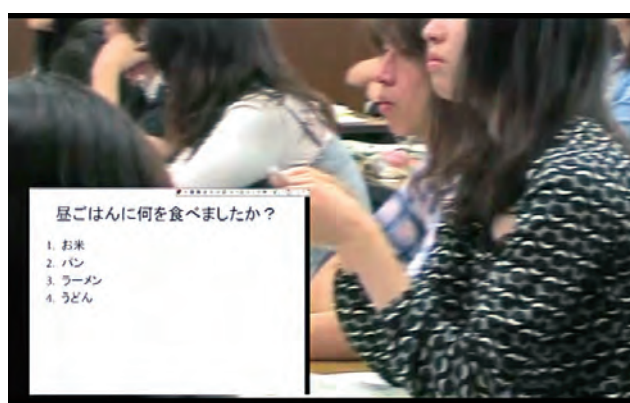


図 6. クリッカー紹介ビデオ

【参考資料】 付録 2. 第 60 回学長定例記者会見

## （7）学生スタッフの育成

本学の学生をアシスタントとして委嘱し、高等教育開発センターの事業執行に必要な補助業務を担当してもらっている。主な業務はグローバルキャンパスの運用で必要となる授業のビデオ収録や編集や Web ページの作成、各種データ入力、受講生学習支援、教室機器操作支援などで、本学の学長裁量経費をはじめ、高等教育開発センター運営経費、概算要求経費などの各方面から予算支援を受けている。本年度は 17 名に委嘱し、業務遂行にあたっての技術的な指導を行っている。

学生スタッフが昨年度に引き続き、「こんな授業は NO! 大分大学版大学授業 NG 集 2」を作成し、本年度の「きっちよむフォーラム」において発表した〔代表報告者：廣岩喜奈（経済学部 3 年）、森



裕生（工学研究科2年）]。これはFDとしてだけでなく、彼らの学生スタッフとして活動の場とビデオ撮影・編集技能を生かした成果とも言える。

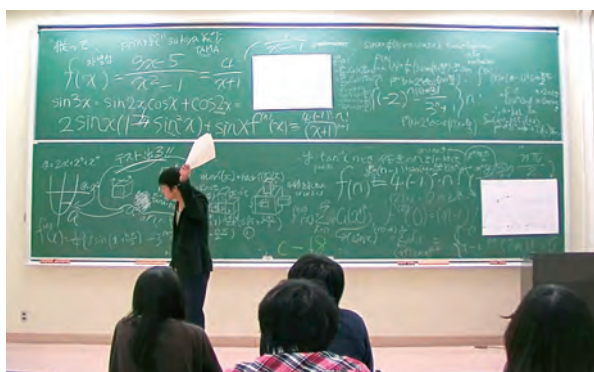


図7. ビデオ撮影風景

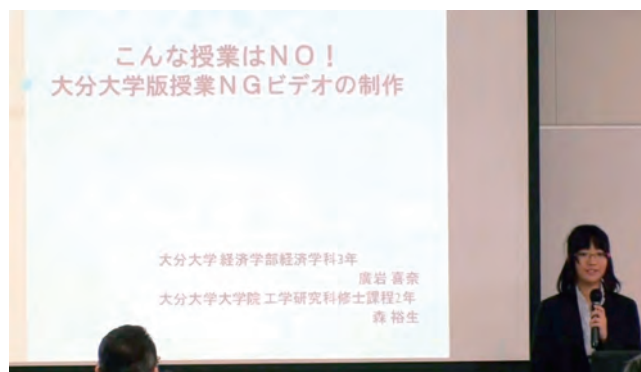


図8. 学生スタッフの報告

## （8）メディア・IT活用における国内の動向～研修・会議を通して～

### 1) 研修会名：第1回 Mahara オープンフォーラム

主催：Fレックス

期日：平成22年10月2日（土）

会場：アオッサ（福井県）

近年、高等教育における質保証が課題となっており、高等教育機関ではアドミッションポリシーからディプロマポリシーを明示するとともに継続的な学習支援体制の構築が必要とされている。カリキュラムポリシーを構成する個々の授業においても質保証とエビデンスにもとづいた教育改善が求められ、その手段のひとつとしてポートフォリオが有用視されている。そのため、多くの大学でeポートフォリオシステムの導入が試みられている。

本フォーラムでは、オープンソースのeポートフォリオシステムである「mahara」を活用した教育実践に焦点をあてている。maharaはシンプルな機能をもち、運用が容易であると同時に、他者との共有機能があり、相互コメントを用いた学習が可能である。さらにオープンソースであるため、市販されているポートフォリオシステムよりも導入コストが少ないといったメリットがある。しかし、シンプルで自由度が高いため学習者への方向づけが難しい場合があるとともに、オープンソースであるためにトラブル時の対処はもっぱら運用者自身が行わなければならないなどのデメリットも存在する。本フォーラムの目的はmaharaを活用した実践例の共有を通して、日本におけるmaharaの知見を集積するとともに、今後のmaharaおよびeポートフォリオシステムを活用教育の発展に寄与することである。

基調講演では東京学芸大学の森本康彦氏が、行動主義的な教育観から構成主義的な教育観へとパラダイム転換が起きてきたこと、教師の役割が知識の伝達者から理解を導くファシリテーターと移行してきたこと、学習者を適正に評価するためある時点でのテストによる客観的評価テストだけでなくパフォーマンス評価が必要であること、その際的手段としてポートフォリオが有効性をもつ

ことなどについて説明を行った。併せて、ポートフォリオ利用者の陥りがちな状態についても言及した。すなわち、ただレポートや記録をため込むだけでリフレクションを起こさないポートフォリオは有用性をもたないこと、「目標を設定し、活動し、評価をうけ、改善し、再度目標を設定していく」という学習サイクルを回していける教育課題を与えないとポートフォリオを十分に活用した学習になりにくいことである。

紙媒体のポートフォリオはこれまでも活用されてきたが、学習者間で相互評価が行いづらい点で構成主義的な学習にはなりにくい。それを補うためにインターネット上で相互閲覧可能な e ポートフォリオの活用が有用視されている。学習者は他の学習者から評価を受け、自身の学習に対してリフレクションを起こし、次の改善につなげていく過程に新しい学びが発生し、より効果的になっていく。教員にとっても、紙以外で記録される学習者のパフォーマンスを把握し、評価結果の説明するためのエビデンスとなる。ただし、森本氏は「e ポートフォリオも教育手段のひとつであり、学習の主役である学生に学習のスパイラルを起こさせることが重要」と総合的な教育のデザインの重要性を結論づけた。

続いて熊本大学総合情報基盤センターの久保田真一郎氏より、mahara の主要な機能を用いてどのような教育活動が可能なのかを実践例と共に紹介された。Mahara に「ビュー」と呼ばれる掲示スペース（ファイルや文書の記述など）がある。学習者が各自の「ビュー」を作成できるだけでなく、グループとして「ビュー」を作成することができる。これにより、グループワークにおける共有ポートフォリオが作成できる。久保田氏はこの点に mahara の有用性を感じ、実践に取り組んでいる。

久保田氏は学生に自己調整的な学習を促すため、単に履歴を残すのではなく、「ゴールを立てる－計画は自分で考える－失敗したら、対面でリフレクションを考えさせる」という方向で指導をしている。現時点では、画像表示が小さい、スケジュールを共有する機能がない、検索機能が弱いなどの問題点があるため、プラグインを開発するなどを行っているとのこと。

三番目に酪農学園大学の遠藤大二氏より、mahara を導入してみたの実感について報告がなされた。学生にとってのメリットが認識されない間は全く利用が進まないとの経験から、就職募集ビデオを掲載することやエントリーシートの作成などの動機づけの実践例や利用手順書の作成など具体的な導入過程についての知見が紹介された。遠藤氏は「自分のゴールを載せたとき、成績を載せたとき、リクルートの時にそれに達しない自分を見て自信をなくすが、記録をもつことで、ベストではないが、悪くはない自分が見える」と述べている。これはポートフォリオを用いた継続的な記録や活動が本人にとっても進路や就職に対して大きな支援になりうることを裏づけると思われる。

最後に仁愛女子短期大学の田中洋一氏より、F レックス内で mahara を活用した授業実践について紹介がなされた。メディアリテラシーを涵養する 15 名のゼミで、調査・検討・記述・発表のスキルアップを相互評価していく授業、ビジネス英語の学習で LMS 上に課題を提示し、ケースを読んだ後に企業調査を行い、調べたことと提案を Mahara に記述し、仲間のフィードバックをもらいながら改善につなげる授業、Web 制作演習として、LMS を授業用ポータルとして利用（Mahara や教員の課題提示ページなどへのリンク先として使う）し、確認テスト（LMS）・授業・授業演習・振り返りノート・制作課題（宿題）の流れで進行する授業が紹介された。F レックスでは mahara を用いて e ポートフォリオを活用してきたが、初期には e ポートフォリオの文化が浸透していないこと、mahara の仕組みはシンプルだが、利用におけるハードルがあること、「ビュー」を作成することによってリフレクションは行われるが mahara の支援機能が弱いことが課題としてあげられた。今後

は取り組みの精度を高めるほか、他の教育機関での知見を情報共有していきたいとのことである。

## 2) 研修会名：学習成果に基づく学士課程教育の体系的構築 中間報告会

主催：熊本大学大学教育機能開発総合研究センター

期日：平成22年12月21日（火）

会場：熊本大学（熊本県）

文部科学省大学教育推進プログラム（GP）のひとつに熊本大学の「学習成果に基づく学士課程教育の体系的構築」が採択されている。その一環として、3講演からなる本報告会が実施された。

まず、首都大学東京の大森不二雄氏より「学士課程の教育成果とeポートフォリオに期待されるもの」と題した講演が行われた。近年、中央教育審議会の「学士課程の構築に向けて（答申）」（2008年12月24日）にて「学位授与の方針」、「教育課程編成・実施の方針」、「入学者受け入れの方針」などの明確化が示され、大学等で様々な取り組みがなされている。大森氏は「やることはやるがその目的はうまく共有されていないのではないか」と問題意識をもつ。また、同答申にて学士力という参考指針が示されたものの、実際にどのように学士力を身につけさせるかについては明確な解は存在しておらず、各大学が行う教育プログラムにゆだねられている。そのため、人材養成の目的に向かったインフラ整備や授業カリキュラム、学習評価、組織管理、財務管理、人材資源管理などのシステムの統合モデルが必要であると指摘した。

また、日本の大学生は世界と比較してあまり勉強時間を確保していないというデータから、「そもそも学習しなければ、学習成果があるはずがない」と危惧する。大森氏は学生を学習に動機づける仕掛けとしてポートフォリオを期待している。現在はパフォーマンス“評価”としてポートフォリオを活用する実践が数多く報告されているが、何よりもまず学習に向かわせるための仕掛けが必要である。獲得したい学習成果を考え、その目標実現のためにどのような科目をとるかを考え、達成状況をふり返り、さらに改善を促す仕組みとしてポートフォリオを活用する。これらを考えること自体も学習であり、そして学習記録として残った物は実証的な成果として就職活動に活用できる。

講演の最後に、大森氏はダメなeポートフォリオとして以下の5点をあげている〔(1)誰も観ない膨大なデータの山、(2)意味を読み取れない無味乾燥なデータ集、(3)雇用者が見向きもしない内容、(4)学生がリフレクションに活かされない内容、(5)教員に追加負担を求めるシステム〕。

次に山形大学の松田岳士氏より「山形大学におけるeポートフォリオ」と題する山形大学のeポートフォリオシステムの特徴および現状の課題などに関する講演がなされた。

山形大学のeポートフォリオシステム開発の背景には、学士課程到達目標の明示と公開義務化への対応に加え、カリキュラムの目的・目標やそれを構成する個々の授業の位置づけるにも関連して体系化された学士課程教育を支援する仕組みの必要が生じたことがあげられる。システムの大きな特徴は、プレゼンテーションポートフォリオであること、教務システムがベースとなっていること、負荷軽減システムとなっていることである。特に既存の教務データベースが基盤となっているため、教職員が全く新しいシステムの使用方法を覚えなければならないという負担や個人情報の議論を低減させている。このシステムによって、教員と学生の間の連絡や学習目標・キャリア目標が密に共有され、きめ細かい指導が行えるようになる。eポートフォリオを通じてさまざまな「見える化」を実現し、学生の内省やキャリア開発を促進する。アドバイザー教員にとっても学生指導に必要な

データが手元で閲覧でき、学生との面接に備えやすい。今後の課題として、求められる項目の優先度や使い方が異なるため学部、学科、コースごとの差異に対応すること、ポートフォリオシステムに形成的評価の結果をどのように反映させるかについて検討が必要とのことである。

最後に熊本大学の宇佐川毅氏より「熊本大学 e ポートフォリオの概要」と題する講演が行われ、開発進行中の e ポートフォリオシステムについての紹介がなされた。このシステムは熊本大学総合情報館構想 2010 の一環として総合的な学習支援インフラとして構築されていくものであり、リフレクションによる学習の深化、コンピテンシーの明確化、自己アピールへの活用、後輩の進路決定時の参考データ、大学としての到達度の評価や解析に使われる。また、卒業後の経歴や資格、研究、社会活動、卒業後単位取得の記録（LMS の生涯閲覧の提供）などにも継続して使用可能となっている点が特徴的である。報告時では、学士課程および JABEE などのコンピテンシーと講義の対応は十分にとれていないそうだが、これから整合性をとっていくそうである。既存のデータベースの収集機能を強化したり、LMS の成績データや履修情報の整理などシステム構築などの作業が必要となったりするが、表示については必要に応じて変更可能な作りをしていくとのことである。

### 【今後の方向性】

近年、高等教育の質保証が問題視されており、各高等教育機関にてさまざまな取り組みがなされている。この文脈において e ポートフォリオは大きな可能性を提示する。特に授業における学習支援のポートフォリオおよび大学教育におけるエビデンスやカリキュラムを通じたキャリア開発のポートフォリオについては、導入や活用が進んでいくであろう。

個々の授業において学生が教員の話す講義内容をただ受動的に聞くのではなく、示された課題や到達目標に対して「どのような道筋で到達するのか、その課程ではどのような活動を行うのか」を主体的に考え、「自己・他者・教員の評価」を受けながら、さらに「改善」につなげていくという学習スタイルの構築にポートフォリオ活用型の学習が有用視されるためである。ポートフォリオはパフォーマンス評価を重視する PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）とも親和性をもち、主体的で自律的な学習を促す仕掛けとなりうる。学生が主体的に学習を続けて行くには良質の学習コンテンツやメンタリング、インフラの整備などの要因を複合的に検討していく必要がある。それでも前述のフォーラムや報告会で述べられてきたように e ポートフォリオは学習サイクルを回し続けるためのインフラとして有用であり、各地でさまざまな授業実践が行われていることも十分にうなずける。特に第 1 回 mahara フォーラムでは、インターネットを通じて学習者が相互に評価をしあう方法は紙ベースで行う場合に比べて大量のリフレクションを誘発する可能性について言及された。学生に対していかに多くのリフレクションの機会を与えられるかを考えるにあたって、精密化した授業デザインやファシリテーションの能力が教員に求める能力としてさらに重要視されていくだろう。教員としても e ポートフォリオを活用してデジタル化された学習成果を残させることは、省スペースおよび長期保存可能な点で有利であり、エビデンスに基づく適切な評価や学習支援につながっていくことを助ける。このような学習者中心の授業や構成主義的な学習観の定着や有益な e ポートフォリオ活用型授業の展開を進めて行くには、教員や学生がそのメリットを十分に感じ取る文化の醸成が必要であり、特に初年次教育に組み込むなど早期に位置づけられていくべきだろう。

高等教育の質保証という観点からは、カリキュラムや学士課程教育全体にわたって長期的に活用されていく e ポートフォリオの重要性は極めて高くなると思われる。それは「大学教育の質をどう

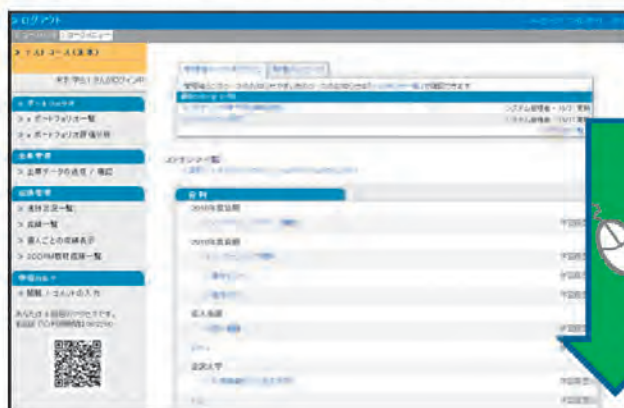
保証しているのかを示すエビデンス」になるとともに、学生にとっては「大学でどのようにキャリア開発を行うのかの道しるべ」となるためである。入学当初より将来なりたい自分を設定し、用意されたカリキュラム（または自分が選択する科目）について理解を深め、定期的なリフレクションを促す指導がなされていく。同時に大学が設定するディプロマポリシーや教育の目標に沿った学習がなされているかについても診断としてもeポートフォリオは活用できる。

ポートフォリオの種類として学生が開発するポートフォリオと大学がエビデンスとするポートフォリオは区別可能である。しかし、それらは表現の違いとして扱い、運用システムとしては同じ出所にする方が負担を減らす意味で望ましい。すなわち、学務情報や教務情報、成績情報やキャリア開発情報など各部局に散らばっている情報を統合的に連携されている大学内の統合情報システムは今後必須となっていくだろう。

# eポートフォリオ・コンテナの利用

## A 成果物をアップロードする

(1) WebClassのメニュー画面で右側を下にスクロールする



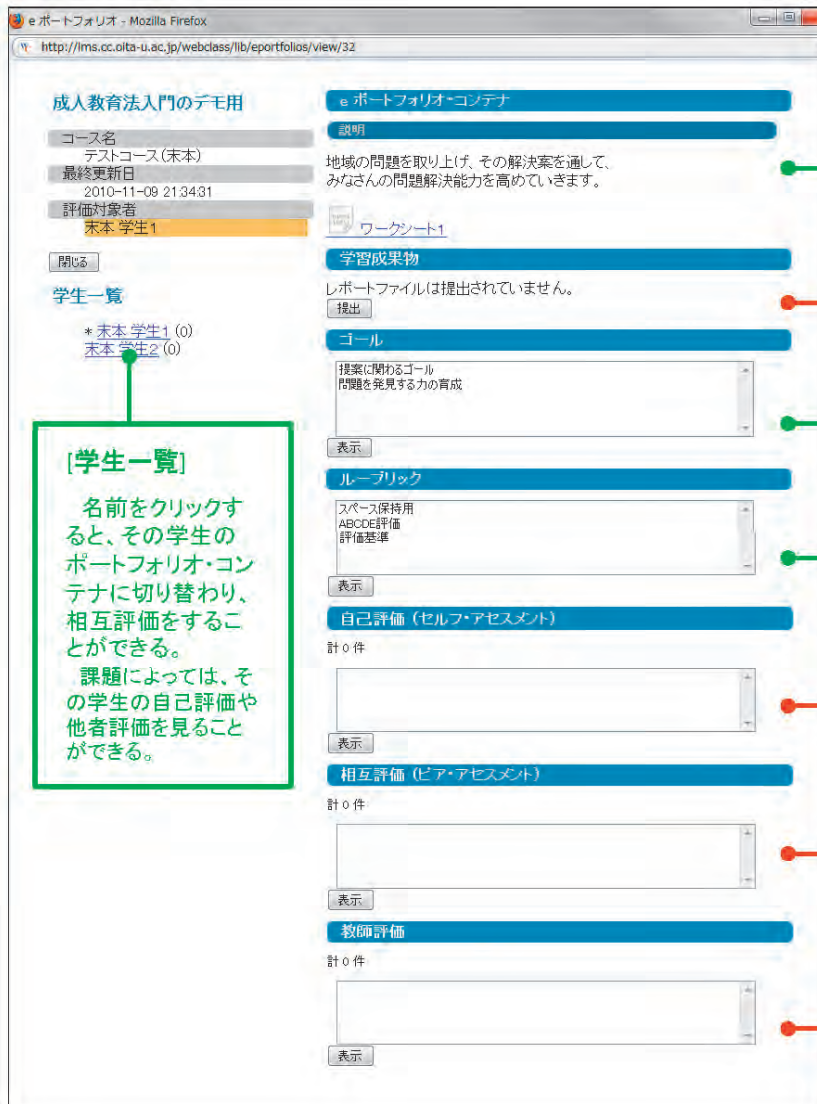
下にスクロール

(2) ポートフォリオコンテナより、該当のタイトルをクリックする



eポートフォリオ・コンテナが表示されるまでに数秒かかる場合があります

# eポートフォリオコンテンツの画面



## [説明]

表示されているポートフォリオ・コンテンツの説明。コメントの他にファイルが添付されている場合もある。

## [学習成果物]

学習成果をアップロードする場所。版を重ねることで学習の記録を残す。

## [ゴール]

学習活動のゴールが示されている。

## [ループリック]

評価の基準が表形式で示されている。

## [自己評価]

自分がアップロードした成果物に対して、自ら評価コメントを書く場所。

## [他者評価]

自分がアップロードした成果物に対して、他の受講生が評価コメントを書く場所。

## [教員評価]

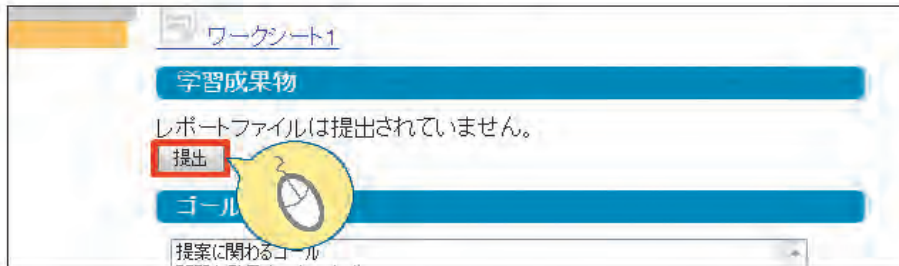
自分がアップロードした成果物に対して、教員が評価コメントを書く場所。

## [学生一覧]

名前をクリックすると、その学生のポートフォリオ・コンテンツに切り替わり、相互評価をすることができる。

課題によっては、その学生の自己評価や他者評価を見ることができる。

(3) [学習成果物]にある[提出]ボタンをクリックする



(4) 「タイトル」と「ファイルへのコメント」を記述した後、「ファイルを選択」して[アップロード]ボタンを押す



ヒント:「ファイルへのコメント」は5～15文字程度のメモ書きを残すと成果物を更新していった後の目印となって便利です。

(5) アップロードの完了を確認し、[閉じる]ボタンを押す





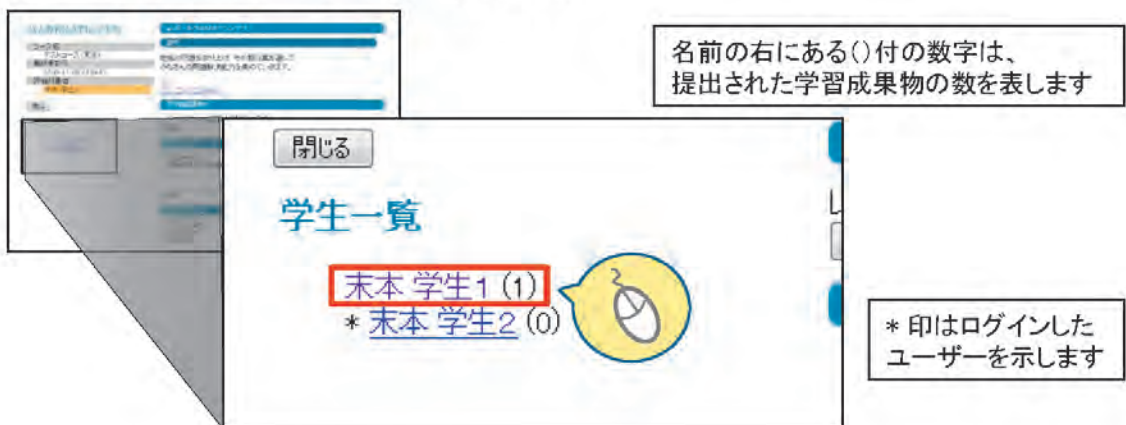
**D** 他の受講生の成果物を評価する

→「相互評価」を指します

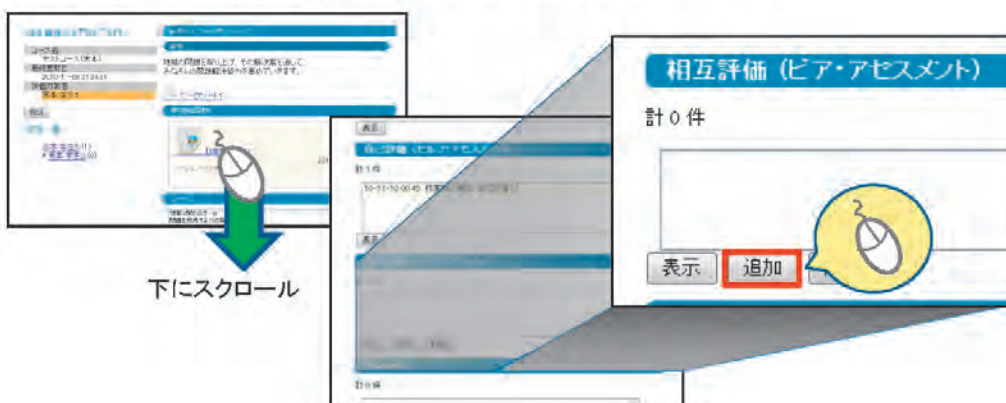
(1) ポートフォリオ・コンテナを開く



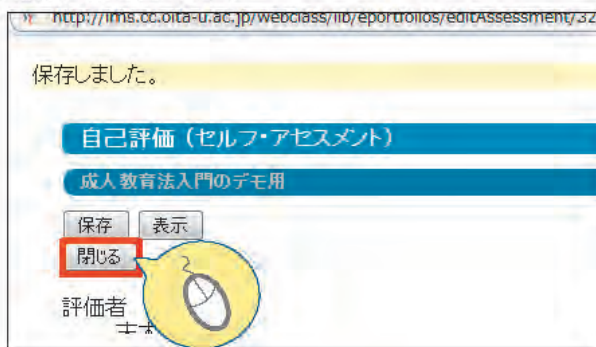
(2) 学生一覧から評価する受講生の名前をクリックする



(3) 対象の学生のポートフォリオ・コンテナに切り替わるので、画面下にスクロールし、「相互評価」にある[追加]ボタンをクリックする



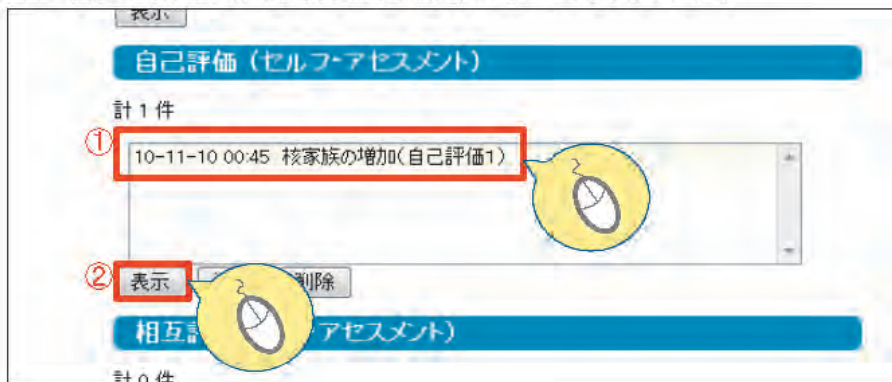
(3) [閉じる]ボタンを押す



← (画面上部に「保存しました。」の表示を確認しておく)

**c** 自己評価を確認する

(1) 自己評価より、確認したい評価を選び、[表示]ボタンをクリックする



(2) 内容を確認し、[閉じる]ボタンをクリックする



この操作手順は自己評価の他に、  
相互評価・教員評価でも同じです

## B 自己評価をつける

(1) 自己評価の[追加]ボタンをクリックする

(注) 事前に「学習成果物」にて  
ファイルをアップロードしている必要があります

自己評価 (セルフ・アセスメント)

計 0 件

表示 追加

相互評価 (ピア・アセスメント)

(2) 評価する「学習成果物」を選択し、「タイトル」の記述、ルーブリックでのチェック、[ふり返り]のコメント記入し、[保存]ボタンを押す

自己評価 (セルフ・アセスメント)

成人教育法入門のテーマ用

保存  
開じる

評価者 末本 学生1  
評価対象者 末本 学生1  
学習成果物を選択  
移譲済のファイル

①

②

③

④

⑤

**[学習成果物の選択]**  
評価の対象とするファイルを選択する。すぐ右の[ダウンロード]ボタンで内容を確認できる

**[ルーブリック]**  
該当する評価にチェックを入れる(この項目がない場合もあります)

**[ふり返り]**  
ポートフォリオ学習の中心となる部分。必ず書きましょう。単に感想コメントを書くのではなく、どこが良くて、どこに改善が必要なのかを記述しましょう。現時点で足りない何かが見えてくるのが理想です。  
次につながる発見やメモが後の成長の糧となるでしょう。

4

- (2) 評価する「学習成果物」を選択し、「タイトル」の記述、ルーブリックでのチェック、[ふり返り]のコメント記入し、[保存]ボタンを押す

**相互評価 (ピア・アセスメント)**  
成人教育法入門のデモ用

保存 閉じる

評価者 末本 学生2  
評価対象者 末本 学生1  
① 学習成果物を選択  
核家族の増加 ダウンロード

**[学習成果物の選択]**  
評価の対象とするファイルを選択する。すぐ右の[ダウンロード]ボタンで内容を確認できる

**[ルーブリック]**  
該当する評価にチェックを入れる(この項目がない場合もあります)

② タイトル  
※何れも入力して下さい

③ 評価

大項目	小項目	A	B	C	D	E
レベル評価	評価	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

保存 閉じる

**[ふり返り]**  
ポートフォリオ学習の中心となる部分。必ず書いてあげましょう。差し障りのない感想を書くのではなく、その学生のどこが良くて、どこに改善が必要なのかを記述してあげましょう。差し障りのない感想はその学生にとって学びが起きりません。また、他人を適性に評価することは自分の学習でもあります

- (3) [閉じる]ボタンを押す

http://ims.cc.ocha-u.ac.jp/webclass/lib/eporfolios/editAssessment/32

保存しました。

**自己評価 (セルフ・アセスメント)**  
成人教育法入門のデモ用

保存 表示  
閉じる

評価者 末本 学生2

← (画面上部に「保存しました。」の表示を確認しておく)

### E 自己評価を確認する

この操作手順は、「(C) 自己評価を確認する」とほぼ同様なので、省略します

## 付録2. 第60回学長定例記者会見報告（大分大学ホームページより）

### （事項2）講義が変わる！聴衆応答システム「クリッカー」導入

本年6月、大分大学では「クリッカー」と呼ばれるレスポンスカード150枚を導入しました。

クリッカーとは投票-自動集計システムのひとつで、教員の質問に対して学生がリモコンで回答するというクイズ番組のようなやりとりを実現する仕組みです。

教員が選択回答式の質問を出題し、学生はその選択肢から回答と思う番号をリモコンのボタンで答えます。回答は無線信号としてパソコンに届けられ、自動で集計されます。数秒後には集計結果がグラフとして表示されます。

クリッカーの使用は、講義内で学生の理解度や意見の割合を把握する有効な手段とされています。また、匿名での回答も可能であるため、発言を恥ずかしがる学生であっても意見表明が容易になります。そのため、クリッカーは教員と学生の双方向性を高めるツールとして注目されているのです。

平成22年度前期には、羽野学長をはじめ数名の先生がクリッカーを活用した授業実践に取り組みました。

写真：大分大学 高等教育開発センター 主任 香雄講師

【クリッカー（KEEPAD JAPAN 社）】

- ・手のひらサイズのリモコンで操作
- ・PowerPoint に組み込んで使用
- ・数秒で集計、グラフ化
- ・匿名で回答可能

大学連携授業「大分の人と学問」では、羽野学長がクリッカーを活用した講義を行いました（平成22年6月10日）。学長は受講生70名に対し「環境問題に関心があるか？」、「日本の温室効果ガス排出状況についてどう考えますか？」などと問いかけながら、環境問題に関する現状やゼロエミッションを目指した技術開発などについて解説をいたしました。講義後、学生から「自分とは違った意見をもっている人がいる」、「自分の位置づけが分かってよい」など、クリッカー活用に対する好意的な感想が多数得られました。

今後もクリッカーを活用した授業を普及させ、教員と学生にとって有益な授業展開を追求していきたいと考えています。

[詳細はこちら](#)

講義が変わる！聴衆応答システム「クリッカー」導入

（ <http://www.oita-u.ac.jp/01oshirase/kaiken/2010-09.html> ）

また、クリッカーの導入にあたっては大分放送から取材をうけ、授業風景とともに10月7日(木)のOBSイブニングニュースにて紹介された。

### 3. FD・授業評価部門

#### (1) 部門活動の目的

本部門の主な活動は、本学の教員の教育改善、教育方法の開発のために教務部門会議の要請を受けて、全学の教員が3年に一度のFD活動に参加するための事業の企画実施するものである。また、各学期に、全学において統一された授業評価アンケートの立案・作成及びアンケート調査結果の集計と分析を実施している。加えて平成19年度より、大学院部門会議の要請を受けて、年間2回のFD講演会を実施している。同時に、本学の中期計画・目標において、大学院担当教員および学部担当教員両者を対象としてセンターが取り組むよう定められている実施事項をふまえて活動している。

#### (2) 部門会議

##### 第1回

日時：平成22年6月3日（木）9:10～10:10

場所：且野原 教養教育棟会議室2, 挾間 病院第1会議室

出席者：牧野（部門長）、末本（高）、甘利（教）、市原（経）、高見（経）、横井（医）、緑川（工）各委員

陪席者：小林（事）

##### ・議題1. 本年度のFD事業について（資料1）

別紙資料1について説明があり、9月に大学院FD講演会「高度な職業能力を開発する実践教育」を実施すること。講師や内容はセンターに一任し、大学院部門会議に諮ることです承された。

次に、「きっちよむフォーラム」と「授業公開・授業検討会」は下記のとおり委員で分担して内容を検討することとし、「きっちよむフォーラム」は次回部門会議を経て、7月の全学教育機構運営委員会に諮ることです承された。

また、市原委員から別紙資料に添って「動機付けと形成的評価を重視した学士課程教育開発一ポートフォリオ」事業についての説明があった。

- ・きっちよむフォーラム担当…牧野、末本、市原、甘利
- ・授業公開・授業検討会担当…牧野、末本、高見、横井、緑川

##### ・議題2. 授業改善のためのアンケートについて（資料2）

別紙資料2について説明があり、アンケート依頼文書に記入済みマークカード用紙の提出期限を加えることです承された。

##### ・報告事項. 昨年度の部門活動（資料3）

部門長から別紙資料3について報告があった。

##### 第2回

日時：平成22年7月8日（木）9:10～10:00

場所：且野原 教養教育棟会議室2, 挾間 病院第1会議室

出席者：牧野（部門長），末本（高），甘利（教），市原（経），高見（経），横井（医），  
緑川（工） 各委員  
陪席者：守田（事）

・議題 1. きっちよむフォーラム 2010 について（資料 1）

教員による実践報告については，次回教養教育運営会議にて各学部教務委員長に諮ること，学生による提案については，各学部の事情を踏まえつつ，各学部 1 名以上を目標に 7 月 12 日から学生募集を教員側からの働きかけにより行い，7 月 21 日昼休みに第 1 回の説明会を開催することとなった。

・議題 2. 授業公開・授業検討会 F D ワークショップについて（資料 2）

資料 2 について説明があり，12 月に実施すること，対象授業は教育機器を利用とした授業とすることとした。具体的な公開する授業等については，今後さらにワーキングで検討を行うこととなった。

・報告事項.

大学院 F D 講演会「大学院におけるキャリア教育とは（仮題）」を奈良女子大学教授出田和久氏に講演をお願いし，9 月 29 日（水）の実施に向け準備を進めている旨の報告がなされた。

### 第 3 回

日 時：平成 22 年 10 月 22 日（金）13:00～

場 所：旦野原 教養教育棟会議室 2， 挟間 医学図書館視聴覚室

参加者：牧野，甘利，松岡，横井，市原，緑川，末本

・議題 1. 「きっちよむフォーラム 2010」について

第 1 部については，学習ボランティアによる授業実践，学生の制作による授業 NG ビデオの 2 件の報告とすることとなった。また，学生の準備にあたって，報告の予行演習等でワーキンググループが支援することが提案され，了承された。

第 2 部については，

1. 特別概算によるポートフォリオの導入に関する報告を確定した。
2. 教育福祉科学部で導入される「履修カルテ」について，可能であれば報告。
3. 学習ボランティアについて，教員からの報告。（可能であればプログラムとする）

以上のように了承され，教育福祉科学部所属教員と，中川先生（本センター）による学習ボランティアの報告の可能性については，部門長が打診することとなった。

・報告事項.

資料に基づき，FD 講演会「学生のメンタルヘルス」について，部門長から報告があった。

### 第 4 回

日 時：平成 22 年 12 月 10 日（金）13:00～

場 所：旦野原 教養教育棟会議室 1， 挟間 医学部多目的会議室

・議題 1. 日本人学生による英語スピーチコンテスト 2010 について

昨年度のスピーチコンテストの実施概要と、本年度の計画について提案があったが、協議の上、本コンテストは部門との関連性が低いことから、センター独自の行事として開催することとなった。日程については、行事予定表をもとに、各学部の行事等を勘案し、2011年3月3日が適当であると提案された。

・議題 2. 来年度以降の FD・授業評価部門関連行事について

本年度の実績が説明された。協議の上、例年と同様の計画とすることとなった。

・報告事項.

「きっちよむフォーラム 2010」及び「学生のメンタルヘルス講演会」について、部門長より実施の概要が報告された。

### (3) 第 1 回クリッカー研修会

日時 2010年9月27日 16時30分～

場所 教養教育棟会議室 1

講師 末本哲雄氏 (高等教育開発センター)

本センターに新たに導入された機器「クリッカー (キーパッド社制)」について、実演をもとに、その機構、授業での活用方法について、講師の末本哲雄氏により研修が行われた。

最初にクリッカーについて、聴衆の回答をリアルタイムで自動集計する投票システムであり、PowerPoint へ組み込むことで、問題と回答の提示が効果的に行えることが、実演とともに説明された。

次にクリッカーを授業で導入する際の留意点が紹介され、さらに、これまでの授業実践をもとに、(A) 理解度のチェック、(B) 意識調査、(C) コミュニケーションの改善という 3つの利用方法について、具体的な授業事例をもとに解説があった。

講師の講演の後、参加者による討論が行われた。クリッカーの活用は、学生とのコミュニケーションを図りながら授業を進めるための有効なツールとなることは間違いないが、それだけに頼らず、学生から直接意見を拾う教師の力量を高めることも重要であること。PowerPoint を使っている教員にとっては導入の敷居は高くはないと考えられること。学内の普及のためには、台数、配布と回収の手間、効果的な問題作成などの課題があることが議論された。

### (4) 大学院 FD 講演会

平成 19 年度より施行された大学院設置基準の改正により、研究科や専攻ごとに人材養成に関する目的を学則等に定めるよう規定された。そこで、平成 20 年度「組織的な大学院教育改革支援プログラム」に採択された奈良女子大学大学院から、「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」(大学院 GP) 代表者である出田和宏先生を講師としてお招きし、キャリア教育に対する考え方と奈良女子大学大学院における大学院 GP を契機とする実践、実際の学生の就職先や就職活動を通じて明らかになった課題等について紹介いただく企画として実施した。

日時 2010年9月29日(水) 午後 13時～14時30分



場所 教養教育棟32号教室(旦那原キャンパス)  
看護学科211教室(挾間キャンパス:遠隔配信)

講師 奈良女子大学教授 出田和久氏 (GP 代表者)

題目「大学院におけるキャリア教育の実践と課題 —奈良女子大学での経験から—」

### ＝講演の概要＝

我が国の大学院教育に関する近年の動向と改革の進捗状況が概説され、大学院の多様化と特徴の明確化、高度専門職業人の養成、国際競争力の維持向上のために大学院教育の実質化が最重要課題であることについての解説があった。そこで、奈良女子大学大学院での取り組みとして、高度専門職業人養成のために大学院教育課程を組織化し、学習過程を管理することで高度な知識やスキルを修得させるとともに問題解決能力を向上させたこと等が実践例をもとに紹介された。大学院でのキャリア教育とは社会で自立できる能力の養成であり、就職指導ではないこととの言及もあった。

講演後の意見交換では、キャリア教育と専門性との連続性、学部卒3年目と大学院修了1年目との違い、大学院を終了することのメリット等について議論が交わされた。

所 属	氏 名
教育福祉科学部	池崎八生, 衛藤裕司, 栗栖由美子, 久保加津代, 高濱秀樹, 吉岡義正
経済学部	合田公計, 吉田初志,
工学部	井上正文, 上見憲弘, 原恭彦, 越智義道, 藤田米春, 石川雄一, 秋田昌憲 鈴木義弘, 菊池健児,
その他	末本哲雄,

### 参加者の感想

- ・理系大学院にも共通した事項の説明もあり、有益だった。
- ・教育プログラムの内容を説明していただいたので、興味深く聞くことができました。問題解決プロセスを身につけさせるのが大学院の教育の重要な点だと私も考えています。大学院進学者が多くなっている現状では、学生から見て学部教育との違いが明確になりにくいと感じています。大学院では自分で研究するための基礎力を特に身につけるという意味では、今も代わらないとは思いました。ただ、どこまで「カリキュラム」として行うかは難しいところだと思います。
- ・キャリア教育が就職指導ではなく、カリキュラム改革につながっている点が興味深い講演会であった。
- ・他大学と文科省とのやりとりで使用された基礎概念、キーワード等を感じた。また、人文系大学院と理系大学院教育プログラムの差を知ることができた。
- ・出田教授が文系で特に女性に特化しているため工学部の直接的参考にならないと予想されることは承知で出席したわけであるが、学生に対して実践的な刺激を与えるという手法を紹介していただいたという点については、今後、直接的な応用が難しいにしても非常に参考になった。ただ、学生の将来的進路への動機付けについては共通の課題が残るのではないかという印象である。
- ・カリキュラムの具体的な説明があり、勉強になった。
- ・現在の大学院教育の課題が（私の中で）整理され、大変勉強になりました。個人レベルで取り組みがはじめられることもありますが、系統的・組織的な教育課程が構成されている必要があります、全

学的な取り組みが必要であると感じました。ありがとうございました。

- ・専門性と就職がなかなか結びつかない現状で実践的な科目を多く導入されており、とても興味深くうかがいました。
- ・ありがとうございました。キャリア教育は「就職指導ではない」「己を知る」「コミュニケーション能力育成」が大切だと私も思います。しかし、なかなか難しい事です。大学、大学院で実践スキル養成がそんなに大切かと思っていましたが、プロセスが大切で、そのなかで己を知る、コミュニケーション能力が可能なのかなと思いつつうかがいました。
- ・キャリア教育の全体像が分かりやすく説明いただいた。プログラムと成果の相関が見えにくいのはどの大学においても同様であろう。学生が自ら動くような授業設計が必要と思われる。
- ・本学研究科においても改革していかなければならないと思った。文系の大学院の課題は共通していると感じた。個人で行っている普通の指導をいかに組織で行うシステムに変えていくかが簡単なことのように見えるが、うちではできていない。
- ・多様な大学院の現状・大学院教育の目的、課題などについて、体系的な説明があり、分かりやすい講演であった。大学院が社会から求められているニーズと大学院教育の現状との乖離について改めて認識させられ、今後の授業等の充実に向けて気が引き締まる感じであった。

## (5) 大学院学部合同FD講演会（学生のメンタルヘルス講演会）

学生の健全な生活を支援するためには、本学の教職員が学生の変調を早期に捉え、適切に対応することが重要である。この講演会では、大学の保健管理センター所長等の学生のメンタルヘルスに関する第一人者を招き、今日的な学生気質、具体的な症例や対応の方法等の最新の知見や、大学生に接する大学関係者が知っておくべき事項を講演いただき、学生支援に資することを目的とする。

題目 「発達に偏りをもつ学生への支援」

講師 鹿児島大学保健管理センター所長 森岡洋史教授

日時 2010年11月25日（木）、15時～16時30分

場所 教育福祉科学部第1会議室（旦野原キャンパス）、  
多目的会議室（挾間キャンパス：遠隔配信）

全国の大学に保健管理センターが設置された経緯とその必要性、保健管理センターの業務について概要の説明があり、とく業務内容に関して、鹿児島大学保健管理センターでは、定期健康診断時に、学生のデータをパソコン入力することで効率化に成功していること、精神疾患別による利用状況についての紹介があった。

次いで、近年増えている学生の発達障害について、症状の説明と症例に基づく改善の事例について紹介があった。発達障害とは知的発達に大きな遅れはないがコミュニケーション、社会性に困難点が認められること。学業がはかどらず、教員から注意や叱責を受ける事の回避行動として「引きこもり」になりやすいこと、それが退学に直結すること等が紹介された。対策として、学生に寄り添うことで良好な人間関係を作り、適切な助言を与えること、担当教員へも理解を求めることなどにより卒業にこぎ着けた事例等が紹介された。また、発達障害の特性をよく知ることで、個人の特徴を生かして社会で活躍できること、孤立させないことが必要であるとの紹介もあった。

質疑応答の後、本学保健管理センター藤田教授より講演会のまとめとして、ぴあルームを活用し学生支援をお願いしたいとの挨拶があった。

最後に保健管理センター長寺尾先生より、発達障害についての知見は日に日に増えており、本日のお話で良く理解できたとお礼の言葉により、講演会を終了した。

所 属	氏 名
教育福祉科学部	衛藤裕司, 西本一雄
経済学部	宮町良宏, 石井まこと
医学部	志賀たずよ, 西村早苗, 木戸芳香
工学部	秋田和昌, 鹿毛一之, 岩本光生, 豊田昌宏
福祉社会科学部	平塚涼子,
その他	安東真紀, 多田桃子, 小林弘幸, 武宮律子, 栗崎薫, 山内美有紀 河野美奈, 坂井恵美子, 岡田正彦, 真部和昌, 大塚洋子, 牧野治敏

他：学生7名

#### 参加者の感想

- ・ 具体的症例の話であったので説得力がありました。
- ・ 実例に則した話で非常に参考になりました。
- ・ 大分大学としてどう取り組むのが課題ですね。卒業後は運を祈るということに安心しました。祈りたいと思います。
- ・ 貴重なお話をうかがうことができました。ありがとうございました。
- ・ 大学を無事に卒業できても社会に出てからはどうなるのだろうと疑問になりました。医学部は将来の道が決まっています。厳しい世界になります。甘やかしても良くないのか等、どこまで介入すればよいのか分からなくなることがあります。
- ・ 発達障害の特徴を知ることができました。「彼らを理解し、良き助言を与えるもの」がいればうまくいくということが心に残りました。大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 大変勉強になりました。FDということもあり教員向けの内容が強かったので、いつか職員目線での勉強会ができればと思いました。
- ・ 漠然とした認知処理の中で生きている方々の世界に耳を傾け、支援していくことの大切さを改めて学びました。ありがとうございました。
- ・ 大変有意義で貴重な講演でした。学生を愛されているその心情が心にビシビシ響きました。“発達障害は本当にいるのか?” 時折私の旨に去来する思い(疑問)でもあります。“助言する人(良きパートナー)が要る” 隣に座ったぴあルームのインターカーが泣いておりました。
- ・ 実際、ふだん接している学生にどの程度発達障がいのある学生がいるのか分からないのですが、支援の必要性を強く認識しました。ありがとうございました。
- ・ 大変おもしろかった。とても参考になった。どうもありがとうございました。ハンドアウトが欲しかったです。先生の学生さんに対する態度は全くすばらしい。こんなに熱心に指導されているなんて。
- ・ 大変分かりやすいお話でした。その上に私たちがどのような見方をしなければならないか、何を

- 考えるべきかなど、具体的に伝えて下さったように思います。発達障害の偏りのある学生を大学としてどう受け入れ支援すべきか、考えさせられました。ありがとうございました。
- 誰もが発達障害の特性を少なからず持っているというお話があり、とても参考になりました。今後、人と向き合っていく上で自分の特性や相手の特性を考えながら行動していくと、よりお互いを理解するのに役立つのではないかと思いました。ありがとうございました。
  - 外部講師の先生のお話を聞ける機会が少ないのでとても貴重な講演会であった。事例が詳しく載っており、分かりやすく勉強になりました。
  - 大学生にも発達障害のある人は多く存在すると思うので、様々な支援の実態についてお話を聞くことができ、とても勉強になりました。まずは多くの人が発達障害について理解することで、学生も過ごしやすくなるため、そのような知識を持っていくことが大切だと感じました。
  - 私は高校で教員をしています。今日のお話を伺って大学の方が高校よりもずっと発達障害の学生さんが困りを持つだろうと思いました。つまり、私たちが高校で生徒の困りを見過ごしているだろうと思いました。気づかせていただいて本当にありがとうございました。
  - 「発達障害的」な学生は実際に少なからず接しているので、重要な問題だと感じました。具体的にどのように対応したらよいかをさらに詳しく具体的に知りたいです。
  - 発達障害の人が生活の中でどういう障害を抱えているのかということが具体的によくわかった。一方で、発達障害の人が単なる自分勝手なだけではない、学生だというように誤解を生じやすい面があるということもよくわかった。また、非常に密な支援が必要であるということも学んだが、その支援を一人に対して行っていくことはとても容易なことではないということも感じた。
  - 今、学生と関わりを持っているだけに切に色々なことを感じ勉強になりました。何気ない会話のやりとりを大切にしたいと思いました。めげずに関係を深く取っていきたいと思います。ありがとうございました。
  - 講演をお願いした時から内容はある程度予想できたので、教員会議その他で再三呼びかけたのですが、時間が悪いため多くの教員に聞いていただけなく残念です。実際的には、そのような症状が出てきた場合の、親の理解卒業させた後の進路の問題、個々の対応についての各教員に対する学生の取り扱いの説得の仕方の問題等と、いろいろ伺いたいことはあります。また、機会があればと思います。
  - 具体的な事例の紹介と対応の様子は非常に参考になった。
  - アスペルガーの学生が研究室にいたのでとても役に立った。また、2年生の指導教員として成績不振者と面談していると、今回説明を受けた不登校学生の特徴と重なる学生も多いので、これからもぴあルームや保健管理センターと協力していただき、なんとか退学や不登校を減らせればと思っています。
  - 障害者の症例が多く非常に参考になりました。対応の難しさも分かりました。ありがとうございました。
  - いろいろな意味で大変勉強になりました。ありがとうございました。
  - 講演を聴いて、学生をしっかり見ることの重要性がよくわかった。教員として広い目で、授業や学生生活において学生の態度に注意する必要がある。一方的な指導はできないと思った。

## (6) 学内合同研修会「きっちよむフォーラム 2010」

本学での教育改善のための研修会として、本センターが毎年開催している FD ワークショップである。教員だけではなく学生教職員が一堂に会し、実践報告をもとに議論を深め具体的な教育改善のための方策を探るものである。また、今回は、特別経費による「ポートフォリオ研究会第 1 回学習会」も兼ねて開催することで、本研究会への参加者を募ることも目的としている。

日時 2010 年 11 月 24 日(水曜日), 13:10~16:30

第 1 部: 学生教職員教育改善研修会 (13:10~14:40)

第 2 部: FD ワークショップ「教育課題・教育実践検討会」(14:50~16:30)

場所 教養教育棟 35 号教室 (旦野原キャンパス)

多目的会議室 (挾間キャンパス: 遠隔配信)

### 第 1 部: 学生教職員教育改善研修会

演題 1. 「こんな授業は NO! 大分大学版授業 NG ビデオ Part2」の制作

発表者 廣岩喜奈氏 (経済学部学生), 森裕生氏 (工学研究科学生)

演題 2. 「学習ボランティア」の授業化 (企画・体験等の学びのサイクル) による教育効果と今後の充実方策

発表者 中川忠宣 教授 (本センター)

関法子氏, 川口亜由美氏 (教育福祉科学部学生; 「学習ボランティア入門」受講生)

演題 1 では、昨年に引き続き授業における NG シーンを学生によって再現した 3 種類のビデオ(学生の差別, 資料の文字の大きさと量, 授業内容と無関係な長話) が紹介された。視聴後の議論では、脱線話の時間はどれくらいなら許されるのか, 資料などの適切なサイズはどのようなものか, 山形大学が作成したビデオとの相違点は、などについて議論された。

演題 2 では、「学習ボランティア」として、本学教育福祉科学部附属中学校「サタデー・スタディー」に参加した事例について、本事業の意図, 参加にあたっての準備, 実際の活動, 検討課題について学生と指導教員双方から報告があった。報告後の意見交換では、指導内容の質を高めることや、ボランティア先を自ら探すことの必要性があげられたが、この実践は、学生の学習効果を高める一方で、生涯学習, 高等教育, 地域貢献を同時に達成できることで有意義であると確認された。

・参加人数 教員 15 名, 職員 2 名, 外部講師 1 名, 学生 35 名 計 53 名

○参加学生による, 第 1 部への意見・感想

- ・教育学部の学生と工学部の学生ではボランティアに対する考え方が異なると思う, 教育はボランティア活動が実習としての役割も果たし, 専門知識を得られるが, 工学部には難しいと思う。学部特性にあったボランティアの情報があったほうがよいと思う。また, 教師免許を取るための単位として認められるとよいと思った。また, 単位を出す以上, 明確な基準が必要。
- ・非常に分かり易い発表であった。
- ・今回の内容は, すべて興味がありました。ありがとうございました。

- ・ボランティアをして、単位が取れるなんていいことだと思うけれど授業はあまりよくないと思う。
- ・発表 1 でのビデオにあるような NG 授業を現実に大分大学の講義を受けたことがあるので、大分大学で取り組む必要があると思う。
- ・NG ビデオは大変面白く制作されていた。しかし、誇張しすぎではなかったかなと感じた。もっと現実味のあるビデオを制作するべきだと思う。
- ・ビデオは実際に共感できるものもあり、良かった。
- ・学生制作のビデオで起きている事は、実際に私も経験したことがあるので、意義あるものだと思う。しかし、ほとんどの教授は、ちゃんと講義をしていると私は思う。問題が多いのは、授業料を浪費する学生にある。海外の国々では、学生がボランティアをするのは当たり前になっているので、ボランティアの授業化は地域貢献にもなりよいことだと思う。
- ・ビデオがどれもやり過ぎていて変だった。そこまでの先生に出会った事がないから分からない。確かに字が小さい先生や分かりにくい先生もいるが、自分の努力も足りないんだと思う。
- ・とても興味のあるもので、面白かったです。参加して良かったです。
- ・先生によって、字が見にくい人もいるので、このような取り組みを行って欲しいと思いました。
- ・確かに学業や講義はその担当の教員がにぎるので、監査すら必要だと思っています。実際、差別ではなく区別はあります。ただ、学生自身の努力も必要であると思いました。
- ・評価の基準をインターネットを通じて学生一人一人に提示するという事は出来ないのかと思った。授業ごとにアンケートを取るという事は非常に良いと思う。
- ・NG ビデオに関しては、なるほどなあと感じた。学生は受ける授業によって、学校に「行きたいか」や、「行きたくない」という思いが生まれてくることが多いので先生達に NG 授業を理解して頂くことは、すごくいいことだと思う。学習ボランティアに関しては、自分も機会があれば参加してみたいと思う。
- ・学生が自主的に行ったという事は、見習わなければならないと思う。学生の視点から講義の問題点を挙げてもらったのは、指導者側に「気付き」を与えることが出来たと思う。ボランティアを実際に体験する事で、何か問題なのかを把握して次回の活動の際に改善していくことが問題解決能力を高めていくことにつながると思う。
- ・ボランティアは実施すべきと思うが、単位を与えて実施すべき事柄か？本学での学生の授業単位が必要だと思う。是非評価して頂きたい。
- ・ビデオはとても面白かったです。山形大を参考にしたとのことですが、特に強調したかった点や工夫した点なども聞けると良かったです。双方向のコミュニケーションの問題は、井上先生等のご指摘の通りかと思いました。学習ボランティアは、大学や学生への信頼を確かなものにするためにも、今後の継続性や発展性というのが課題なのだろうと思いました。
- ・発表 1：学内の実態はどうなっているのか気になりました。また、学内の実態としてあれば基本的な問題として教員の資質の見直しを。発表 2：考察の中に授業の狙いと観点が不足している。試行に対する基本姿勢に気になりました。
- ・学生の意見がおとなしかった。
- ・発表 1：ビデオで取り上げたエピソードは実際に学生が体験した内容ですか？発表 2：サタスタと教育福祉科学部のまなびぐサポートとの差別化はどのように考えておられますか？
- ・ビデオに関しては、もう少しリアリティがあるものの方が議論が活発になると思った。学習ボラ

- ンティアについては、ボランティア先の希望とのマッチングがどうなっているのかを知りたい。
- ・学生が有効に土曜日を使っているか疑問！この意味で「学習ボランティア」を準備する。又、学生が社会と積極的に関わる点でも評価する。人間力向上には、学外で取組は重要！
  - ・学習ボランティアについて興味を持ちました。留学生も参加可能かどうか知りたいです。
  - ・毎年参加していると毎年同じような企画・内容であると感じます。一つには学生が訴えかけようとしている対象教員がこの場に居ないという規定がありますが、今後は同じようなことを言ってもなぜ改善されないのかということの検証のような企画をお勧めします。
  - ・「ボランティア」を通して学んだことに対する評価と、それに対する単位付与であればよいが、「ボランティア活動」そのものへの単位付与は反対である。担当教員は大変だと思うが、大学の支援部門が行うべき業務の様な気がします。・NG集の元ネタが本学の実例なのか？実例ならば、どこの学部の講義なのかの情報を出しても良いのでは？本人(教員側)は自分のことだと理解していない。(このFDに参加していると思われるが。) ・VTRの音声の調整、不良。
  - ・教員の目から見たNGビデオを作っては？ボランティアを単位化したら、無報酬で行う本来のボランティアの本来の意味が無くなってしまう。別な名前にしてはどうか？
  - ・NGビデオの音声が悪く(録音時の問題?)聞き取りにくかった。編集は分かり易く良かったと思います。
  - ・きつちよむフォーラム以外で学生の要望・提案を授業改善に活かしていく方策を検討する必要がある。
  - ・発表1は非常に興味深い内容で、他の内容も視聴したいと思いました。発表2は、評価の方法・基準の設定が難しいと思いますが、今後積極的な展開が期待されるものと考えました。

## 第2部：FDワークショップ「教育課題・教育実践検討会」

演題1. 教員免許取得のために新設された授業科目への対応について

発表者 藤田敦 准教授(教育福祉科学部)

演題2. 体験型・グループワーク等双方向授業での教育改善に向けて

～特別経費『動機付けと形成的評価を重視した学士課程教育開発』～

発表者 市原宏一教授(経済学部)

演題2b. 本取り組みで導入するポートフォリオシステムの概要

(ポートフォリオ研究会第1回学習会)

発表者 末本哲雄講師(本センター)

演題1では、教育職員免許状に必要な授業が改正されたことに伴い、教育福祉科学部において新設された授業科目の理念、内容、第1年目の取り組みについて紹介された。教員養成過程に必須となった「教職実践演習」を4年次に開設するにあたり、教員養成カリキュラム全体を見直し、教職科目の再編成や実践的指導力養成プログラム等を新設した経緯について説明があり、本年度より開始された、1年次の「教職入門ゼミ」について現状の紹介があった。

演題2では、教育改善プログラムとして、本年度特別経費として始まった事業日程が紹介された。

これまでの取り組みとして

体験活動を組み込んだ大分の水、プロジェクト方学習の授業として大分大学を探ろう等の実績について紹介があり、本事業の位置づけが説明された。ポートフォリオシステムの導入により学生自身による形成的評価を取り入れることで、学士に相応しい学習能力を身につけさせる取り組みである。また、研究者を募る旨の要望が出された。

また、演題 2b では、具体的なポートフォリオシステムの概要が説明された。それによる効果についても説明された。

## 第 2 部 参加者

所 属	氏 名
教育福祉科学部	佐藤晋治, 古賀精治, 黒川勲, 藤田敦, 芝原雅彦, 松田聡, 廣瀬剛 甘利弘樹, 山下茂
経済学部	大崎美泉, 市原宏一, 藤村賢訓,
工学部	工藤孝人, 井上正文, 秋田昌憲, 大鶴徹, 中島誠, 大賀恭, 越智道義 緑川洋一, 豊田昌宏, 前田寛, 原恭彦, 行天啓二,
その他	武原美穂, 多田桃子, 岡田正彦, 中川忠宣, 寺村淳, 河野美奈 工藤達生, 能勢明雄, 末本哲雄, 牧野治敏

教職員による第 1 部, 第 2 部を通しての意見・感想

- ・ NG ビデオを見ながら, 自身の授業や授業以外での学生との関わりを振り返ってみました。
- ・ 「NG ビデオ」の音声もう少しクリアであれば良かったのですが…。 「学習ボランティア」については大変勉強になりました。
- ・ 授業に対する不満要望を教員に伝える努力を学生に望む。教員も学生の要望を聞き取る努力が必要と感じた。私は毎回行う小テストの中に質問要望欄を設けて学生の要望を聞き取っています。
- ・ 前半は完全にマンネリ化と思えるので, 学生さんの労力に対し効果は今ひとつと感じます。後半についてはボランティアの意義は認めてもボランティア活動と単位という整合性には疑義を感じました。
- ・ 大変参考になりました。学習ボランティアには留学生の中にも興味を持っている学生もいるかも知れませんが, 留学期間が半年あるいは 1 年間の場合でも参加可能でしょうか。欧米の学生なら英語の授業への協力も可能であるように思われます。
- ・ はじめて参加しました。正直もう少し活発な議論や学生の参加があるものを期待していたので少し残念でした。企画・運営へのさらなる学生参加や, 実施形式の工夫などされてはいかがでしょうか。教員と学生が一同に集まって講義や学習について考えるというコンセプトは新鮮でした。
- ・ いろいろ新しい情報, 試み, プログラム。ツールを知ることができて良かったと思います。
- ・ 第 2 部, ポートフォリオの概念が少し整理できた。
- ・ WebClass, ポートフォリオには興味を持ってました。しかし, 導入となると, 理解するのに手間・時間がかかりそうな気がしました。
- ・ JABEE と教養との絡みもありポートフォリオの活用を考えています。学習診断の方向での取り組みになるかとは思いますが。



- ・ポートフォリオシステムについて良く理解できました。ありがとうございました。
- ・授業 NG ビデオの公開（HP 上での視聴あるいは DVD 配布）が、もし可能であれば対応いただけるとうれしいです。
- ・大変有意義な時間でした。今後の継続を望みます。
- ・学習ボランティア 10 箇条が参考になりました。
- ・教員養成の授業科目という話の中で、柔軟でたくましい資質の養成が必要ということであったが、このような資質は授業で養成が可能なのか。今までは課外活動で養成できていたように思う。
- ・とても興味深かった。まずは、WebClass の e ポートフォリオについて色々と試してみたい。
- ・協議の時間が足りなかった。発表の内容は充実していたのではないか。
- ・すべての提案、報告がとても良かったです。ただ、どれだけの教員が、学生が今後意識して取り組むかが課題で、広報の広がりが期待される。
- ・第 1 部への学生の参加をもっと促して欲しい。授業として参加した学生は多かったが、自主的参加者が少ない。

## （7）日本人学生による英語スピーチコンテスト

本学の中期計画・中期目標には「外国語を含むコミュニケーション能力の向上を図る教育を充実させる。特に、英語については、『仕事で英語が使える』人材の育成を目指して教科内容等の改善を図る。」「語学能力としての英語、学習内容と関連した英語能力、プレゼンテーション能力の育成をはかる」ことが掲げられている。この項目に対する一事業として、高等教育開発センターの担当により、平成 19 年度より「日本人による英語スピーチコンテスト」を実施している。

本年度は、部門の活動ではなくセンター主催する事業として開催された。

日時 2011 年 3 月 6 日（火曜日）13 時から 16 時

場所 教養教育棟 35 号教室（旦那原キャンパス）

### 概要

発表者は、スピーチ部門は 2 名、プレゼンテーション部門は 3 名であった。

開会行事では、昨年同様に副学長教育担当理事大嶋教育福祉科学部教授から、昨年度の約束により英語での挨拶があった。

続いて、司会による、本コンテストの日程説明と審査員の 5 名の先生方の紹介の後、発表が始まった。

各部門の発表タイトルと発表者は次の通りである。（1 件の発表時間は約 10 分）

### <スピーチ部門>

Theme	Presenter
1. The Necessity of Space Development	坂田 優(医学部)
2. Thank you for the no. 970.	内木 敏雄(医学部)

### <プレゼンテーション部門>

Theme	Presenter
1. Think globally Act locally	奥田 彩香(教育福祉科学部)

2. Think about blood donation	安部 義一(医学部)
3. Performance of PEMFC Electrode Catalysts Using Tin Oxide and Carbon Composites	長野 敬太(工学研究科)

審査は、稲用茂夫教授（教育福祉科学部）、柿原武史准教授（経済学部）、Sean Chidlow 助教（医学部）、佐々木朱美准教授（工学部）によって行われ、各部門の最優秀賞、優秀賞、プレゼンテーション部門の優秀賞が発表された。

表彰式では、羽野学長より、各受賞者に賞品と副賞が手渡された。

表彰式の後、学長から、本学での英語教育、コミュニケーション能力育成のためにさらに尽力して欲しいとお話があり、最後に、学長、発表者、審査員がそろって記念撮影し、コンテストの全行事を終了した。

## （８）ポートフォリオ研究会

平成 22 年度に採択された特別経費による事業「動機付けと形成的評価を重視した学士課程教育開発－学生のふり返りと見通しを促すシステムの開発－」のために、全学共通科目等の教養教育の担当教員を対象として、理事(教育担当)より研究員の募集が行われ、研究会が組織された。この研究会へは、高等教育開発センターメディア・IT 活用部門が全面的に関わるとともに、FD・授業評価部門も FD の立場から関与したので、研究会活動の概要を記した。

### 第1回学習会

「体験型・グループワーク等双方向授業での教育改善に向けて

～特別経費『動機付けと形成的評価を重視した学士課程教育開発』～

「本取り組みで導入するポートフォリオシステムの概要」

日時：平成 2010 年 11 月

きっちよむフォーラム第 2 部、FD ワークショップ「教育課題・教育実践検討会」において、本事業の概要の説明、及びポートフォリオシステムについての紹介とともに、研究員の募集を行った。

### 第2回学習会

- ・授業改善のためのクリッカー講習会(IT 部門共催)

日時:場所 2010 年 12 月 9 日(木) 教育福祉科学部(改革推進室)

12 月 13 日(月)工学部(第 1 会議室)

12 月 14 日(火)経済学部(101 号教室)

※ 時間はいずれの会場も昼休み(12 時 10 分から)

各会場において、WebClass によるポートフォリオシステムの操作について、解説と実習を行った。

### 第3回学習会

授業改善のためのクリッカー講習会 (IT部門共催)

日時：平成22年3月15日（木）大分大学教育改革フォーラム

「第1部 教育改革プロジェクト成果報告」において、ポートフォリオシステムの概要と本年度の取り組み状況について報告した。

## (9) 学生による授業改善のためのアンケート調査

### 1) アンケートの実施

学生による授業評価の実施母体である教務部門会議の活動を支援するために、全学統一した授業評価アンケートの立案、作成及び調査結果の集計と分析を行った。

平成 22 年前学期と後学期に実施した「学生による授業評価」アンケート調査の調査対象は以下のとおりである。

#### 前学期

- ・教養教育科目：外国語科目・ゼミナール科目
- ・教育福祉科学部：A グループ(授業担当者の名前あ～こ)
- ・経済学部：各学科最初の講座の科目
- ・医学部：医学部からの提出科目
- ・工学部：全科目

#### 後学期

- ・教養教育科目：身体スポーツ科目・医学部基礎教育科目
- ・教育福祉科学部：B グループ(授業担当者の名前さ～の)
- ・経済学部：各学科 2 番目の講座の科目
- ・医学部：医学部からの提出科目
- ・工学部：全科目

### ① 平成 22 年度前期授業改善のためのアンケート提出科目

【教養科目】		生涯スポーツK(バレーボールを楽しもう)	
基礎ドイツ語 I	(佐々木 博康)		(岡内 優明)
基礎ドイツ語 I	(安岡 正義)	総合英語Ⅲ	(柿原 武史)
基礎フランス語 I	(安田 俊介)	総合英語Ⅲ	(松江 總喜)
基礎中国語 I	(森川 登美江)	総合英語Ⅲ	(雲 和子)
基礎中国語 I	(田 宇新)	総合英語Ⅲ	(中達 俊明)
基礎中国語 I	(鄧 紅)	総合英語Ⅲ	(中達 俊明)
基礎中国語 I	(鄧 礼容)	総合英語Ⅲ	(松江 總喜)
基礎ハンブル I	(孫 進姫)	留学準備英語	(ホワイト クリストファーミル)
TOEFL 英語	(ホワイト クリストファーミル)	基礎ドイツ語 I	(池内 宣夫)
教養ドイツ語 I	(安岡 正義)	基礎ドイツ語 I	(安岡 正義)
教養ドイツ語 I	(佐々木 博康)	基礎フランス語 I	(コモン ティエリ)
教養中国語 I	(田 宇新)	基礎フランス語 I	(安田 俊介)
教養中国語 I	(鄧 紅)	基礎中国語 I	(鄧 紅)

基礎中国語 I	(鄧 礼容)	英会話	(シンプソン リチャード ヒュー)
基礎中国語 I	(田 宇新)	英会話	(長井 ティナ)
基礎中国語 I	(森川 登美江)	英会話	(W.A.マクビーン)
基礎ハングル I	(朴 喜萬)	英会話	(シンプソン リチャード ヒュー)
基礎ハングル I	(孫 進姫)	英会話	(長井 ティナ)
教養ドイツ語 I	(池内 宣夫)	英会話	(W.A.マクビーン)
教養フランス語 I	(コモン ティエリ)	留学英語 I (リスニング)	(ギャレス・ブレイク)
教養中国語 I	(鄧 礼容)	留学英語 II (リーディング)	(ギャレス・ブレイク)
教養中国語 I	(田 宇新)	英語ゼミナール 7	(雲 和子)
総合英語	(橋本 美喜男)	総合英語	(入野 賀和子)
オーラル・イングリッシュ (学校教育課程)	(柳井 智彦)	総合英語	(稲用 茂夫)
オーラル・イングリッシュ (情報社会文化課程)	(金子 光茂)	総合英語	(橋本 美喜男)
オーラル・イングリッシュ (人間福祉科学課程)	(グッドマーカー)	総合英語	(金子 光茂)
オーラル・イングリッシュ(人間福祉科学課程)	(シンプソン リチャード ヒュー)	オーラル・イングリッシュ	(シンプソン リチャード ヒュー)
英語 I	(園井 千音)	英会話	(ヌートバー ジュリー)
英語 I	(佐々木朱美)	英語 I	(園井 千音)
英語 I	(染矢 正一)	英語 I	(佐々木朱美)
英語 I	(大木 正明)	英語 I	(HARRAN THOMAS JAMES)
表現技術 (口頭発表)	(金森 由美)	英語 I	(山野 敬士)
英語 I	(染矢 正一)	英語 I	(松田 修明)
英語 I	(大木 正明)	応用英語 E	(稲用 茂夫)
英語 I	(松田 修明)	応用英語 E	(御手洗 靖)
英語 I	(佐々木朱美)	応用英語 E	(後藤 一美)
英語 I	(園井 千音)	英語 II	(柳井 智彦)
総合英語 I	(梶浦 麻子)	英語 II	(松田 修明)
総合英語 I	(森永 和利)	英語 II	(園井 千音)
総合英語 I	(春日 秀之)	英語 II	(佐々木朱美)
基礎英語 I	(雲 和子)	英語 II	(HARRAN THOMAS JAMES)
応用ハングル I	(朴 喜萬)	生涯スポーツ B(アウトドアスポーツ入門)	(米田 紘一)
応用中国語 I	(森川 登美江)	生涯スポーツ C(レクリエーションスポーツ)	(森永 和利)
総合英語 I	(中達 俊明)		(前田 寛)
総合英語 I	(梶浦 麻子)	英語 II	(島田 義生)
総合英語 I	(森永 和利)	英語 II	(松田 修明)
総合英語 I	(春日 秀之)	英語 II	(園井 千音)
基礎英語 I	(雲 和子)	英語 II	(佐々木朱美)
		英語 II	(HARRAN THOMAS JAMES)

英語Ⅱ	(山野 敬士)	地域福祉論Ⅰ	(垣田 裕介)
応用中国語Ⅰ	(鄧 紅)	言語・外国語(中)Ⅰa	(甘利 弘樹)
英語ゼミナール9 (HARRAN THOMAS JAMES)		現代アジア論・世界史特講Ⅱ	(甘利 弘樹)
英語ゼミナール14	(御手洗 靖)	世界史概説Ⅱ・東洋史概説	(甘利 弘樹)
英語Ⅰ	(松田 修明)	日本史概説Ⅰ	(吉良 国光)
英語Ⅰ	(後藤 一美)	アートマネージメントⅠ	(久間 清喜)
英語Ⅰ	(園井 千音)	現代芸術事情・表現基礎演習Ⅱ	(久間 清喜)
英語Ⅰ	(佐々木朱美)	絵画ⅡB(a)・芸術表現応用AI(絵画)	(久間 清喜)
英語Ⅰ	(W.A.マクベーン)	芸術表現展開法	(久間 清喜)
英語Ⅰ	(米田 鉦一)	絵画ⅢB(a)	(久間 清喜)
英語Ⅲ	(ショーン・チドゥロウ)	絵画基礎(a)	(久間 清喜)
中国語Ⅰ	(田 宇新)	住環境論	(久保 加津代)
スペイン語Ⅰ	(佐藤 孝裕)	漢文学研究	(牛尾 弘孝)
ハングルⅠ	(劉 美貞)	漢文学史	(牛尾 弘孝)
		漢文学概論	(牛尾 弘孝)
		オーラル・イングリッシュ	(金子 光茂)
		アメリカ文学	(金子 光茂)
		米文学演習(翻訳)	(金子 光茂)
		総合英語	(金子 光茂)
		表現基礎実習BI(声楽)	(栗栖 由美子)
		音楽(小)	(栗栖 由美子)
		声楽Ⅲ	(栗栖 由美子)
		声楽Ⅰ	(栗栖 由美子)
		芸術表現応用BI(声楽)b・声楽V	(栗栖 由美子)
		グループ表現Ⅰa ほか	(栗栖 由美子)
		肢体不自由児の教育と指導法	(古賀 精治)
		重複障害教育総論	(古賀 精治)
		知的障害児教育演習	(古賀 精治)
		社会体育指導論	(古城 建一)
		心理学研究法	(古城 和敬)
		社会心理学	(古城 和敬)
		教育心理学	(古城 和敬)
		教育統計法・心理教育統計法	(古城 和敬)
		教師学	(古城和敬・伊東安浩・河野次男・麻生良太)
		応用英語E	(後藤 一美)
		老人福祉論Ⅱ	(工藤 修一)
		高齢者福祉論Ⅰ・老人福祉論Ⅰ	(工藤 修一)
<b>【教育福祉科学部】</b>			
オーラル・イングリッシュ			
	(グッドマーカー グレゴリー アレン)		
人間関係論	(阿久根 求)		
授業研究	(伊藤 安浩)		
授業研究演習	(伊藤 安浩)		
社会福祉援助技術論Ⅰ・ソーシャルワーク概説Ⅱ			
	(衣笠 一茂)		
精神保健福祉援助技術各論Ⅱ	(衣笠 一茂)		
社会福祉援助技術演習ⅠA	(衣笠 一茂)		
社会福祉援助技術演習ⅠB	(衣笠 一茂)		
総合英語	(稲用 茂夫)		
応用英語E	(稲用 茂夫)		
イギリスの言語と文化	(稲用 茂夫)		
知的障害児の心理・生理・病理	(衛藤 裕司)		
学習障害(LD)児等の心理と指導法	(衛藤 裕司)		
障害児教育総論・特殊教育論	(衛藤 裕司)		
教育本質論	(岡田 正彦)		
国語史	(荻野 千砂子)		
国語(小)	(荻野 千砂子)		
国文法研究	(荻野 千砂子)		
集合と論理	(家本 宣幸)		
発達心理学	(河野 伸子)		
心理学	(河野 伸子)		

哲学特講	(黒川 勲)	基礎解析演習 I	(大野 貴雄)
哲学概論Ⅱ・比較思想論Ⅱ	(黒川 勲)	情報工学	(池崎 八生)
倫理学・倫理学概論	(黒川 勲)	言語・外国語(独) Ia	(池内 宣夫)
教育情報処理演習	(市原 靖士)	西洋文明論Ⅲ	(池内 宣夫)
教育情報処理演習	(市原 靖士)	総合英語	(入野 賀和子)
技術科教育演習 I	(市原 靖士)	現代芸術事情	(麻生 和江)
教育メディアとコンピュータ	(市原 靖士)	体育(小)	(麻生 和江)
道徳の指導法	(神崎 英紀)	ダンス ほか	(麻生 和江)
教育哲学	(神崎 英紀)	体操・器械運動	(麻生 和江)
現代教育の探究	(神崎 英紀)	身体感覚の知覚演習	(麻生 和江)
人体解剖学	(石橋 健司)	スポーツ医学	(明石 光伸)
生涯スポーツ演習	(石橋 健司)		
スポーツ・健康研究法	(石橋 健司)	<b>【経済学部】</b>	
生理学(運動生理学を含む。)	(石橋 健司)	統計学 I	(西村 善博)
教育数学 I	(川寄 道広)	農村発展論 I	(山浦 陽一)
算数科指導法(小)	(川寄 道広)	ミクロ経済学 I	(村山 悠)
算数科授業論	(川寄 道広)	外国書講読 A I	(石井 まこと)
生物学実験 I(コンピュータ活用を含む。)		地域構造論 I	(宮町 良広)
	(泉 好弘)	比較経営史 I	(松尾 純廣)
理科(小)	(泉 好弘)	地域経営論 I	(奥田 憲昭)
デジタル情報演習	(大岩 幸太郎)	簿記 I	(椛田 龍三)
プログラミング言語演習Ⅱ	(大岩 幸太郎)	簿記 I	(田中 敏行)
情報科学Ⅱ	(大岩 幸太郎)	マクロ経済学 I	(宇野 真人)
情報システム I	(大岩 幸太郎)	経営情報論 I	(松岡 輝美)
データ分析と統計	(大隈 ひとみ)	地域福祉論Ⅱ	(垣田 裕介)
知能情報処理	(大隈 ひとみ)	経営学入門	(藤原 直樹)
情報数学	(大隈 ひとみ)	比較地域分析 I	(城戸 照子)
コンピュータ	(大隈 ひとみ)	経営学 I	(薄上 二郎)
地球化学	(大上 和敏)	流通論 I	(松隈 久昭)
環境科学概論	(大上 和敏)	経済学Ⅱ	(宇野 真人)
基礎環境化学実験 I	(大上 和敏)	経済学Ⅲ	(丸山 武志)
環境化学概論	(大上 和敏)	株式会社論 I	(片山 准一)
現代社会論 I	(大杉 至)	経済学 I	(小野 宏)
社会学概論 I	(大杉 至)	組織革新論 I	(本谷 るり)
社会学	(大杉 至)	経済学史 I	(丸山 武志)
世界史特講 I	(大嶋 誠)	都市経営論 I	(高島 拓哉)
西洋文明論 I	(大嶋 誠)	社会分析論 I	(嘉目 克彦)
複素解析	(大野 貴雄)		
実解析	(大野 貴雄)	<b>【医学部】</b>	

英語 I	(マックビーン)	メカトロニクス II	(小川 幸吉)
英語 I	(マックビーン)	応用解析 III	(沖野 隆久)
英語 II	(森 茂)	人間システム計測工学	(榎園 正人)
英語 II	(森 茂)	応用解析 II	(福田 亮治)
英語 III	(ショーン・チドウロウ)	人間工学	(前田 寛)
英語 III	(ショーン・チドウロウ)	応用解析 III	(福田 亮治)
英語 VII	(ショーン・チドウロウ)	応用解析 IV	(沖野 隆久)
英語 VII	(ショーン・チドウロウ)	機械工学概論 I	(的場 哲)
英語 VIII	(濱中 良志)	電気回路 II	(小川 幸吉)
中国語 II	(田 宇新)	応用解析 II	(福田 亮治)
ハングル II	(劉 美貞)	機械工学概論 I	(的場 哲)
精神・神経疾病論	(井上 亮)	システム解析	(松尾 孝美)
小児看護方法論 I	(穴井 孝信)	電子回路 II	(上見 憲弘)
小児・母性疾病論	(穴井 孝信)	身体運動機能学	(岡内 優明)
解剖学	(荒川 満枝)	視覚画像工学	(行天 啓二)
医療・看護情報論	(佐藤 和子)	現代制御工学	(松尾 孝美)
		電気工学 I	(小川 幸吉)
		福祉機器工学 I	(今戸 啓二)
<b>【工学部】</b>		情報処理概論	(松尾 孝美)
基礎設計工学	(岩本 光生)	人間システム工学	(上見 憲弘)
機械振動学 I	(軽部 周)	Cプログラミング	(池内 秀隆)
流れ学 I	(山田 英巳)	無機化学 I	(豊田 昌宏)
超伝導エネルギー工学	(江崎 忠男)	生物物理化学	(天尾 豊)
エネルギーシステムデザイン	(後藤 雄治)	化学工学	(平田 誠)
エネルギー変換機器	(後藤 雄治)	有機化学 II	(石川 雄一)
流体工学 I	(山田 英巳)	化学英語演習 I	(HARRAN THOMAS JAMES)
熱力学 I	(加藤 勝敏)	化学英語演習 I	(HARRAN THOMAS JAMES)
電気理論基礎	(濱本 誠)	高分子化学 I	(守山 雅也)
電気物性工学 I	(江崎 忠男)	材料力学基礎・演習	(後藤 真宏)
伝熱学 I	(岩本 光生)	システム制御基礎	(黒岩 和治)
材料強度学 I	(土居 滋)	材料と弾性の力学	(後藤 真宏)
機械要素設計学	(岩本 光生)	機械製図	(木下 和久)
電磁気学 I	(濱本 誠)	プログラム言語演習	(石松 克也)
弾性力学	(土居 滋)	熱力学基礎・演習	(濱武 俊朗)
電気回路 II	(高坂 拓司)	機械力学基礎・演習	(劉 孝宏)
プラズマ工学	(濱本 誠)	伝熱学 I	(田上 公俊)
システム設計工学	(岩本 光生)	流れ学基礎・演習	(鹿毛 一之)
機構力学	(今戸 啓二)	流体機械	(濱川 洋充)
人間システム信号処理	(上見 憲弘)	エンジンシステム	(濱武 俊朗)
材料力学	(今戸 啓二)		

機械工作法	(木下 和久)	オペレーティング・システム I (宇津宮 孝一)
機械設計学基礎	(木下 和久)	計算機システム I (川口 剛)
機械工学概論 I	(木下 和久)	システムプログラミング演習 II (宇津宮 孝一)
建築総論	(佐藤 嘉昭)	情報システム概論 (行天 啓二)
建築環境計画 I	(大鶴 徹)	情報論理学 I (藤田 米春)
材料力学	(佐藤 嘉昭)	情報論理学 (藤田 米春)
都市計画	(佐藤 誠治)	電子回路 II (秋田 昌憲)
建築材料	(大谷 俊浩)	電磁気学 I (大久保 利一)
建築計画設計演習 II	(佐藤 誠治)	電力エネルギー工学 (金澤 誠司)
建築構法	(井上 正文)	電磁気学 IV (榎園 正人)
建築耐震システム	(菊池 健児)	電気電子数学 I (柴田 克成)
鉄筋コンクリート構造	(菊池 健児)	電気電子計測工学 (榎園 正人)
建築環境工学 I	(富来 礼次)	電気電子制御工学 I (柴田 克成)
建築設備計画 I	(真鍋 正規)	電気回路 III (戸高 孝)
建築CAD製図 II	(佐藤 誠治)	電気回路 I (金澤 誠司)
建築施工学	(上田 賢司)	電気機器工学 II (戸高 孝)
工業英語 (建築)	(佐藤 嘉昭)	計算機工学 I (緑川 洋一)
構造力学 II	(井上 正文)	通信工学 (秋田 昌憲)
基礎構造	(佐藤 嘉昭)	音響工学 (秋田 昌憲)
測量学実習	(児玉 伸彦)	電気電子数学 II (柴田 克成)
建築法規	(末成 祐二)	電気電子工学入門 (大久保 利一)
福祉環境計画	(鈴木 義弘)	電気工学概論 I (戸高 孝)
コンピュータプログラミング	(富来 礼次)	電気機器設計・製図 (槌田 雄二)
建築計画 I	(鈴木 義弘)	解析学 I (末竹 千博)
図学	(今永 和浩)	基礎理論化学 I (大賀 恭)
プログラミング言語処理系	(川口 剛)	原子と分子 (飯尾 心)
言語理論	(藤田 米春)	力学 I (後藤 善友)
基礎プログラミング	(二村 祥一)	代数学 II (末竹 千博)
人工知能プログラミング	(中島 誠)	代数学 II (田中 康彦)
アルゴリズム論	(中島 誠)	代数学 II (高阪 史明)
計算機科学概論	(宇津宮 孝一)	代数学 I (田中 康彦)
データサイエンス基礎	(和泉 志津恵)	波動と光 (後藤 勝)
データサイエンス演習	(和泉 志津恵)	基礎電磁気学 (野本 幸治)
情報ネットワーク	(宇津宮 孝一)	力学 I (小林 正)
多変量解析	(原 恭彦)	物理学基礎 (小林 正)
ヒューマン・インタフェース	(伊藤 哲郎)	物理学基礎 (野本 幸治)
データベースシステム	(二村 祥一)	物理学基礎 (後藤 勝)
画像処理	(行天 啓二)	基礎数学 (末竹 千博)
情報数学	(越智 義道)	基礎数学 (田中 康彦)



基礎数学	(高阪 史明)	解析学Ⅱ	(開 憲明)
基礎数学	(開 憲明)	力学Ⅰ	(今野 宏之)
解析学Ⅱ	(田中 康彦)	原子と分子	(大賀 恭)
解析学Ⅱ	(高阪 史明)	情報理論	(田中 充)

## ② 平成 22 年度後期授業改善のためのアンケート提出科目

<b>【教養科目】</b>		家庭科指導法(小)	(財津 庸子)
エキサイズの理論と実践	(麻生 和江)	情報処理演習	(財津 庸子)
Let's Enjoy Playing Tennis and Badminton	(島田 義生)	消費生活論	(財津 庸子)
秋・冬の野外活動	(前田 寛)	栽培学実習	(斉藤 清男)
現代スポーツの問題点を探るⅡ	(西本 一雄)	言語・外国語(独)Ⅱb	(佐々木 博康)
-卓球を例にして-	(石橋 健司)	知的障害児の心理アセスメント	(佐藤 晋治)
サッカーと運動生理Ⅱ	(島田 義生)	モデリング研究	(佐脇 健一)
生涯スポーツの足がかりⅡ	(岡内 優明)	彫刻ⅠA(b)	(佐脇 健一)
健康トレーニング	(松元 義人)	図画工作(小)	(佐脇 健一)
レクリエーションスポーツと健康づくり	(前田 寛)	造形基礎演習	(佐脇 健一)
スキー・スノーボードの理論と実践	(吉村 良孝)	彫刻演習	(佐脇 健一)
健康運動科学演習Ⅱ	(吉村 良孝)	化学実験Ⅰ(コンピュータ活用を含む。)	(芝原 雅彦)
健康運動科学演習Ⅱ	(稲垣 敦)	英語コミュニケーションⅡ	(チャーリー ジェラルド トーマス)
健康運動科学	(西 英久)	政治学概論Ⅱ(含国際政治)	(鄭 敬娥)
医学のための哲学	(林 智一)	現代国際事情Ⅱ	(鄭 敬娥)
医学のための心理学Ⅱ	(大山 哲司)	英会話中級 B	(シンプソン リチャード ヒュー)
数学Ⅱ	(谷川 雅人)	異文化理解と英語教育	(シンプソン リチャード ヒュー)
物理学Ⅱ	(久保田 直治)	英語コミュニケーション初級 B	(シンプソン リチャード ヒュー)
化学Ⅲ	(下田 恵)	バスケットボール	(住田 実)
化学Ⅳ	(久保田 直治)	体育科指導法(小)	(住田 実)
化学実験	(久保田 直治)	生涯健康論	(住田 実)
化学実験	(池田 八果穂)	保健授業論	(住田 実)
生物学Ⅲ	(長谷川 英男)	環境生物学概論	(高浜 秀樹)
生物学Ⅳ	(長谷川 英男 他)	環境生物学実習Ⅰ	(高浜 秀樹)
人間生物学	(江島 伸興)	生活環境とホルモン	(高浜 秀樹)
医療情報学Ⅰ		教育臨床学	(武内 珠美)
<b>【教育福祉科学部】</b>		臨床心理学演習	(武内 珠美)
家庭科授業論	(財津 庸子)	心理学特別研究	(武内 珠美)
家庭科教育学演習	(財津 庸子)		

博物館実習Ⅲ	(田中 修二)	被服構成実習	(都甲 由紀子)
視聴覚メディア論	(田中 修二)	情報処理演習	(都甲 由紀子)
博物館各論Ⅱ	(田中 修二)	美術科教育演習Ⅱ	(富田 礼志)
芸術学演習	(田中 修二)	美術科指導法(中)	(富田 礼志)
博物館実習Ⅱ	(田中 修二)	図画工作(小)	(富田 礼志)
表現形式総合論 2	(田中 修二)	木材工芸Ⅰ	(富田 礼志)
日本東洋美術史	(田中 修二)	比較文化論	(鳥井 裕美子)
障害児研究	(田中 新正)	異文化接触史Ⅱ	(鳥井 裕美子)
特別支援教育概論	(田中 新正)	中学校学級経営論	(中川 忠宣)
障害児臨床演習	(田中 新正)	教師学	(中川 忠宣)
ピアノⅣ	(田中 星治)	化学Ⅱ	(中島 俊男)
ピアノⅡ(伴奏を含む。)	(田中 星治)	計算化学	(中島 俊男)
特別研究Ⅱ	(田中 洋)	社会科指導法(中)	(永田 忠道)
幼児臨床指導論	(田中 洋)	社会(小)	(永田 忠道)
保育の指導Ⅲ	(田中 洋)	地歴科指導法(高)	(永田 忠道)
幼児心理学	(田中 洋)	生活科指導法(小)	(永田 忠道)
木材加工学Ⅱ(材料・塗装)	(田中 通義)	天文学と情報処理	(仲野 誠)
木材加工実習Ⅱ	(田中 通義)	地学実験Ⅰ(コンピュータ活用を含む。)	
生涯スポーツ総合演習Ⅰ	(谷口 勇一)		(仲野 誠)
スポーツ経営学	(成重 晴雄)	地学実験Ⅱ(コンピュータ活用を含む。)	
レクリエーション概論	(谷口 勇一)		(仲野 誠)
データ通信	(谷野 勝敏)	気象海洋学実験Ⅱ	(西垣 肇)
古典文学研究	(田畑 千秋)	地域と環境	(西垣 肇)
国文学史	(田畑 千秋)	音楽マネージメント演習	(西村 一)
古典文学演習	(田畑 千秋)	音楽マネージメント	(西村 一)
作曲法(編曲法を含む。)	(田村 洋彦)	アンサンブルⅡ	(西村 一)
創作表現実習Ⅱ	(田村 洋彦)	合奏Ⅱ	(西村 一)
音楽鑑賞法Ⅱ	(田村 洋彦)	保健体育科授業論	(西本 一雄)
芸術と鑑賞Ⅱ	(田村 洋彦)	体育科指導法(小)	(西本 一雄)
デジタルアート演習	(田村 洋彦)	保健体育科指導法(中)	(西本 一雄)
コンピュータと芸術	(田村 洋彦)	基礎ゼミⅢ(心理)	(西山 佐代子)
自然地理学特講	(千田 昇)	家族福祉論	(根笈 美代子)
地域地形論	(千田 昇)	情報処理演習	(根笈 美代子)
自然地理学概論	(千田 昇)		
医学一般	(寺尾 英夫)	<b>【経済学部】</b>	
言語・外国語(中)Ⅱb	(田 宇新)	企業取引法Ⅱ	(宇野 稔)
地域人口論	(土居 晴洋)	債権各論	(藤村 賢訓)
人文地理学特講Ⅰ	(土居 晴洋)	租税法	(吉田 初志)
人文地理学概論Ⅱ	(土居 晴洋)	憲法Ⅱ	(青野 篤)

経営学入門	(藤原 直樹)	電磁気学Ⅱ	(濱本 誠)
世界経済論	(柴田 茂紀)	電力システム工学	(後藤 雄治)
日本経済史Ⅱ	(合田 公計)	エネルギー変換工学	(後藤 雄治)
経営心理学Ⅱ	(深尾 誠)	材料強度学Ⅱ	(土居 滋)
労働経済論Ⅱ	(阿部 誠)	機械工作法	(齋藤 晋一)
地方財政論	(井田 知也)	流体工学Ⅱ	(山田 英巳)
交通論Ⅱ	(大井 尚司)	制御工学Ⅱ	(後藤 雄治)
国際関係論Ⅱ	(高山 英男)	流れ学Ⅱ	(山田 英巳)
法学入門	(吉田 初志)	伝熱応用設計	(齋藤 晋一)
法学入門	(秋山 智恵子)	制御工学Ⅰ	(松尾 孝美)
西洋経済史Ⅱ	(市原 宏一)	先端科学材料システム工学	(土居 滋)
企業ファイ ナンス論Ⅱ	(鶴崎 清貴)	伝熱学Ⅱ	(岩本 光生)
保険論Ⅱ	(鴻上 喜芳)	情報処理	(高坂 拓司)
経済学Ⅰ	(小野 宏)	電気物性工学Ⅱ	(江崎 忠男)
経済学Ⅲ	(丸山 武志)	電気回路Ⅰ	(高坂 拓司)
グローバル化と政治経済 (Day Stephen Robert)		力学Ⅱ	(小林 正)
物権法	(秋山 智恵子)	メカトロニクスⅣ	(今戸 啓二)
経済学Ⅱ	(宇野 真人)	電気工学Ⅱ	(小川 幸吉)
労働関係法Ⅱ	(鈴木 芳明)	倫理感性工学	(福永 圭悟)
経営戦略論Ⅱ	(仲本 大輔)	メカトロニクスⅢ	(池内 秀隆)
人事システム論Ⅱ	(幸 光善)	電気回路Ⅰ	(小川 幸吉)
アジア経済発展論	(木村 雄一)	応用解析Ⅳ	(沖野 隆久)
		確率統計	(福田 亮治)
		応用解析Ⅱ	(福田 亮治)
		福祉機器工学Ⅱ	(今戸 啓二)
		CAD 概論	(池内 秀隆)
		人間システム制御工学	(松尾 孝美)
		応用解析Ⅲ	(沖野 隆久)
		電子回路Ⅰ	(上見 憲弘)
		メカトロニクスⅠ	(松尾 孝美)
		聴覚音声工学	(上見 憲弘)
		生体運動制御論	(前田 寛)
		言語意思表示	(松田 修明)
		有機化学Ⅰ	(守山 雅也)
		生物化学	(天尾 豊)
		物質の状態と変化	(大賀 恭)
		反応速度論	(永岡 勝俊)
		化学英語演習Ⅱ	(園井 千音)
		化学結合論	(氏家 誠司)
<b>【医学部】</b>			
健康運動科学演習Ⅱ	(吉村 良孝)		
健康運動科学演習Ⅱ	(吉村 良孝)		
保健政策論	(杉田 聡)		
看護実践基盤技術Ⅰ	(原田 千鶴)		
クリティカル・ケア	(末弘 理恵)		
精神看護方法論Ⅰ	(寺町 芳子)		
保健統計学	(杉田 聡)		
精神看護方法論Ⅱ	(寺町 芳子)		
ターミナルケア	(寺町 芳子)		
内科系疾病論Ⅱ	(浜口 和之)		
成人看護方法論Ⅳ	(福井 幸子)		
国際看護論	(原田 千鶴)		
<b>【工学部】</b>			
工業力学	(山田 英巳)		

応用化学入門	(守山 雅也)	情報数学	(越智 義道)
基礎理論化学Ⅱ	(大賀 恭)	画像処理	(行天 啓二)
生物有機化学	(石川 雄一)	情報論理学Ⅱ	(藤田 米春)
物質の状態と変化	(飯尾 心)	数理計画論Ⅰ	(越智 義道)
流れ学	(鹿毛 一之)	コンピュータグラフィックス	(西野 浩明)
システム制御	(黒岩 和治)	数値解析Ⅰ	(原 恭彦)
機械工学基礎・演習	(後藤 真宏)	情報構造論	(伊藤 哲郎)
材料力学	(後藤 真宏)	オペレーティング・システムⅠ	(宇津宮 孝一)
工作機械・生産工学	(木下 和久)	多変量解析	(原 恭彦)
機械設計製図	(濱川 洋充)	アルゴリズム論	(中島 誠)
工業英語 (HARRAN THOMAS JAMES)		情報英語	(西野 浩明)
機械計測工学	(濱川 洋充)	人工知能基礎	(末田 直道)
機械力学	(劉 孝宏)	ヒューマン・インタフェース	(伊藤 哲郎)
機構学	(山本 隆栄)	解析学Ⅱ	(高阪 史明)
流体工学	(鹿毛 一之)	解析学Ⅰ	(高阪 史明)
応用熱力学	(濱武 俊朗)	解析学Ⅰ	(田中 康彦)
電気工学概論Ⅱ	(秋田 昌憲)	解析学Ⅰ	(末竹 千博)
建築環境計画Ⅲ	(富来 礼次)	数値解析演習	(原 恭彦)
建築計画Ⅱ	(佐藤 誠治)	電子回路	(行天 啓二)
建築環境工学Ⅱ	(大鶴 徹)	電子回路	(牟田 征一)
構造力学Ⅰ	(大谷 俊浩)	情報回路論	(藤田 米春)
建築環境工学Ⅱ演習	(大鶴 徹)	計算機システムⅡ	(川口 剛)
構造力学Ⅰ演習	(佐藤 嘉昭)	ソフトウェア工学	(吉田 和幸)
建築CAD製図Ⅰ	(後藤 年則)	代数学Ⅰ	(高阪 史明)
建築構造設計Ⅱ	(菊池 健児)	代数学Ⅰ	(田中 康彦)
木質構造	(井上 正文)	代数学Ⅰ	(末竹 千博)
建築構造設計Ⅰ	(菊池 健児)	代数学Ⅱ	(末竹 千博)
構造解析	(菊池 健児)	通信方式	(秋田 昌憲)
都市システム工学	(小林 祐司)	電気回路Ⅱ	(金澤 誠司)
技術者倫理	(佐藤 光雄)	電気電子制御工学Ⅱ	(柴田 克成)
塑性設計法	(菊池 健児)	電磁気学Ⅲ	(榎園 正人)
建築環境計画Ⅱ	(真鍋 正規)	電気電子材料	(戸高 孝)
建築ワークショップ	(富来 礼次)	電子回路Ⅰ	(緑川 洋一)
鉄骨構造	(井上 正文)	電気回路Ⅳ	(大久保 利一)
建築設計演習	(姫野 由香)	プラズマ工学	(金澤 誠司)
住居論	(鈴木 義弘)	電磁気学Ⅱ	(大久保 利一)
建築材料実験	(佐藤 嘉昭)	プログラミング	(柴田 克成)
リハビリテーション工学	(永野 敬喜)	電気機器工学Ⅰ	(戸高 孝)
建築計画設計演習Ⅰ	(佐藤 誠治)	基礎電磁気学	(近藤 隆司)

電磁波工学Ⅱ	(田中 充)
応用解析Ⅰ	(佐藤 静)
解析学Ⅰ	(開 憲明)
解析学Ⅰ	(佐藤 静)
基礎数学	(開 憲明)
力学Ⅱ	(今野 宏之)
応用解析Ⅰ	(佐藤 静)
代数学Ⅰ	(佐藤 静)
英語Ⅱ	(園井 千音)
英語Ⅱ	(園井 千音)

## (10) 学部独自の FD 活動

高等教育開発センターでは、全学を対象としたFD活動を企画・実施しているが、そのための基礎資料として各学部におけるFD活動についても状況を知る必要がある。そこで、学部において実施されたFDに関する活動を以下に記した。なお、FD活動については、その規模や内容から本センターでは把握できないものもあるので、ここに記したものが全てではないことをお断りする。

### 教育福祉科学部

日 時	題 目	参加者数
7月14日	学生支援GPミニFD(教授会) 学生の精神疾患, 特にうつ病について(医学部:引地考俊先生)	76人
12月8日	学部FD(教授会) 「まなびんぐサポート」から見る学生指導 -実践的指導力を備えた教師を育成するための学生指導 3ヶ条- (教育福祉科学部:森下覚先生)	81人
9月27日	新任教員研修(Aグループ)	4人
9月28日	新任教員研修(Aグループ)	4人
11月17日	新任教員研修(Bグループ)	3人
11月24日	新任教員研修(Bグループ)	3人
12月8日	新任教員研修(Bグループ)	3人

### 経済学部

日 時	題 目	参加者数
4月1日	大学院 FD 大学院におけるキャリア教育の実施と課題	22人

医学部

日程	タイトル	参加者	主催
4月22日～ (9日間)	東洋医学を教育できる指導医の養成	72名	大分大学東洋医学教育研究会
9月7日	東洋医学を教育できる指導医の養成	20名	大分大学東洋医学教育研究会
8月21日	中九州三大学病院合同専門医養成プログラム 呼吸器関連専門医養成	30名	大分大学卒後臨床研修センター, 大分大学総合内科学第二
9月3日～ (2日間)	中九州三大学病院合同専門医養成プログラム 脳神経外科専門医養成 大学間技術交流 脳神経外科:てんかん手術見学	10名	大分大学脳神経外科
10月8日	中九州三大学病院合同専門医養成プログラム 循環器内科専門医養成 循環器内科 合同カンファレンス	14名	大分大学循環器内科
11月13日～ (14日間)	中九州三大学病院合同専門医養成プログラム 大分県・宮崎県地域の研修指導医養成 第6回大分県指導医講習会	33名	大分県医師臨床研修指導医講習会実行委員会
11月30日	消化器内視鏡技術向上 消化器内科専門医養成 内視鏡シミュレータ講習会	2名	大分大学消化器内科
12月9日～ (2日間)	血管内カテーテル診断・治療技術修得 放射線科, 循環器内科専門医養成 Angio Mentor IVR シミュレータ講習会	14名	大分大学放射線科
12月9日～ (2日間)	患者急変への対応能力向上 救急・麻酔・集中治療専門医養成 患者シミュレータ講習会	10名	大分大学スキルスラボセンター
12月16日	気管支内視鏡技術向上 呼吸器内科専門医養成 内視鏡シミュレータ講習会	3名	大分大学呼吸器内科
12月16日	チュートリアル教育講習会	27名	大分大学医学教育センター
2月3日	内視鏡下手術技術の修得 消化器内科, 産科婦人科, 腎・泌尿器科専門医 養成 内視鏡手術シミュレータ講習会	13名	大分大学消化器外科 大分大学スキルスラボセンター
3月26日～ (2日間)	第2回湯布院プライマリーケア・セミナー	不明	大分大学総合診療部
3月26日～	第3回臨床推論セミナー	不明	大分大学総合診療部

## 工学部

実施時期	FD事業名	参加者数
10月8日	知的システム開発工房主催 技術講演会 『ソフトウェア技術者教育とリーダーシップの養成 － 変化する社会で求められるソフトウェア人材 －』	約 20 人
10月26日	知的システム開発工房主催 学術情報拠点-図書館(旦那原)共催 著作権セミナー 『大学等におけるICT活用教育と著作権』	約 70 人

### (11) センター業務に関わる研修報告（協議会，学会，研究会等への参加）

本部門が企画・実施する学内の活動以外に，センターの専任教員として学外で実施される FD・授業評価部門に関する学会，研修会等に参加している。特別報告として，本年度に参加した学会，研修会等の概要を以下に記した。学会等で複数のセッションが同時に開催されている場合には，本部門長が参加したセッションについてのみ記述した。

#### 1) 長崎大学 大学教育機能開発センターシンポジウム

テーマ：大学教育におけるポートフォリオシステムの導入と今後の展望

－文部科学省特別教育研究経費「教育指導支援システムの共同利用による地域の教育力向上プロジェクト」事業－

日時：2011年3月8日(火) 13:00～17:30

場所：長崎新聞社 長崎新聞文化ホール アストピア

「大学教育の質保証」を実現する一方策として、「ポートフォリオ」が利用されているが，より効果的な活用方法を探るためのシンポジウムである。同時に会場の特設ブースにおいて，「iPortfolioMaker」の実演がおこなわれた。

- ・講演1 「ポートフォリオの枠組みと学力・教育力向上の実践」  
土持 ゲーリー 法一氏（帝京大学教授）
- ・講演2 「インストラクショナル・デザインの視点に立ったポートフォリオの教育的意義」  
鈴木 克明氏（熊本大学教授）
- ・パネリスト報告1 「熊本大学でのeポートフォリオ戦略と国内外の動向」  
中野裕司氏（熊本大学教授）
- ・パネリスト報告2 「ポートフォリオシステム(iPortfolioMaker)の紹介と実践報告」  
井ノ上憲司氏（長崎大学助教）
- ・パネルディスカッション 司会 山地弘起氏（長崎大学准教授）  
コメンテーター 鈴木克明氏（熊本大学教授）

#### 2) 2010年度 第16回FDフォーラム 公益法人 大学コンソーシアム京都

日時：2010年3月5日(土) 13:00～17:30・6日(日) 10:00～15:30

場所：京都外国語大学



## 第1日 シンポジウム『組織的FDの取り組み～FD義務化から現在（いま）～』

### ・シンポジスト

平山弓月氏（京都学国語大学外国語学部教授）「FD実践（教員研修）」

木野 茂氏（立命館大学共通教育推進機構教授）「FD実践（授業改善）」

山田剛史氏（島根大学 教育開発センター副センター長・准教授）「アセスメントの有効性」

池田輝政氏（名城大学副学長・理事）「FD戦略という視点」

### ・コーディネーター：高橋伸一（京都精華大学共通教育センター長）

組織的なFDへの取り組みをテーマに、シンポジストから報告があった。

京都外国語大学では、専任教員全員による1泊2日の合宿研修会、および全開講科目を対象とした授業評価とその結果の活用方法について報告があり、合宿研修は年間を通じての継続的な議論の契機となっていること、授業評価では、3.0以下の評価を受けた教員には学長から授業改善命令を受けることが報告された。

立命館大学からは自主講座活動から始まった授業改善への取り組みと、学生を巻き込んだFD活動（FDサミット）について報告された。FDで授業が改善されているのか、教職学の三位一体による授業改善への提案もあった。

島根大学からは、島根大学教育開発センターによるFD事業の全学への位置づけと大学間連携のあり方、多様なアセスメントによる教育改善方法と実践例について報告された。

名城大学からは組織的なFDマネジメントの事例としてFD委員会のもとに①「学生満足度チーム」、②「教育年俸チーム」、③「自主開発チーム」、④「大学院チーム」、⑤「ワークショップチーム」、⑥「教育優秀教員表彰委員会」によるFD企画委員会を設置し、活動を推進しているとの報告があった。

## 第2日

第2日は4つのミニシンポジウムと9つの分科会から一つを選び参加することとなっている。参加は事前に申込みが必要で、希望者の多い分科会は地元優先で振り分けされた。

ここでは、第4分科会「何のための、いかなるやり方での教員評価か？」について報告する。

コーディネーター、松本和一郎氏（龍谷大学理工学部教授／大学教育開発センター長）より、趣旨説明があった。大学教員には免許制度がないこと、教育方法等についての訓練を受けていないので、就職後に研鑽を積まなければならないと同時に、それらを情報開示しなければならないことから、教員評価の必要性が浮上する。そこで、午前中の3大学の報告をもとに、午後はグループワークにより解決策を議論するとの説明があった。

第1報告者、河野勝彦（京都西行大学文化学部教授）からは、平成20年に最初の評価が実施され、以降、3年に一度、3年間について実施する。項目は(1)教育領域、(2)研究・専門領域、(3)学内貢献度・社会貢献度領域について実施し、評価基準は部局で異なる、集計結果を公表すること等が報告された。また、評価の作業が教員の活動の振り返り、全体での位置づけの確認となっていることなども報告された。

第2報告者、坪井和男（中部大学学監 大学教育研究センター長 教授）からは、中部大学におけるFD実施体制、教員評価に関して、旧「教育総合評価・表彰制度」の趣旨、実績及び課題、新制度としての「教育活動顕彰制度」の導入、運代実績と課題について説明があり、本制度により、教育改善、昇格人事への活用、研修会等の活発化という成果があったが、今後、多様化する教員の

評価方法が検討課題であるとの報告であった。

第3報告者、山田雅夫（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授／評価センター長）からは、教員評価の導入経緯について平成12年度以降からの説明があり、平成20年度から「教員活動評価」制度として調査票入力システムをデータベース化しREADに連動させたこと、毎年実施され評価結果により、学部長から部局長へ、部局長から各教員へ指導が行われること。給与査定にも活用されることの報告があった。

午後の分科会では、7名のグループで議論した。私が参加したグループでは、自己紹介（名刺交換）をかねて、各大学の状況が紹介された。教員評価の実施状況は、国公立大学ではすでに実施されているが、私立大学では周囲の様子を見ながら導入する方向で動いている傾向であった。国立大学が実施するので、私立大学も導入せざるを得ない状況に追い込まれるとの意見もあった。導入にあたっては、目的と結果の活用方法に慎重さの必要性が議論された。また、評価の導入に伴う教員の作業量の増大に問題点があるとの指摘もあり、以上をまとめて私が当グループの発表を担当した。

各グループの報告の後、コーディネーターと3人の報告者から感想のコメントがあり、午後の分科会を終了した。

### 3) 授業評価研究会（関西FDフォーラム）

第7回関西地区FD連絡協議会主催イベント

授業評価ワークショップⅡ【授業評価の効率的実施と効果的活用】

日時：2011年3月16日(水) 13:00～18:00

場所：京都大学吉田南総合館3階

ミニレクチャー1「授業評価の最近の動向」米谷淳氏（神戸大学教授）

授業評価の最近の動向に関する講演が行われた。学生による授業評価の本質は「評価」ではなく「フィードバック」であり、その結果を授業改善に活用するためには、教員、学生ともに積極的に関与することが重要であるとの報告であった。

ミニレクチャー2「授業評価におけるメディア活用」福永栄一氏（大阪成蹊大学教授）

授業評価においてメディア活用で成果を上げるためには、システムの導入だけではなく、導入方法や活用法も明確にすること、検討や準備段階、関心の高い教員による試行等も含めて長期的に取り組むことが重要であるとの報告であった。

ミニレクチャーの後、ワーキングのガイダンスがあり、休憩の後、6グループに分かれ部屋を移動した。

事前アンケートにより分けられたグループは、「授業評価の実施・利用メディアに関する分科会」（1グループ）、「授業評価の分析・結果等に関する分科会」（1グループ）、「授業評価の活用に関する分科会」（4グループ）の計6グループであった。

グループワークの前半では、各大学の授業評価の現状、授業評価に関する疑問点が出され、その疑問点の質疑応答を含む中間質疑をはさんで、後半のグループワークが行われ、前半で出された課題や中間質疑を踏まえ、それらに対する解決策やより詳細な情報交換がなされた。最後の全体会では、各グループからグループワークの報告が行われ、さらに、授業評価の実施や活用、課題について活発な議論が行われた。

#### 4) 第17回大学教育研究フォーラム(京都大学)

日時: 2011年(平成23年)3月17日(木)~18日(金)

会場: 京都大学吉田南1号館/総合館・百周年時計台記念館

第1日 個人研究発表(1) 9:00~10:45, 小講演(1) 11:00~12:00

個人研究発表では, 各大学でのFD, 授業評価の事例について聴講した。

小講演では, 東アジアにおける高等教育の質保障に関して, 広島大学准教授南部広孝氏の報告を聴取した。中国では大学卒業と学士学位取得は別のものであるとの報告が印象的であった。

シンポジウムは「単位制度から見る教授学習・カリキュラム」とのテーマに5件の報告があった。

報告者1 森 利枝(大学評価・学位授与機構学位審査研究部准教授)

報告者2 溝上 慎一(京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)

報告者3 森本 剛(京都大学大学院医学研究科・医学教育推進センター講師)

報告者4 伊藤 浩行(広島大学大学院工学研究院准教授)

報告者5 澤登 秀雄(創価大学教務部課長)

司会 大塚 雄作(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

松下 佳代(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

単位を保障するために学生の学習時間をどう確保するのか, 授業時間数と学習効果との関連, 学部による授業形態, 時間割等の差異について報告があった。特に, 文系と理系では授業時間に関する考え方が異なり, 単位の実質化については合意形成が難しい印象であった。

第2日 個人研究発表(2) 9:00~10:45, 小講演(2) 11:00~12:00

個人研究発表はティーチングポートフォリオについて聴講した。発表者は佐賀大学教授皆本氏, 大阪府立高専准教授北野氏, 芝浦工業大学教授ホートン広瀬氏によるもので, 各大学で実施しているティーチングポートフォリオ作成研修会の状況が報告された。佐賀大学皆本氏, 大阪高専北野氏は, 大分大学でも講演されており, 講演後の両校での取り組みの進み具合が確認できた。座長の栗田先生は震災の影響で参加できず, 代わりに京都大学高等教育研究開発推進センター塚本教授から, 日本でのティーチングポートフォリオ導入の経緯, 現在の全国的な動向について, 分かりやすい説明があった。

小講演は, 滋賀大学教授鈴木真理子氏による「大学が支援する知のネットワーク-サイエンスコミュニケーション・デザインを支援しよう-」を聴講した。近年のサイエンスコミュニケーションの広がりについての概要と, 氏の科学研究費補助金による海外(英国)での事例について報告された。

資料（案内文書）

付録1．大学院FD講演会



## 大学院FD講演会

# 大学院におけるキャリア教育の 実践と課題

## —奈良女子大学での経験から—

### 講演会の主旨

平成19年から施行された大学院設置基準の改正により、研究科や専攻ごとに人材養成に関する目的を学則等に定めるよう規定されました。

そこで、平成20年度大学院教育改革支援プログラムに採択された奈良女子大学大学院から、GP代表、出田和宏教授を講師としてお招きし、キャリア教育に対する考え方と奈良女子大学における大学院GPを契機とする実践、実際の学生の就職先や就職活動を通じて明らかになってきた課題等についてご紹介をいただく予定です。

**対象：** 本学の教職員

**日付：** 2010年9月29日（水）

**場所：** 教養教育棟32号教室（巨野原キャンパス）  
看護学科211教室（挾間キャンパス：遠隔配信）

**時間：** 午後13時～14時30分

**その他：** 講演会終了後に講師を囲んで意見交換会を実施します。

**主催：** 大学院部門会議

**連絡先** 高等教育開発センター

内線8522 hecenter@oita-u.ac.jp

## きっちよむフォーラム2010のご案内

2010/11/9

大分大学高等教育開発センター

高等教育開発センターでは、教育改善のための研修会として、FDワークショップを開催しています。教育改革への組織的な取り組みは、大学設置基準にも規定されているところです。

今回の「きっちよむフォーラム2010」は、特別経費による「ポートフォリオ研究会第1回学習会」も兼ねており、この研究会への参加者の募集も同時に行っています。皆様方の積極的なご参加をお願いいたします。

### 「きっちよむフォーラム 2010」学内合同研修会

2010年11月24日(水曜日)13:10～16:20

旦野原キャンパス 教養教育棟 35号教室

挾間キャンパス 多目的会議室(遠隔授業装置利用)

#### 第1部：学生教職員教育改善研修会 (13:10～14:40)

学生と教職員との合同により、よりよい授業への改善を目指します。

- ① 「こんな授業はNO! 大分大学版授業NGビデオ Part 2の制作」  
報告者：廣岩 喜奈氏(経済学部)、森 裕生氏(工学研究科)
- ② 『学習ボランティア』の授業化(企画・体験等の学びのサイクル)による教育効果と今後の充実方策  
報告者：中川 忠宣先生(高等教育開発センター教授)  
「学習ボランティア入門」受講生  
関 法子氏、川口 亜由美氏(教育福祉科学部)

#### 第2部：FDワークショップ「教育課題・教育実践検討会」(14:50～16:30)

全学・学部の教育課題、教育技法の改善等について実践報告を元に検討します。

- ① 「教員免許取得のために新設された授業科目への対応について」  
藤田 敦先生(教育福祉科学部准教授)
- ② 「体験型・グループワーク等双方向授業での教育改善に向けて  
～特別経費『動機付けと形成的評価を重視した学士課程教育開発』～」  
(ポートフォリオ研究会第1回学習会を兼ねる)  
市原 宏一先生(経済学部教授)  
報告：本取り組みで導入するポートフォリオシステムの概要  
末本 哲雄先生(高等教育開発センター 講師)

<問い合わせ先> 高等教育開発センター (E-Mail [heceneter@cc.oita-u.ac.jp](mailto:heceneter@cc.oita-u.ac.jp))



## 学生のメンタルヘルス講演会 2010年11月25日(木)

本年の学生支援GP講演会は「発達障害」をもつ学生への理解を深めることを目的に下記のとおり開催いたします。

ご都合のつく方のご参加をお待ちしております。

**2010年11月25日(木)**

**15時～16時30分**

巨野原キャンパス

教育福祉科学部第1会議室

挾間キャンパス

多目的会議室

(遠隔配信システム)


**「発達に偏りをもつ学生への支援」**

講師 森岡 洋史 先生

(鹿児島大学保健管理センター所長)

主催等： 学生支援部、  
メンタルヘルス専門委員会、  
高等教育開発センター

日本人学生による  
**英語スピーチコンテスト**  
2011年3月3日(木) 13時～  
旦野原キャンパス 教養教育棟27号教室



### 英語の実力を発揮！！英語で勉強成果を発表しよう

大分大学では、外国語を含むコミュニケーション能力の向上を図ること、“仕事で英語が使える”人材の育成を目指しています。学生の皆さんに、このコンテストを機会に日頃の勉強で培っている実力を発揮して頂きたいと思います。

審査により優秀と評価された学生を表彰し、賞品を贈呈します。

#### ●内容

英語によるスピーチ

例：留学など異文化交流に関わる経験談、現代社会についての見解  
主張、研究報告、専門の学習内容と関連したプレゼンテーション

#### ●部門

発表形式により2部門に分かれます

スピーチ部門

プレゼンテーション部門

※発表時間は、どちらの部門も10分程度です。

#### ●表彰

部門ごとに審査し、優秀者を表彰します

最優秀賞（楯、賞状、副賞：iPodTouch）1名

優秀賞、奨励賞（賞状、副賞）若干名



＜申し込み・問い合わせ先＞

高等教育開発センター

hecenter@oita-u.ac.jp

＜公募要領と申込用紙＞

教育支援課にあります。

また高等教育開発センターの  
ホームページからダウンロード  
もできます。

<http://www.he.oita-u.ac.jp/>

参加者募集！！

＜締め切り＞

平成22年2月18日（金）

## 4. 大学開放推進部門・生涯学習支援システム部門

高等教育開発センターにおける生涯学習関連業務は、大学開放推進部門および生涯学習支援システム部門の2部門が連携して実施している。生涯学習関連業務においては、本学における教育及び地域社会の発展に寄与する観点から、本センターが持つ研究開発機能を基盤にして、緊急且つ重要な事業、日常的に行う事業等に分類し、軽重をつけて実施することとし、次の2部門において生涯学習社会の形成に向けてセンター業務を推進した。

- ①学開放推進部門において、公開講座・公開授業及び県民・学生への現代的課題への対応に関する学習機会の提供等の大学開放を推進する。
- ②生涯学習支援システム部門においては、県内の生涯学習行政や高等教育機関、各種活動組織等とのネットワーク化による県民の生涯学習を支援する。

ただし、生涯学習を推進するためには、学習機会を提供する側の機能（本学）と学習機会を活用する側（県民及び行政）のニーズとを適切に結びつけることが必要であり、本センターにおける取り組みも、大学開放推進部門と生涯学習支援システム部門の共同で協議を行い、連動して業務を推進してきた。また、センターの統合3年目であり、高等教育関連部門との協同に関するこれまでの協議・実践を踏まえて、高等教育関連部門との連携による生涯学習関連の情報提供の充実の取り組みや、生涯学習関連の授業のオンディマンド化等を行った。さらに、公開講座・公開授業の充実を中心とした本学の大学開放推進部門会議との連携、生涯学習に関わる学内の諸部局との連携を行った。

また、大学開放推進部門および生涯学習支援システム部門の推進の基盤となる調査研究においても、県及び市町村教育委員会生涯学習行政との連携によって、現代的な課題に関する調査分析を行いつつ、生涯学習・社会教育計画の作成や指導者の育成等に関する指導的業務を担ってきた。

### 【平成22年度の重点的な取り組み】

平成22年度は次の事業を重点として実施し、成果をあげることができた。詳細は、以下のそれぞれの項目において報告している。

- ① 戦略的大学連携支援事業における大分地域大学等連携講座の実施に関する「生涯学習部会の中心的な役割を担うとともに、本学が企画・実施した講座を3講座実施した。さらに、事業終了後の平成23年度以降の取り組みの方向性についてもまとめることができた。
- ② 平成21年度から実施した「協育」アドバイザー養成講座の修了生による「大分県『協育』アドバイザーネット」の組織化を支援・促進し、1期生と2期生の35名が会員となって活動を始めた。今後、本センターの様々な事業と協働・連携していく組織として期待できる。
- ③ 平成20年度から、きっちよむフォーラムで学生から2年続けて要望があったボランティア活動を単位化する授業として行う教養教育科目「学習ボランティア入門」を開講するとともに、本センターが所管する「学習ボランティア『フォーバル』」の活動と連動させることによって、学生のボランティア活動のシステムづくりを行った。
- ④ 中期計画2年次にあたり、「連携G P等への取組及び地方自治体をはじめとする地域の関係機関との連携を進めるとともに、これらの取組を推進するための体制整備の方針」を策定し、平成23年度計画では「学習機会提供と学習成果活用の接続、地域における接続ネットワークの形成

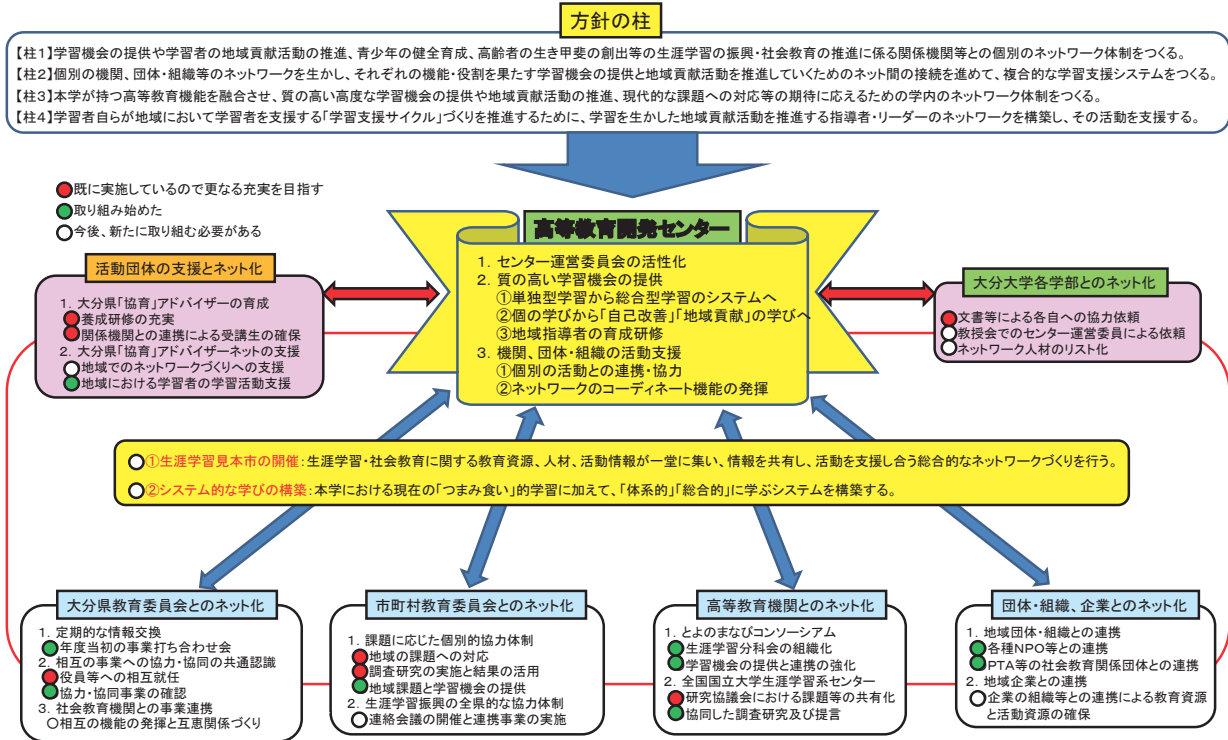


に重点的に取り組む大学開放事業を企画し、事業の方向性と研究開発を行う。」とした。

「今後の生涯学習・社会教育を推進するためのネットワーク化(体制整備)に関する方針」(平成23年3月24日:センター運営委員会にて承認)

基本理念:生涯学習の振興のために、本学における教育及び地域社会の発展に寄与する観点から、本センターが持つ研究開発機能を基盤にして、公開講座・公開授業、現代的課題への対応に関する学習機会の提供及び生涯学習行政や高等教育機関、各種活動組織等とシステムの繋がって、互恵的な関係において、県民の生涯学習を支援する「生涯学習プラットホーム」機能を充実させる。

基本方針:社会を構成する住民に対して、これまでの「個の学習への対応」に加え、「学びを自己実現や地域貢献に生かす」ための質の高い学習活動の機会を提供する。このことは全地域住民への間接的な学習支援の充実をも目指すことであり、今後の高等教育機関としての役割である。そのためには、本学の学習機会の見直し・充実に加えて、今後は関係機関や団体・組織等とのネットワークを構築し、学びの更なる充実と住民自らの地域貢献を支援するための体制づくりを推進する。



【平成22年度の事業内容】

(1) 大学開放と学習機会の提供

本学が持つ高等教育機能を発揮し、県民に対して直接に様々な学習機会を提供することは地域の大学としての価値と存在感をアピールするうえで重要であり、次のような取り組みを行った。

1) 公開講座

公開講座は、各学部が実施する講座と、本センターが現代的な課題に対応して実施する講座で構成され、開催方法としては、本学が主催する「主催講座」と市町村教育委員等と協同で行う「連携講座」となっている。平成22年度は、戦略的大学連携支援事業における「大分地域大学等連携講座」の実施によって、本学が企画・実施する講座の充実や、他大学が中核となった講座への参画など、多彩な公開講座を実施することができた。

近年の傾向として、青少年対象やその家族をも含めた講座(学内で実施する水泳教室や木工教室)、自然体験や生活経験を充実させる講座などの充実を図ってきた。社会全体の傾向として、子ども達の自然体験・生活経験の欠損が指摘されており、大分県においてもその傾向が強い。子ども達の自然体験・生活経験を充実させるためには家族全体のライフスタイルを転換する必要があることから、

家族単位で参加する講座も充実させている。それに加えて、青少年健全育成のための指導者の養成を図ることも求められ、市町村との連携講座に加え、コーディネーターの養成に関する講座も拡充した。

平成22年度の公開講座は、前期21講座、後期8講座、年間講座1講座の計30講座を実施し、前年より6講座増加した。内訳は、成人対象講座20講座で受講者598名、子ども・家族対象講座10講座で受講者347名となり、受講者の合計は945名である。前年度(1,008名)から63名減少したが、その理由として、平成21年度に実施した連携講座のうち、単年度事業として竹田市の公民館学級開校式と共催して実施した講座(286名)を今年度は実施しなかったことが大きく影響しており、公開講座全体としては講座数の増加によって幅広く拡充してきていると言える。

### ＝主催講座の概要＝

平成22年度の実施講座(本学が主催する講座であるが他大学と連携して実施する講座を含む)は24講座(前年17講座)を実施し7講座増加した。内訳は、成人対象講座15講座で受講者425名(前年205名)、子ども・家族対象講座10講座で受講者347名(前年264名)となった。

#### 【連携講座の概要】

平成22年度の連携講座は、他大学の企画する講座へ参画して実施した講座を1講座、市町村との連携講座を5講座(内、年間を通した講座を1講座)の計6講座(前年7講座)を実施し、受講者173名(前年539名)となった。

平成22年度大分大学公開講座

番号	講座名	実施場所	実施期間	実施時間数	受講者数
1	出前講座－大分大学米水津塾－	米水津地区公民館 大分大学内	6/27～3/13 (8回)	15時間	40
2	親子で体験！大分の里山・里海 春の里山探検会-植物編-	大分大学内	5/30	2時間	9組 (25名)
3	親子で体験！大分の里山・里海 夏の里海体感講座-海の生物編-	大分県マリンカルチャー センター	8/28～8/29 (2回)	19時間	16組 (39名)
4	高原の野鳥に会いに行こう	九重自然教室	6/12～6/13 (2回)	20時間	10
5	市町村連携講座	杵築市役所山香庁舎	8/23	2.5時間	42
6	市町村連携講座	佐伯市教育委員会「まな美」	12/15	1時間	19
7	市町村連携講座	大分市南大分公民館	1/6	2時間	19

8	泳げない男子の水泳教室	大分大学内	7/23~7/30 (7回)	21時間	2 2
9	泳げない女子の水泳教室	大分大学内	7/23~7/30 (7回)	21時間	2 3
10	理科や算数を使って親子で遊ぼう	大分大学内	7/17~9/11 (8回)	16時間	1 5組 (3 3名)
11	身近な大分の化石収集	大分大学内 採石場：緒方町	7/24~7/25 (2回)	8時間	4 1 家族 (9 1名)
12	夏休み子ども造形美術教室	附属中学校	8/21~8/22 (2回)	6時間	3 9
13	エレクトロニクスの世界への誘い	大分大学内	8/7	4時間	1 2
14	ヘリコプターを用いた救急医療	大分市コンパルホール	8/5	2時間	3 2
15	動物と人との共通感染症	大分市コンパルホール	8/19	2時間	1 5
16	なぜがんになるのかを知って、がんを予防し早期に発見しよう！	大分市コンパルホール	8/25	2時間	4 2
17	最近の化学療法について知ろう！	大分市コンパルホール	9/1	2時間	4 9
18	最近の手術療法や放射線療法についてよく知ろう！	大分市コンパルホール	9/8	2時間	5 2
19	緩和ケアではどんなケアが受けられるの？	大分市コンパルホール	9/15	2時間	3 8
20	告知や治療の選択に対してどう向き合ったらよいの？	大分市コンパルホール	9/22	2時間	4 1
21	人生の終わりとはどのように向き合ったらよいの？	大分市コンパルホール	9/29	2時間	3 9
22	地域ブランドの現状と課題	大分市コンパルホール	9/22~10/28 (5回)	6. 6時間	4 2
23	「協育」アドバイザー養成講座（上級編）	飯塚市立高田小学校 北九州市若松区役所	9/28~9/29 (2回)	15時間	1 3
24	豊の都市まなび直し講座 ー今から取り組む実年齢の健康な暮らしー	大分市コンパルホール	9/28~10/21 (7回)	10. 5時間	2 5

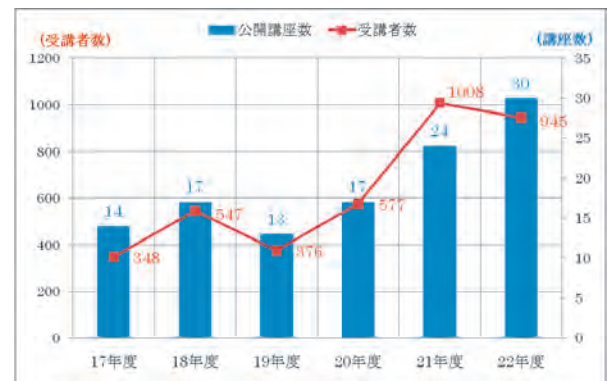
25	生涯学習としての音楽の楽しみ	大分大学内	10/2~11/13 (7回)	14時間	5
26	小学校外国語活動担当者のための英語発音講座	大分大学内	10/8~10/29 (4回)	8時間	4
27	多文化共生社会のために	大分県立芸術文化短期大学	11/6~12/11 (4回)	6時間	28
28	「協育」アドバイザー養成講座（基礎編）	大分大学内	11/13	6時間	28
29	大学学問体験セミナー	大分県立社会教育総合センター香々地青少年の家	3/29~3/30 (2回)	15時間	53
30	「協育」アドバイザー養成講座（中級編）	大分大学内	3/19~3/20 (2回)	13時間	25

### 【公開講座に関する過去6年間の講座数及び受講者数の変化】

本センターの統合3年前（平成17年度）から統合3年後（平成22年度）の6年間の講座数及び受講者数を示したものが図1である。

前述したように、平成21年度の受講者数は、単年度事業として竹田市の公民館学級開校式と共催して実施した講座（286名）の関係であり、全体の傾向としては、本センターの統合前と比較して、講座数と受講者は共に急増している。その要因としては、連携講座や現代的な課題に対応する講座など、新しい観点からの講座の開設が受講者数の増加に繋がっている。県民の生涯学習機会の提供として継続して実施する講座に加え、こうした社会の現代的な課題に対応した講座の開設が必要であると考えている。

図1 過去6年間の公開講座の実施状況



## 2) 公開授業

公開授業は、正規の授業を開放して学生と共に専門的な教育内容を体系的に学ぶ場を提供するものであり、各学部及び個々の教員からの申請で実施している。

平成22年度の公開授業は、前期45科目（前年55科目）、後期35科目（前年39科目）で計80科目（前年94科目）となっており14科目減少している。しかし、受講生は前期が50名（前年38名）、後期が25名（前年30名）の合計75名で、7名増加している。

### ○平成22年度大分大学公開授業

前期			後期		
番号	講座名	受講者数	番号	講座名	受講者数

1	基礎中国語Ⅰ	0	46	基礎中国語Ⅱ	0
2	企業取引法Ⅰ	0	47	統計学Ⅱ	0
3	生活文化論	1	48	言語・外国語(独)Ⅳ	0
4	生命観の変遷	1	49	カラダの見方・考え方	0
5	アカデミックスキル入門-社会教育計画を題材に-	1	50	現代中国社会論	1
6	西洋美術史	1	51	教育本質論	1
7	成人看護学概論	0	52	言語・外国語(独)Ⅱa	0
8	教養ドイツ語Ⅰ	0	53	哲学概論Ⅰ	0
9	環境物理学	0	54	地域と情報	1
10	教育本質論	0	55	化学物質と環境影響	0
11	言語・外国語(独)Ⅰa	0	56	基礎中国語Ⅱ	0
12	基礎中国語Ⅰ	0	57	臨床心理学演習	1
13	比較経営史Ⅰ	0	58	宇宙科学実習	0
14	電気化学	0	59	生涯学習論入門	1
15	精神保健福祉論Ⅰ	1	60	機械と文明	0
16	体育学概論	0	61	大分の水Ⅱ～大分から世界へ～	0
17	博物館学概論	0	62	いやしの音楽	3
18	哲学概論Ⅱ	1	63	応用中国語Ⅱ	0
19	臨床心理学	7	64	医学史のプロムナード	5
20	住環境論	0	65	成人教育方法入門	1
21	スポーツと生活	1	66	MOT特論Ⅲ	0
22	現代天文学とSETI	0	67	国際関係論Ⅱ	0
23	バロック音楽の世界	4	68	家庭科指導法(小)	0
24	大分の水Ⅰ	1	69	応用英語E	0
25	福祉と工学技術	1	70	現代ドイツ社会論	0
26	応用中国語Ⅰ	1	71	漢文学講読	2
27	西洋文学論	1	72	生活環境とホルモン	1
28	化学物質と環境影響	0	73	身体表現実習	0
29	社会教育から見た教育の「協働」	2	74	英語ゼミナール15	5
30	現代アジア論	3	75	消費生活論	0
31	国際関係論Ⅰ	1	76	表現形式総合論Ⅱ	2
32	漢文学研究	3	77	労働関係法Ⅱ	0
33	応用英語E	1	78	都市経営論Ⅱ	1
34	消費者教育	0	79	日本東洋美術史	0
35	企業ファイナンス論Ⅰ	0	80	数値解析	0
36	漢文学史	2			
37	身体表現基礎	2			
38	社会政策論Ⅰ	3			

39	英語ゼミナール14	7
40	労働関係法 I	0
41	生涯学習概論 I	2
42	経済学史 I	1
43	都市経営論 I	0
44	身体感覚の知覚演習	1
45	東洋史概説	0

【公開授業に関する過去8年間の講座数及び受講者数の変化】

本センターの統合5年前（平成15年度）から統合3年後（平成22年度）の8年間の公開授業数及び受講者数を示したものが図2である。

公開授業数は、平成20年度の98授業をピークに減少傾向である。また、受講者数は平成17年度をピークに減少傾向であるが、この2年は若干増加している。公開講座と違って、公開授業数と受講者数の関係性は見らないが、県民にとって魅力ある授業の、さらなる公開が求められているのであろう。

図2 過去8年間の公開授業の実施状況



3) センター事業

生涯学習社会形成の方策として、現代的な課題に関する講座の開設や調査研究を通じた地域貢献と学生への学習支援、及び市町村等との連携による地域が抱える課題に対する学習支援を行った。

前述した公開講座のうち、表に示すような本センターが主催する7の主催講座と、市町村教育委員会等と共催して開催する7の連携講座を実施した。

平成22年度高等教育開発センターが実施した公開講座

番号	講座名	実施場所	実施期間
1 共催	出前講座－大分大学米水津塾－	米水津地区公民館 大分大学内	6/27～3/13 (8回)
2 主催	親子で体験！大分の里山・里海 春の里山探検会-植物編-	大分大学内	5/30
3 主催	親子で体験！大分の里山・里海 夏の里海体感講座-海の生物編-	大分県マリンカル チャーセンター	8/28～8/29 (2回)
4 共催	高原の野鳥に会いに行こう	九重自然教室	6/12～6/13 (2回)
5 共催	市町村連携講座	杵築市役所山香庁舎	8/23

6 共催	市町村連携講座	佐伯市教育委員会 「まな美」	12/15
7 共催	市町村連携講座	大分市南大分公民館	1/6
8 主催	身近な大分の化石収集	大分大学内 採石場：緒方町	7/24～7/25 (2回)
9 主催	「協育」アドバイザー養成講座（上級編）	飯塚市立高田小学校 北九州市若松区役所	9/28～9/29 (2回)
10 共催	豊の都市まなび直し講座 —今から取り組む実年期の健康な暮らし—	大分市コンパルホール	9/28～10/21 (7回)
11 共催	多文化共生社会のために	大分県立芸術文化短期大学	11/6～12/11 (4回)
12 主催	「協育」アドバイザー養成講座（基礎編）	大分大学内	11/13
13 主催	大学での学問体験セミナー	大分県立社会教育総合センター香々地青少年の家	3/29～3/30 (2回)
14 主催	「協育」アドバイザー養成講座（中級編）	大分大学内	3/19～3/20 (2回)

### ＝主催講座＝

本センターが主催した講座は、各学部が実施する講座に加え、市町村との連携講座の拡充や、子ども達の自然体験・生活経験の欠損が指摘される中、子ども対象やその家族をも含めた講座などを強化している。子ども達の自然体験・生活経験を充実させるためには家族全体のライフスタイルを転換する必要があることから、家族単位で参加する講座も充実させている。それに加えて、青少年健全育成のための指導者の養成を図ることも求められ、コーディネーターの養成に関する講座も拡充した。さらに、高校生対象の講座を高大連携の視点から開設するなど、幅広い講座を実施した。

指導者の育成講座についてはそれぞれの項目で報告するが、ここでは青少年対象の講座の例を紹介する。

### 【公開講座の例：高校生対象】

#### 「大学での学問体験セミナー」の概要

##### 1. 趣旨

大学進学に向けて頑張っている高校生のみなさん、志望する学部や志望校は決まりましたか？なぜその学問をしたいのか、なぜその志望校なのか、説明できますか？「偏差値で行けそうなところにした。」「苦手科目の試験がないところ。」それも1つの考え方ですが、もっといい選び方があ

ります。

「大学でこれを学びたいから」、「将来こんな職業に就きたいから」、きちんと調べて、目的意識をはっきりさせることができた人こそ普段から頑張って勉強することができます。その結果、成績も上がるし、大学に入ってから後悔しにくいと私たちは考えています。

このセミナーでは、まず、高校まででは触れることのない、学問を講義形式で体験してもらいます。それから、現役の大学生に参加してもらい、高校生の頃どのようなことを考えてどんな勉強の仕方をしていたのか、大学に入ってどんな発見があったかなどを話してもらい、大学での学び方・大学生活について交流します。普段接することの少ない他校の生徒ともじっくり話をしてもらいたいと思います。

## 2. 日時

平成23年3月29日（火）15：30～30日（水）11：00

## 3. 場所 大分県立社会教育総合センター香々地青少年の家

## 4. 参加費用 食費・宿泊利用費および情報交流会費実費負担

計 2,500円（参加費用は講座開催日に徴収します。）

## 5. 募集人員

大分県内に居住する高校1・2年生 40名

## 6. 活動プログラム

時刻	内容
3月29日（火）	
15：45	開会行事・オリエンテーション
16：15	講座1「わかる心・学ぶ心の科学ー認知心理学の世界ー」 大分大学教育福祉科学部准教授 藤田 敦 氏 皆さんも「ああわかった！」という瞬間を体験したことがあると思います。 講義では、この時に心の中で起きていることを心理学的に考えてみます。
17：45	講義1終了
19：30	情報提供「大学に入る前に考えたこと、今考えていること」 現役大分大学生とかなり前に大学生だった先生方から高校時代に考えたこと、取り組んだことなど、大学の選び方など生の声を聞きます。
20：30	交流学习「大学で何を学び、どんな力をつけるか」 飲み物とお菓子で盛り上がりつつ、大学生・先生方とじっくり交流しましょう。 （入学企画支援センター有馬プランナー参加）
22：00	入浴・消灯・就寝
3月30日（水）	
8：00	朝食
9：00	講座2 「あたりまえのことに驚くー哲学のまなざしー」 大分大学教育福祉科学部教授 黒川 勲 氏 あたりまえのことに驚くことなどないように思いますが、人にはあたりまえのことに驚く力があります。そのことを通して、哲学の独特のまなざしについてお話しします。
10：30	閉会行事・退所準備・解散



## ＝連携講座＝

連携講座は、次のような連携のスタイルがあり、1事例を紹介する。

- 市町村が主催する講座を本センターと共催して実施する講座（大分市・佐伯市の2市）
- 本センターの調査研究を市町村に還元するために、本センターが主催する講座を希望する市町村と共催して実施する講座（杵築市・大分市・佐伯市の3市）
- 大分地域の他の大学が主催する講座に参画して実施する講座（1講座）

### （例）平成22年度大分大学米水津塾の活動

期日	講座内容	場所	担当教員
6月27日(日)	開講式 米水津塾生によるプレゼンテーション作成1	大分大学 情報基盤センター	高等教育開発センター 山下 茂先生他
7月15日(木)	第2回講座 子ども達をうまく育てるために ー法律の観点から考えるー	米水津地区公民館	経済学部 青野先生
9月16日(木)	第3回講座 スターリングエンジンの仕組み	米水津地区公民館	工学部 加藤先生
10月9日(土)	第4回講座 沖黒島自然観察	米水津地区公民館	元 弥生町立昭和中学 校長 真柴先生
11月7日(日)	第5回講座 米水津塾生によるプレゼンテーション作成2	大分大学 情報基盤センター	高等教育開発センター 山下 茂先生他
1月20日(木)	第6回講座 大学の授業をおもしろくする工夫	米水津地区公民館	高等教育開発センター 末本先生
2月17日(木)	第7回講座 子ども達と行った体験活動プログラム	米水津地区公民館	高等教育開発センター 岡田先生
3月13日(日)	閉講式 米水津塾生によるプレゼンテーション大会	米水津地区公民館	高等教育開発センター 山下 茂先生他

## （2）生涯学習指導者研修事業

### 【「協育」アドバイザー養成講座】

生涯学習行政においても現代的な最大の課題として取り組んでいる「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進する中核的な人材の養成を行い、学校や地域での子どもの健全育成及び大人社会の再構築を推進する講座を以下のように実施した。2期生の修了生は18名である。

さらに、受講生の職場や地域での日常的な活動を支援するために、修了生のネットワーク（大分県「協育」アドバイザーネット）を組織した。

## 《研修の概要》

### 「『協育』アドバイザー養成講座」の実施について

#### 1. 趣旨

改正教育基本法や教育振興基本計画をふまえ家庭・学校・地域社会が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる体制づくりを目的として「学校支援地域本部事業」が始まった。これまでは、家庭、学校、地域社会がそれぞれの取り組みとして行うことにとどまっており、もはや単独での取り組みは限界にきていると言わざるをえない状況であることから、家庭、学校、地域社会の相互の連携協力を促し、それぞれの教育力を向上させるとともに、教育を協働して行う必要性が明確になったと言える。これからの教育が、「青少年を育成する学校教育、社会教育、家庭教育の連携」、「家庭教育を支援するための福祉活動との連携」、「高齢者の生きがいを創出するための福祉活動の連携」等々、地域全体が連携協力して、縦割りの取り組みから、「横の接続」を促進する取り組みの重要性が認識されてきたと言える。

そこで、こうした取り組みに対して民間の教育力を発揮し、「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進するために、地域ぐるみでの学校や地域での子どもの健全育成や家庭教育への積極的な支援、福祉と教育の融合、及び大人社会の再構築を推進する中核的な人材の養成を行うことを目的として開講する。

さらに、受講修了者のネットワークを組織化し、受講生の職場や地域での日常的な活動を支援するとともに、受講生の活動情報を収集・分析し、「協育」コーディネーター育成プログラムの開発や関係者へ提供することによって、本県における「家庭、学校、地域社会の教育の協働」システムの構築に寄与する。

#### 2. 内容・時期

- ①（基礎編）協育アドバイザー基礎研修「キャリア教育コーディネーター研修」：11月実施
- ②（中級編）協育アドバイザー専門研修：基礎編修了者で希望する者を対象に3月実施
- ③（上級編）協育アドバイザー実践研修：各研修修了者で希望する者を対象に9月頃実施

3. 対象者 講座の趣旨に賛同し、職場及び地域等において受講したことを活用できる者 等

4. 修了証 各コースの講座を受講した者には、コースごとに大分大学長の修了証を授与する。

#### 5. 修了者のネットワーク化

修了者が、それぞれの職場や地域での日常的な活動を充実するために、活動情報の収集・提供、それぞれの活動の情報交換、及び各種研修等を行うために「大分『協育』アドバイザーネット」を組織する。

### 平成22年度大分大学高等教育開発センター「『協育』アドバイザー養成講座」【基礎編】

#### 「協育」アドバイザー基礎研修」（2期生）実施要項

#### 1. 趣旨

子どもは人間社会（地域社会）で教育され、「子ども自身が生き方を学ぶ」（キャリア教育）ための様々な教育活動や生きた体験が求められている。そのために家庭・学校・地域社会が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進し、学校や地域における子どもの生きた教育活動支援が重要となっている。

よって、別添「『協育』アドバイザー養成講座」の実施について」により、教育の協働を推進する中核的な人材を養成するための基礎的な研修を実施する。

2. 日時 平成22年11月13日(土) 9:00開講 ～ 16:30閉講
3. 講師 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク(東京都杉並区)  
生重幸恵(統括マネージャー) 井上尚子(統括サブマネージャー)  
京都高度技術研究所  
石川 陽(ネットワークマネージャー)

#### 4. 講座の内容

- 研修1: キャリア教育(子どもの生き方の学び)についての基礎知識
1. 我が国の社会・産業の現状と課題
  2. 「キャリア教育」「キャリア教育支援」「キャリア教育コーディネーター」の意味
  3. 本研修が目指す方向としての我が国のキャリア教育の現状と課題
- 研修2: 地域におけるキャリア教育(子どもの生き方の学び)及び支援の実践
1. キャリア教育に関わる全国的な取り組み状況
  2. キャリア教育と学校教育・社会教育
- 研修3: キャリア教育コーディネーターの機能と役割
1. コーディネーターの機能
  2. キャリア教育コーディネーターの役割
- 研修4: 学校と地域・企業等とのネットワーク構築方法(地域資源の理解とネットワークの構築)
1. コーディネーターの業務
  2. 地域における人的ネットワーク構築の必要性
  3. コーディネーターのネットワーク化

### 平成22年度大分大学高等教育開発センター「『協育』アドバイザー養成講座」【中級編】 「協育アドバイザー専門研修」(2期生対象)実施要項

#### 1. 趣旨

家庭・学校・地域社会が一体となり、地域ぐるみで子どもを育てる「家庭、学校、地域社会の教育の協働」を推進し、学校や地域における子どもの健全育成や、家庭教育への積極的な支援を行う体制の整備のため、その中核的な人材の養成を行うための専門的な研修を実施する。その際、コーディネート能力の養成とともに、キャリア教育や体験活動に関するプログラム企画力を養成し、提案し、実践するためのスキルの向上を図ることを目的とする。

2. 期日 平成23年3月19日(土)・20日(日)

#### 3. 講座の内容

	時間	内 容
一	9:00～	開講式(挨拶・説明)
日 目	9:20 ～11:20	講義1 家庭教育の現状・課題と教育の協働の視点 講師 大分大学教育福祉科学部教授 山岸治男
	11:30 ～14:20	講義2 地域社会の現状・課題と教育の協働の視点 講師 大分大学高等教育開発センター准教授 岡田正彦
	14:30 ～16:30	講義3 学校教育の現状・課題と教育の協働の視点 講師 大分大学教育福祉科学部教授 山崎清男
二 日 目	9:00 ～	講義4 子どものための「協育」を推進するコーディネーターの実際 ～全国のキャリア教育コーディネーターの活動事例を含めて～ 講師 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長 生重幸恵氏
	14:00	講義5 身近なエリアの人を巻き込んで企画する「子どものためのプログラム」作成 (演習) 講師 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長 生重幸恵氏 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク 井上尚子氏
	14:10 ～16:10	講義6 「協育」アドバイザーとしての基礎的スキルの学び (演習) 講師 大分大学高等教育開発センター教授 中川忠宣
	16:20～	閉講式(修了証授与・アンケート等)

## 平成22年度大分大学高等教育開発センター『協育』アドバイザー養成講座【上級編】

### 「協育」アドバイザー実践研修（1期生対象）実施要項

#### 1. 目的

本研修は『協育』アドバイザー養成講座の基礎編（中級編）を修了し、「大分県『協育』アドバイザーネット」に登録した者を対象に、県内外での「教育の協働」を推進・実践する先進地を視察し、地域づくりや青少年の健全育成に関する中心的指導者・コーディネーターとしての資質を向上させ、以て、「教育の協働」の推進に関するアドバイスの力量を高めることを目的とする。

2. 期日 平成22年9月28日（火） 7：30 大分大学発～

29日（水） 17：00 大分大学着（1泊2日・北九州泊）

#### 3. 視察先

平成22年9月28日（火） 11：00～14：30

##### ①福岡県飯塚市立高田小学校

飯塚市内の全ての小学校で実施されている「学校開放事業『マナビ塾』」の視察・交流及び『マナビ塾』の取り組みに関する研修

平成22年9月29日（水） 10：00～12：00

##### ②北九州市若松区「若松みらいネット」の取り組みに関する研修及び活動グループとの意見交換

### 《大分県「協育」アドバイザーネットの概要》

#### 大分県『協育』アドバイザーネット会則

##### 【第1条】 名称と構成

「大分県『協育』アドバイザーネット」（以下、「本会」という）は、大分大学高等教育開発センターが主催する「『協育』アドバイザー養成講座」修了者の中から入会を希望する者で構成し、「教育の協働」を推進する活動を行うために組織する。

##### 【第2条】 本会の組織と会議

本会に運営委員会及びプロジェクトチームを置く。

1. 運営委員会は全員が所属し、委員長は年度初めに互選する。なお、運営委員会議は、年2・3回、運営委員会内の各組織等で行う会議は適宜開催する。
2. 本会が主体的に取り組む活動を行うためのプロジェクトチームを置き、希望する会員で組織する。なお、プロジェクトチームの開催は別途協議する。
3. 運営委員会及びプロジェクトチームの活動に関する事務を行うために事務局を置く。事務局の開催は運営委員会及びプロジェクトチームの会合に併せて必要に応じて開催する。

##### 【第3条】 本会の目的

第1条により組織されたメンバーが、その趣旨に添った活動を行う事によって次のことを達成することを目的とする。

1. 集まり、学習し、交流し、会員相互の利益に資すること。
2. 同時に、大学の利益に資すること。

3. また、社会の利益に資すること。

**【第4条】 本会の活動**

本会の目的を達成するために、別表1に定める「基本的なコンセプト」に関する事業を行う。その際の各組織の役割を次の通りとする。

1. 運営委員会は、事業グループ及びそのチームの責任において学習会・交流会等の事業を実施することとし、総務グループにおいて本会の事務に関する一切を行うこととする。
2. プロジェクトチームは、本会の主体的なテーマに関する独自の活動を行うこととする。
3. 事務局は、運営委員会及びプロジェクトチームの活動の準備、会報の発行、各種情報の収集・提供活動、会計事務、その他、目的を実現するための活動を行う。

**【第5条】 会計**

会の会計は、会費（1,000円/年）と寄付などをもって充て、毎年、第1回運営委員会において会計報告を行う。

**【第6条】 その他**

1. 会への脱退・再加入及び活動への参加・不参加は自由であり、事務局やプロジェクトチームへの立候補あるいは推薦も自由である。
2. この会則は、平成22年9月6日から適用する。

**=表1-事業に関する基本的な3つのコンセプト=**

**コンセプト1：指導的人材の育成とボランティア人口の拡大に関する取り組みを行う【人材育成事情】**

1. 「協育」アドバイザー育成事業
  - (1) アドバイススキル向上事業
 

会員の、日常的な地域活動やネットの普及実践活動のスキルアップのための研修事業を行う。

    - ①運営委員会に併せた研修会の開催
    - ②「協育」アドバイザー養成講座への参加促進
    - ③教育の協働に関する各種研修会への参加促進
  - (2) 講師資格者育成事業
 

会員を講師として派遣する取り組みを推進するために講師育成を行う。

    - ①大分大学高等教育開発センターのゼミ活動への参加
    - ②外部予算等による中央研修・資格取得研修への派遣
2. 「協育」コーディネーター交流事業
 

アドバイザーが中核となって、各種コーディネーターや一般指導者が一堂に会した「地域協育活動指導者交流研修」（仮称）を各地域において実施する。
3. 学習ボランティア育成事業
 

ボランティア活動者の受け入れや活動指導を行う。

  - ①会員の活動への積極的な受け入れと指導
  - ②学生ボランティアや中高校生の職場体験等の受け入れの斡旋
4. 研修事業への参画
 

目的を同じにする機関・組織等の事業へ積極的な参画する。

  - ①大分大学高等教育開発センターが実施する「協育」アドバイザー養成講座等の協力者として運営に参画する。

②その他、趣旨に賛同する研修事業へ参画する。

## コンセプト2：「協育」の取り組みを推進するための支援及び実践的な事業を行う【普及・実践事業】

### 1. コンサルティング事業

教育の協働を推進するための各種研修事業に講師や事例発表者を派遣し、ワークショップ等を行って、協育システム作りを支援するための事業を行う。

### 2. 「協育」推進事業

教育の協働を推進するために以下のような事業を行う。

#### (1) モデル的实践事業

幼稚園教育支援事業（H23～）や地域協育振興事業（H23～）など、「教育の協働」を推進するためのモデル的な事業を行う。

#### (2) テーマプロジェクト事業

読み書かせプロジェクト事業やエコ活動プロジェクト事業、障害者共存プロジェクト事業などのような時期の課題に対して、「協育」という視点からのプロジェクト的な事業を行う。

#### (3) 子ども活動推進事業

青少年の自然体験・生活体験の推進や地域発見型体験活動など、「協育」という視点からの青少年の健全育成プログラム開発事業を行う。

#### (4) 共催事業

教育の協働という目的を同じにする機関・組織等の事業との積極的な連携・共催を行う。

##### ①大分大学開放イベントへの事業参加とパネル展示

##### ②生涯学習見本市の実施

○地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会の共催

○教育資源と学習ニーズを繋ぐ「協育見本市」の共催

##### ③その他、趣旨に賛同する研修事業へ参画する。

## コンセプト3：「協育」を推進するための基盤づくり事業を行う【研究・啓発事業】

### 1. 調査研究事業

教育の協働の推進に関する県内外の各種活動情報調査や意識調査等を行う。

### 2. 協育資料作成事業

教育の協働に関する調査研究やそれを基にした普及本の刊行、ハウツー本、研修会の成果をまとめた資料等を年次計画によって作成・発刊する。

### 3. 広報・啓発事業

大分県「協育」アドバイザーネットの活動に関するPR活動を行う。

## (4) 大学教育と生涯学習の接続・連携

### 1) 生涯学習・社会教育に関する授業の実施

#### 【生涯学習論入門】

生涯学習に関する基本的理解を得、大学の授業なども含めて自分の学習を経営し、展開する

ための視点を獲得することを目的として、生涯学習に関わる諸側面を講義した。

### 【キャリアデザイン入門】

自分自身のキャリア（進路・職業）をデザイン（設計・構想）する際に必要な考え方について、「キャリア論」や「学習論」の観点から自己・他者理解を深めることを目的として、演習と講義をした。

### 【社会教育から見た「教育の協働」】

より豊かな学校教育活動を支援するための地域住民の活動のあり方、教職員の意識について、調査研究資料等を参考にしながら、演習と講義をした。

### 【成人教育方法入門】

人格が確立した成人への教育の方法について、ファシリテーターの育成という観点から演習と講義をした。

### 【学習ボランティア入門】

きつちよむフォーラムで学生から要望があったボランティア活動を単位化する授業として平成22年度前期から新たに開講したため、その概要を紹介する。

授業科目名	必須・選択	単位	学期曜・限	対象者	講師名(所属)
学習ボランティア入門 Introduction to Learning Volunteer	選 択	2	前期 火1限	1～4年	(高等教育開発センター) 中川忠宣内線：6027 岡田正彦内線：7647

#### 【授業のねらい】

現代社会において少子高齢化が進む中、青少年の健全育成や団塊世代・高齢者の地域貢献などの活動の推進が、教育及び福祉等の分野において大きな課題とされ、家庭や学校、地域住民等の相互の連携・協力を通じた具体的な取り組みが推進されていますが、特にこの分野においては地域住民の積極的な関わりが求められています。そこで、こうした地域社会での活動について、自らが学んだ成果を、他の人々の学習や福祉活動に活用（支援・指導等）する学習ボランティアとして参加することを通して、地域社会への理解や自分自身のコミュニケーション能力・職業観などの学びを深めます。そのために、ボランティアに関する基礎知識と、自分が選んだボランティア活動体験を組み合わせ、ボランティアの意義について学びます。

#### 【具体的な到達目標】

1. 学習ボランティアの心得と社会的意義を説明できる。
2. ボランティア活動を通しての自分自身の変化や成長に気づき、ボランティア活動の大切さを説明できる。
3. 今後のボランティア活動に関する自分自身の考え方を述べることができる。

#### 【授業の内容】

1. ガイダンス・学習ボランティアって何？	4/13
2. 生涯学習社会の形成のための学習ボランティアの意義を考えよう	4/20
3. 自分にとってのボランティアの意義とボランティアの心得を考えよう	4/27
4. ボランティア活動計画を作ろう	5/11
5～13：地域でのボランティア活動	○各自の 計画に沿 って活動 する
① 13時間以上のボランティア活動を行う	
② 活動内容は、学校教育、社会教育、社会福祉の分野とする	
③ 1～4の授業や時間外学習で計画した個人又はグループでの活動を自主的に行う	
④ 活動報告書（「学習ボランティアの記録」）を作成する	

14. ボランティア活動報告を整理しよう	7/20
15. ボランティア活動から学んだことを語り合おう	7/27

## ＝本学及び学部の授業・講習との接続＝

### 【教育本質論】

「教育本質論」は教員免許状取得の必須科目であり、基本教職に関する科目に位置づけられている。教員免許状取得を希望する学生が最初に受講する科目になる。例年通り、前期には教育福祉科学部の情報社会文化課程と人間福祉科学課程、教育福祉科学部以外の学部を対象に開講し、後期には教育福祉科学部の学校教育課程を対象に開講した。

### 【大分の水Ⅰ】 【大分の水Ⅱ】 【里海と里山Ⅰ】 【里海と里山Ⅱ】

これらの科目は、平成21年度選定大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム「水辺の地域体験活動による初年次教育の推進—学生の社会性向上を図る総合的教養教育の実践—」（以下水辺GPと略記）の取り組みとして行われている授業科目であり、水辺GPの事務局員である岡田が関与している。具体的には、【大分の水Ⅰ】および【大分の水Ⅱ】では、週末に行われる地域体験活動プログラムのコーディネートや運営を行い、【里海と里山Ⅰ】および【里海と里山Ⅱ】では、学生を対象に行われる集中講義を企画運営するとともに、小学生とその保護者を対象とした公開講座を実施し、一部のプログラムを相互乗り入れのセッションとすることで教育効果の向上を図った。実際に、講義には関心を示さなかった学生が、小学生と一緒に活動したコミュニケーション改善ワークショップでは非常に熱心に活動するなど、想定以上の効果を得ることができた。地域での体験活動に加え、このような異年齢・異なる立場の人々が交流することによって教育効果を高める取り組みを今後も進めていきたい。

### 【教師学】（3年生：複数教員）

「教師学」は教員免許状取得の必須科目であり、3年生前期までの学習を整理統合し、自らが目指す教師像について、生涯学習の観点から、社会教育との連結という視点での指導を行った。

### 【教師学】（1年生：複数教員）

1年生の「教師学」は、平成22年度からのカリキュラムの再編成で始まった科目で、教員免許状取得の必須で、教員としての学びを計画付ける導入科目として設定された。求められる教師像を探る中で、自らが目指す教師像について、生涯学習の観点から社会教育との連結という視点での指導を行った。

### 【中学校学級経営論】

「中学校学級経営論」は中学校教員一種免許状取得の必須科目であり、学校教育の中での中学校という特性を中心に、「学級経営案の作成」を授業の中心にして、講義と演習を交えて授業した。

### 【教員免許状更新講習】

中川が現職の教職員の免許状更新講習において、必須科目である「専門職たる教員の役割」の講座（4コマ）及び、その講義内容をさらに演習等で深める「社会教育と学校教育の連携」という選択科目（4コマ×1回）を担当し、学校教育を行う教員の役割に加え、それを更に充実するための社会教育との連結という視点での講義を行った。

また、岡田が選択科目「現代の児童福祉と家庭教育の課題」（4コマ×1回の内2コマを担当）を担当した。



## 2) 学習ボランティア『フォーバル』の活動

「学習ボランティア『フォーバル』」の活動を、「学習ボランティア入門」の授業と連動させることによって、学生のボランティア活動のシステムづくりを行った。年度当初の募集や研修会などを通して、平成22年度は新規に学習ボランティアに登録した学生が27名(前年10名)あり、これまでの活動を体系的に行う基盤作りをした。

### \* 「フォーバル」とは

Oita University Volunteer Activity for Lifelong Learning = 「Fouvall」(フォーバル)

### \* H22年度登録者数(毎年、年度当初に更新)

H20年登録：3名      H21年登録：10名      H22年登録者：27名

### 【平成22年度の活動】

#### \* ボランティア研修会

- ①6月5日      大分大学附属中学校ボランティア「サタデー・スタディー」の説明・研修会  
(8名参加)
- ②6月30日      学習ボランティア研修会の開催(意見交換と年間計画)(参加者16名)
- ③8月3日      夏講座(米水津プロジェクト、夏の里海体感講座)の説明会(参加者1名)

#### \* 活動実績

- ・5月30日      大分地域大学等連携講座「春の里山探検会」スタッフ(参加者2名)
- ・6月12日～13日      大分大学公開講座「高原の野鳥に会いに行こう」スタッフ(参加者2名)
- ・6月16日～18日      由布市生活体験スクールスタッフ(参加者3名)
- ・6月20日      連携GP「共通教育プログラム」アシスタント(参加者3名)
- ・6月27日      大分大学公開講座「米水津塾」パソコン指導(参加者5名)
- ・7月14日      連携GP「共通教育プログラム」アシスタント(参加者2名)
- ・7月24日      第21回めいじサマーフェスティバル大分大学ブース(参加者4名)
- ・8月28日～29日      大分地域大学等連携講座「夏の里海体感講座」スタッフ(参加者1名)
- ・9月18日      「うーた」の里山林再生プロジェクト活動(参加者2名)
- ・10月17日      大分市明治地区「子ども自然体験事業」でのフルート演奏(参加者2名)
- ・10月31日      大学開放イベント「生涯学習見本市」スタッフ(参加者2名)
- ・11月6日      国民読書年記念フォーラムスタッフ(参加者4名)
- ・11月7日      大分大学公開講座「米水津塾」パソコン指導(参加者5名)
- ・11月14日      連携GP「共通教育プログラム」アシスタント(参加者3名)
- ・11月17日      大分大学きっちよむフォーラムで発表(参加者2名)  
「大分大学附属中学校への「学習ボランティア」の企画・運営を通して学んだこと」
- ・11月20日      「うーた」の里山林再生プロジェクト活動(参加者1名)
- ・12月18日      日本教育工学会研究会スタッフ(参加者6名)
- ・2月16日      「サタデー・スタディー」反省会(参加者13名)
- ・2月17日      大分大学公開講座「米水津塾」パソコン指導(参加者1名)
- ・2月26日～27日      地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会スタッフ(参加者8名)

- ・ 3月3日 大分市立鴛野小学校託児ボランティア（参加者2名）
- ・ 3月9日 大分市立鴛野小学校卒業生への学力向上プロジェクト（参加者2名）

**\* 企画事業**

○ 6月～1月の間の月2回、大分大学附属中学校一年生の学習支援を行う「サタデー・スター（13回）」（登録者15名延べ66名）を開始した。

**（5）情報収集提供・学習相談活動**

**＝情報収集・提供＝**

平成21年度末に本センターホームページの生涯学習関連をリニューアルして「生涯学習支援」について以下のように構成した。このHPを活用して、年度当初には年間計画を掲載すると共に、年間を通して各講座等の詳細情報とその実施報告の日常的な更新をした。

**＝ホームページの構成＝**

概 要：	①生涯学習支援の概要 ②年度事業計画 ③研究資料 ④生涯学習情報
県民の皆様へ：	①公開講座の紹介 ②公開授業の紹介 ③各種学習機会の紹介
学生の方々へ：	①ボランティア情報 ②学習ボランティア申し込み ③学習支援
お問い合わせ	

情報提供については、ホームページで公開講座・公開授業の受講者募集や公開講座の授業・活動風景を含めた活動状況の報告などを行った。また、公開講座・公開授業パンフレットを前期、後期別に2回作成して、大分市を中心に配布したり、センターが主催する各種講座については別途チラシを作成して事業ごとに募集をするなどして、広く県内全体への広報を行った。

**＝学習相談＝**

社会人の学習活動へのアドバイスや学生の授業や卒業論文、就職活動等の生涯学習に関わる内容について、資料を提供するなどして相談活動を行った。

**（6）学内のネットワーク化**

**1）部門会議の充実**

年度当初の年間実施計画の協議、後期における各種取り組み計画等について、部門長から提案して審議するとともに、個別の案件については、関係する部門委員に相談するなどして生涯学習関連の取り組みの充実を図った。

**2）生涯学習支援に関する教員のネットワーク化**

公開講座の実施については、各学部の計画での実施や教員が自主的に実施するなどのシステムがある。さらに、大分水フォーラムを通じた連携やセンターが各課題に対応する講座、市町村と連携・協同で実施する講座・調査研究においても一定のネットワークが出来ている。しかし、今後、生涯学習支援に関する地域貢献をさらに充実するためには、幅広い教員の更なる組織化が求められている。

## (7) 地域生涯学習支援システムの整備

本センターの役割として、県民の生涯学習を支援するシステムづくりや、その中で重要な役割を果たす社会教育関係職員、指導者・ボランティアなどの力量の向上に取り組むことで、間接的に地域住民の学習を支援することが重要であることから、そうした連携のシステムをとおしての地域貢献を行うために次の取り組みを行った。

### 1) 生涯学習支援ネットワーク化の取り組み

#### ①県及び市町村教育委員会とのネットワークづくり

県教育員会社会教育課や県立社会教育総合センターと、個別の施策に関する打ち合わせ会を実施するなどして、連携を深める取り組みを行った。さらに、県教育員会社会教育課が実施する市町村との会議への出席や、本センターが実施する各種取り組みについて市町村事業と協同で実施するなどして市町村との日常的な連携を取りながらネットワーク化を図った。今後、こうした基盤をさらに深め、生涯学習推進上の地域貢献を充実するための県及び市町村とのネットワークシステムを構築していく。

#### ②県内高等教育機関のネットワーク化

現在休止中である大分地域大学等生涯学習協議会の再開に関して、「文部科学省戦略的大学連携支援事業」の生涯学習関係事業において4回の分科会を行う中で、各学校の現状を把握するとともに担当者との意思疎通を図ることができた。今後、将来的なネットワーク化について引き続き検討することとしている。

### 2) 市町村・団体等との共同・連携事業

#### ①第4回地域発「活力・発展・安心」デザイン実践交流会

行財政改革の中で、平成の大合併が一応終結したが、このことによる地域の活性化の取り組みにもさまざまな課題が浮き彫りになり、今まさに、地域づくりは「官から民へ」の時代となった。そこで、「民」という立場でアイデアを発揮し、県内活動グループや機関等のネットワークを築き、素晴らしい「デザイン」を描きながら取り組んでいる県内の個人・団体・グループの活動情報を共有し、「子ども育て」に加えて、新たに「我がまちづくり」という観点からの実践交流を行い、今後の地域活動に生かしていくエネルギーを高めていく実践交流会を実施した。地元の東国東地域デザイン会議と大分大学高等教育開発センターが主催して、今回から大分県生涯教育学会との共催、また、福岡県にあるNPO法人幼老共生まちづくり支援協会の移動フォーラム「生涯教育まちづくりフォーラム in おおいた」とも共催して実施した。

この交流会は専任教員の中川教授と岡田准教授が実行委員として参画し、分散会の司会を務めるとともに、学習ボランティアの学生7名が、交流会の準備、当日の活動発表や受付、研修の記録等のボランティアを行うなどして、各地で熱心に活動している人々に触れることで、よい刺激を受けることができた。

主催 東国東地域デザイン会議 大分大学高等教育開発センター

共催 NPO法人幼老共生まちづくり支援協会 大分県生涯教育学会

会場 国東市安岐町富清 2244 「梅園の里」

期 日 平成23年2月26日（土）～27日（日）

参加者 実人数 137人

一 日 目	10:30 開会行事 10:50 基調提案① 「コミュニティ・スクール高田」 学校が元気 地域が元気 地域とともに創る高田小「合」校 提案：福岡県飯塚市立高田小学校 城谷登志江校長 11:40 実践事例発表 ○第1分科会：子ども育ての秘訣を考える活動事例（5事例） ○第2分科会：我がまちづくりを考える活動事例（5事例） 16:10 特別講演 講師 三浦清一郎 氏（生涯学習・社会システム研究者） 演題：「主体性」と「学習」を優先した現代教育の忘れもの —教育における「不作為」と鍛錬の空白— 17:30～情報交換会（みなさんの活動状況を交換しましょう）
二 日 目	9:30 基調提案②「読書の魅力に触れる」～読み聞かせとペープサート～ 提案：大分県「協育」アドバイザーネット 10:10 テーマを語ろう！全体討論会 <u>テーマ：大いに語ろう～子ども育ての秘訣、我がまちづくりの夢を！～</u> 1部：リレートーク（参加者が本会テーマに関する意見を自由に3分間発表） 2部：シンポジウム（リレートークに関する実現性と実現への方策） 12:00 閉会行事

## ②NPO法人大分水フォーラムとの連携事業

NPO法人大分水フォーラムとの連携では、センター専任教員の岡田がフォーラムの事務局員として、事業の企画・運営に関わった。また、同フォーラムは、平成21年度に選定された大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム「水辺の地域体験活動による初年次教育の推進—学生の社会性向上を図る総合的教養教育の実践—」での取り組みを推進しており、こちらの取り組みとも重ねる形で、プログラムを企画・運営した。その結果、大学生向けの授業と地域向けの公開講座を並行してある部分は重ねながら実施し、相互に教育効果を高める工夫を行うことができた。大分水フォーラムとの連携は、平成23年度以降も継続する計画である。

## ③津久見市公民館講座への講師派遣

津久見市教育委員会との連携の一環として、津久見市における公民館講座の一つの柱である高齢者学級に大分大学から講師を派遣している。本年度は以下の4名を講師として派遣した。今後の課題としては、個別の講師派遣ではなく体系的な連携を推進する必要がある。

- ・津愛大学4月学習会 経済学部藤村賢訓准教授「身近な法律の話」
- ・津愛大学6月学習会 経済学部山浦陽一准教授「山村を元気にする取り組み」
- ・津愛大学10月学習会 高等教育開発センター岡田正彦准教授「学んで使ってまた学ぶ」
- ・津愛大学1月学習会 教育福祉科学部大上和敏講師「大分の温泉の話」

## ④佐伯市と共同した調査研究事業

「学校支援地域本部事業」が実施された平成20年度から、県教育委員会と協同で、学校、家庭、地域の教育の協働の取り組みについて調査研究を行い、一定の方向性を明らかにしてきた。

しかし、これまでの調査方法では明らかにならない課題も明確になったことから、現在、専任

のコーディネーターを配置した校区ネットワークが組織化されている地域と未配置でネットワークが組織化されていない地域があるためにその差異や公民館の役割を分析できること、これまでの調査研究の成果を活用した研修会を定期的実施していること、さらに、県の「地域協育振興プラン」の趣旨を取り入れた実践を行っていること等から、佐伯市教育委員会と協同で調査研究を行った。

#### ○調査対象者

- ①児童生徒：4,399人（小学生2,451人 中学生1,948人）
- ②教職員：511人（小学校312人 中学校198人 不明1人）
- ③地域住民：1,084人（保護者887人 保護者以外の住民135人 不明62人）
- ④コーディネーター（佐伯市コーディネーター8人 ※参考：全県48人）

#### ○調査研究方法

大分大学「協育」研究会及び佐伯市教育委員会のメンバー等で調査研究会を設置し、関係者の協議によって調査計画を策定するとともに、それぞれが以下のことを行った。

- ①佐伯教育委員会が、各学校及び地域住民へ依頼し、調査票を配布・回収する。
- ②大分大学においては、高等教育開発センター事業として実施することとし、大分大学「協育」研究会において調査内容の作成、結果の集計及び分析を行う。

#### ○調査期間

平成22年6月下旬から7月下旬

### （8）生涯学習推進と社会的活動の取り組み

県及び市町村教育委員会生涯学習行政等と連携して、生涯学習・社会教育に関する調査研究の成果を普及・還元するとともに、本センターが持つ各種情報等を生かした生涯学習の推進とともに、センターとしての社会的活動による地域貢献の取り組みを行った。

#### 1) 県教育委員会生涯学習・社会教育行政との連携

##### ＝生涯学習関係者研修事業＝

###### 【県教育委員会研修事業】

- 文部科学省が実施する「学校支援地域本部事業」に係る「コーディネーター養成研修会」（4回シリーズ）のスーパーバイザーとして研修の企画に関わると共に、各研修会での講演、ファシリテーター等を行った。この取り組みは3年間継続の2年目である。
- 「親学」推進員養成講座で研修6「まとめ～これからの親学～」を担当した。

###### 【県立社会教育総合センター等研修事業】

- 「おおいた学びの輪推進事業」は、おおいた県民アカデミア大学事業を引き継ぐもので、県民を対象として県内各地で開催し、学習の成果を生かした地域活動を促進する学習機会提供事業であり、「生涯学習支援リーダー養成講座」は地域の指導者育成として5回シリーズで実施され、講師やファシリテーターとして中川と岡田（第5回「ボランティア活動、学習支援活動におけるリーダーの役割」）が講座を担当した。現代学講座では、第7回豊後大野会場コースの講座「豊肥地域の地域づくりの現状と課題」を岡田が担当した。また、「おおいた学びフェ

スタ」には、平成 22 年度に実施した大分地域の 8 大学等が連携して開講する「大分地域大学等連携講座」の活動状況を紹介するために参加した。

#### ＝委員等への就任＝

##### 【県教育委員会社会教育課関係】

○大分県社会教育委員（岡田）

大分県社会教育委員として、「子どもの「生きる力」をはぐくむ学校教育と社会教育の協働の在り方について（答申）～学校教育と社会教育の協働を推進するための社会教育主事の役割について～」に関する答申の作成等を行った。

##### 【県立社会教育総合センター関係】

○調査研究委員（岡田）

「県民及び教育行政職員の生涯学習に関する意識調査」調査研究委員会の委員長として、調査の企画、分析、報告書の作成にあたった。

##### 【大分県関係】

○大分県協働推進会議委員長（岡田）

○大分県新しい公共支援事業運営委員会委員長（岡田）

### 2) 市町村教育委員会生涯学習行政との連携

#### ＝生涯学習関係者研修事業＝

○別府市：社会教育・関係者学校教育関係者やコーディネーター対象の「別府市学校支援事業研修会」におけるパネル討議のコーディネーター（中川）

#### ＝委員等への就任＝

○由布市指定管理者選定委員会委員長（岡田）

○大分市あなたが支える市民活動応援事業選考委員会委員長（岡田）

### 3) 団体、機関、大学等との連携

#### ＝生涯学習関係者研修事業＝（主なもの）

○熊本県社会教育研究大会における講師及びコーディネーター（中川）

○熊本県甲佐町における「学校支援地域本部事業」に関する研修会における講師（中川）

○別府市における「学校支援地域本部事業」に関する研修会における講師（中川）

○岡山県教育委員会主催「生涯学習・社会教育関係職員研修会」における講師（中川）

○国立教育政策研究所社会教育実践研究センター平成 22 年度全国生涯学習センター等研究交流会で総括討議「生涯学習センター等における連携の意義・再考」の事例発表を担当（岡田）

○佐賀県立生涯学習センター生涯学習関係職員実践講座（基礎編）で、講義「社会教育関係職員に期待される新しい役割～コーディネート業務とは～」およびワークショップ「地域における教育の協働をいかに進めるか」を担当（岡田）

○香川県教育委員会平成 22 年度地域教育力活性化推進事業成果発表会で基調提言とパネルディスカッションのコメンテーターを担当（岡田）

○国立教育政策研究所社会教育実践研究センター社会教育主事講習（B）で特講「学校と地域社会」を担当（岡田）

## ＝委員等への就任＝

- 「文部科学省戦略的大学連携支援事業」教育連携WG生涯学習分科会委員（中川・岡田）
- 中国・四国・九州生涯学習実践交流会大分県実行委員（中川）
- 地域発「『活力・発展・安心』デザイン実践交流会」委員及び事務局員（中川・岡田）
- 放送大学卒業研究指導（1名）（岡田）
- 子育てネットワークおおいた委員（岡田）
- おおいた水フォーラム事務局（岡田）

## （9）調査研究

### ○「県民及び教育行政職員の生涯学習に関する意識調査」

（県立社会教育総合センター報告書）

5年おきをめどに実施されてきた県民および教育行政職員の生涯学習に関する意識調査を実施し、報告書を取りまとめた。この調査は、社会教育・生涯学習推進行政の方針等を定める際の基礎資料として活用されるものであり、市町村の社会教育事業計画策定においても参考資料となることが期待されている。

県民対象の回答結果からは、学習していない人が増加していること、やはり趣味教養型の学習がもっとも多いこと、インターネットの利用率が高まってきたことなどの傾向が読み取れた。

教育行政職員対象の回答結果からは、臨時職員の増加、公益性の高い領域での事業展開の必要、学社連携の進展、などを読み取ることができる。

予算や職員の削減など厳しい状況に置かれている社会教育であるからこそ、効果的・戦略的に事業を展開し、可能な限り多くの県民の生涯学習実践に貢献することが求められる。そのための具体的方策を導くものとして調査結果の活用を進めていく必要がある。

### ○家庭、学校、地域社会の「教育の協働」に関する調査研究Ⅲ

～大分県佐伯市における「教育の協働」に係る意識調査から～

（大分大学高等教育開発センター報告書）

本調査報告Ⅲは、学校支援地域本部事業を2年間実施（H20年度及びH21年度）した結果について平成22年度に調査して報告するものであるが、本節では、その前段として、これまでの調査結果から見えてきたことを、平成20年度調査結果を元にして、内容によっては平成21年度調査と比較してまとめたものであり、次のように整理した。

- 第1章 調査計画の概要
- 第2章 これまでの調査結果の概要
- 第3章 調査結果の概要
- 第4章 今の子どもたちの現状を見る
- 第5章 家庭、地域社会の現状を見る
- 第6章 学校支援に関する現状・意識を見る
- 第7章 学校支援活動に期待できる効果を見る
- 第8章 コーディネーターの役割
- 第9章 「教育の協働」の推進方策を見る
- 第10章 「教育の協働」を推進す視点

### ○地域住民の学校支援と子どもの学習効果 一児童生徒及び教員への意識調査から一

（大分大学高等教育開発センター研究紀要）

家庭、学校、地域社会という三者における教育の協働を効果的に推進するために、学校支援地域

本部事業を実施する地域の児童生徒、教職員、地域住民（含保護者）を対象に平成20年度行ったアンケート調査を基にして、学校支援が子どもへ期待される学習効果について教職員の意識から分析し、家庭、学校、地域の三者が効果的な協働を推進していく筋道を確立するための方策に関し若干の示唆を提示することを試みた。その際、必要に応じて平成21年度及び平成22年度の調査結果との比較も行った。

### ○地域との関わりによる子どもの学習活動の推進

―地域住民の支援活動と教師の意識変化を中心として―（日本生活体験学習学会誌研究論文）

本研究は学校のみでは子どもの成長発達を十分サポートしえない、換言すれば家庭、学校、地域の協働体制の構築が子どもの成長発達に欠かせないという前提のもとに、教育に対する家庭、学校、地域の効果的な協働体制の構築を旨とするものである。「学校」という場を通して教育の協働を進めるための学校支援地域本部事業が2年以上経過した。今回は学校支援地域本部事業を実施している地域と実施していない地域の両方を持つ大分県佐伯市において、児童生徒、教職員、地域住民、コーディネーターを対象にアンケート調査を実施し、その調査結果を分析した。その結果、地域住民の子どもへの関わりによる効果について、子ども自身の意識や教職員の意識が明らかになるとともに、地域住民による学校支援のキーパーソンはコーディネーターの存在であり、専任のコーディネーターの配置の有無によって、教職員の意識や学校支援の内容が変化していることも明らかになった。

### ○学校という場を通してのコミュニティづくりに関する調査研究

―学校への地域住民参加を中心に―

（大分大学経済論集）

学校支援地域本部事業を実施する地域の児童生徒、教職員、地域住民を対象にアンケート調査を実施し、学校・家庭・地域社会の教育の協働を推進するための方策について手がかりを得ようとするものである。学校で行われている教育活動に地域住民が参加することは、学校そして地域住民双方にとって多くのプラス効果が期待される。学校にとっては学校以外の人的資源の有効活用による教育効果が期待されるし、地域住民にとっては学校への支援活動参加による人間関係ネットワークの広がりや生き甲斐創造に繋がることを期待される。さらに、地域社会にとっても、住民のコミュニティ参加意識の向上に伴う「住民が積極的に参加するコミュニティづくり」のために大いに役立つことが考えられる。

これらを分析するために本研究では、学校支援活動経験による自己変化の分析、及び「学校支援活動経験の有無」「地域住民による学校支援活動の必要性の有無」「今後の学校支援活動参加意思の有無」の3項目と関連ある項目の分析をおこなった。そして、学校という場を通じた活動が、コミュニティづくりの一方策になることについての考察を試みた。

## （10）大学開放・生涯学習支援における国内の動向～研修・会議を通して～

キャリア教育民間コーディネーター育成・評価システム開発事業に関する各種研修・会議

### 1) 北海道教育大学函館校実践モデル事業

主催：特定非営利活動法人「南大阪地域大学コンソーシアム」



期日：平成 23 年 1 月 6 日（木）～9 日（日）

会場：北海道教育大学函館校

### 【今後の方向性】

キャリア教育における大学の役割の重要性が言われ、大分大学においても平成 22 年度から「大学生の就業力育成支援事業」を実施している。今回の研修は、経済産業省が行う「キャリア教育民間コーディネーター育成・評価システム開発事業」としての大学連携モデル事業である。

受講者は民間指導者及び函館地域の大学生が席を同じくしてキャリア教育に関する研修プログラムを 15 時限（90 分×15 コマ）行ったものである。最終的な論文と、発展的に学校支援コーディネーターの実践等を行った後に認定試験を経て「キャリア教育コーディネーター」の資格を得るという仕組みになっている。キャリア能力の開発とコーディネーターの資質の育成が目的であり、学生のキャリア開発においても面白い研修であると感じた。また、社会人のコーディネーター養成は本校でも「協育」アドバイザー養成講座として実施しているところであり、今回の研修プログラムを活用して、本校の養成講座の充実を図ることの重要性を再認識した。

## 2) キャリア教育民間コーディネーター育成・評価システム開発事業に係る合同研修会

及び、文部科学省「地域の教育力強化プロジェクト」世代間交流プログラム研究懇話会

及び、東京都教育支援コーディネーター・フォーラム 2001

期日：平成 23 年 1 月 28 日（金）～29 日（土）

会場：東京都（経済産業省内会議室及び東京都第 1 本庁舎）

### 【今後の方向性】

経済産業省も文部科学省も目指すところは「コーディネーターの配置による教育活動の充実」という同じ方向である。最終的には各省の性格からして異なることは理解できるが、推進している者としては同じとして考えても良いと認識できる。

こうして、国においても「教育の協働」の重要性を認識して、その方策としての「コーディネーターの配置と養成」を積極的に進めている。行政としての東京都の取り組みについては、身近な教育資源の豊富さからの事業の仕掛けが出来ていることと、民間の組織や企業とうまくタイアップした取り組みが進められていることなどがあげられる。言い替えれば、地域の行政、機関、企業、組織・団体のネットワーク化が鍵となるであろうし、そのコーディネートの重要性を改めて感じた。本センターがどういう立場で推進していくかを検討したいと感じた。

## Ⅲ 付 録

### 1. センター関係諸規則

#### (1) 大分大学高等教育開発センター規程

平成20年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この規程は、大分大学学則（平成16年規則第8号）第7条第2項の規定に基づき、大分大学高等教育開発センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定める。

(定義)

第2条 この規程において「部局」とは、国立大学法人大分大学部局を定める規程（平成16年規程第14号）第2条第3項第1号に規定する部局のうち、事務局を除く部局をいう。

2 この規程において「部局長」とは、前項に規定する部局を掌理する者をいう。

(目的)

第3条 センターは、学内外の関係機関との連携の下に、高等教育および生涯学習に関する調査・研究及び教育事業を積極的に推進し、もっと大分大学（以下「本学」という。）における教育及び地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(業務)

第4条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 新規授業・カリキュラム開発に係る業務
- (2) メディア・IT活用関連に係る業務
- (3) FD・授業評価関連に係る業務
- (4) 大学開放推進関連に係る業務
- (5) 生涯学習支援システム関連に係る業務
- (6) その他センターの目的を達成するために必要な業務

(部門)

第5条 センターに次の各号に掲げる部門を置く。

- (1) 新規授業・カリキュラム開発部門
- (2) メディア・IT活用部門
- (3) FD・授業評価部門
- (4) 大学開放推進部門
- (5) 生涯学習支援システム部門

(職員)

第6条 センターに次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) センター次長
- (3) 専任教員
- (4) 部門長
- (5) センター員

(センター長)

第7条 センター長は、センターの業務を掌理する。

- 2 センター長は、本学の教授のうちから、大分大学学内共同教育研究施設等管理委員会（以下「管理委員会」という。）の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター次長)

第8条 センター次長は、センター長を補佐し、センター長に事故があるときはその職務を代行する。

- 2 センター次長は、本学の教員のうちから、管理委員会の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター次長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター次長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(専任教員)

第9条 専任教員は、教育研究に従事するとともに、センターの業務を行う。

- 2 専任教員の選考は、管理委員会の議に基づき、学長が行う。

(部門長)

第10条 部門長は、センター長の指示を受け、第5条各号に規定する各部門をそれぞれ統括する。

- 2 部門長は、本学の教員のうちから、センター長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 部門長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、部門長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター員)

第11条 センター員は、担当部門の研究開発、支援等を行う。

- 2 センター員は、本学の教員のうちから、部局長の推薦に基づき、学長が任命する。
- 3 センター員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、センター員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営委員会)

第12条 センターの円滑な運営を図るため、大分大学高等教育開発センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

- 2 運営委員会に関する必要な事項は、別に定める。

(専門委員会)

第13条 運営委員会に、業務に係る専門的事項について調査及び実施するため、専門委員会を置くことができる。

- 2 専門委員会については、別に定める。

(事務)

第14条 センターに関する事務は、学生支援部教育支援課において処理する。

(雑則)

第15条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は別に定める。

附 則（平成20年規程第8号）

- 1 この規程は平成20年4月1日から施行する。
- 2 大分大学生涯学習教育研究センター規程（平成16年規程第134号）及び大分大学高等教育開発センター規程（平成17年規程第12号）は廃止する。

## (2) 大分大学高等教育開発センター運営委員会細則

平成20年4月1日制定

### (趣旨)

第1条 この細則は、大分大学高等教育開発センター規程（平成20年規程8号）第11条第2項の規定に基づき、大分大学高等教育開発センター運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定める。

### (審議事項)

第2条 委員会は、大分大学高等教育開発センター（以下「センター」という。）の円滑な運営を図るため、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの運営に関する事項
- (2) センターの事業計画に関する事項
- (3) 部門間の連絡調整に関する事項
- (4) その他センターに関する必要な事項

### (組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センター次長
- (3) 専任教員
- (4) 部門長
- (5) 各学部から選出された教員 各1人
- (6) 大分大学学術情報拠点運営会議から選出された者 1人
- (7) 大分大学地域共同研究センター運営委員会から選出された者 1人
- (8) 研究・社会連携部長
- (9) 学生支援部長
- (10) その他センター長が必要と認めた者

2 前項第5号から第7号まで及び第10号の委員は、学長が任命する。

3 第1項第5号から第7号まで及び第10号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

### (委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長の指名する者がその職務を代行する。

### (会議)

第5条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めたときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第7条 委員会の事務は、学生支援部教育支援課において処理する。

(雑則)

第8条 この細則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則 (平成20年細則第3号)

- 1 この細則は平成20年4月1日から施行する。
- 2 大分大学生涯学習教育研究センター運営委員会規程(平成16年規程第135号)、大分大学高等教育開発センター運営委員会規程(平成17年規程第13号)及び大分大学公開講座専門委員会内規(平成16年4月1日制定)は廃止する。

### (3) 大分大学高等教育開発センター紀要刊行規程

平成20年10月10日制定

#### (趣旨)

- 1 この規定は、大分大学生涯学習教育研究センター（以下「センター」という）紀要（以下「紀要」という）の編集および刊行等に関して、必要な事項を定めるものとする。

#### (紀要の内容)

- 2 紀要には、高等教育または生涯学習についての未発表の学術論文、研究ノート、報告、翻訳、資料等（実践報告を含む）を掲載するものとする。

#### (投稿資格)

- 3 投稿者は、投稿日において次の各号の一に該当していること。ただし、共著の場合には、筆頭著者が投稿資格を満たしていればよい。
  - (1) 本学教員
  - (2) 本センター客員研究員
  - (3) 本センターが依頼した人
  - (4) 本センター運営委員会が認めた人

#### (執筆要領)

- 4 投稿原稿に関する執筆要領については、別に定める。

#### (刊行)

- 5 紀要は原則として年1回発行するものとする。

#### (刊行費)

- 6 刊行費は、センター共通費で負担するものとする。ただし、次の各号については、執筆者の個人負担とする。
  - (1) 論文の刷り上がりページ数が20ページを超える場合
  - (2) 別刷が50部を超える場合

#### 附 則

この規定は、平成20年10月10日から施行する。

## (4) 大分大学高等教育開発センター紀要執筆要領

### 1) 投稿枚数

投稿原稿は、単独執筆または共同研究に関わらず、原則として一編につき刷り上がりで20ページ以内とする。刷り上がりで30ページ以内であれば受理するが、その場合には刊行費用について執筆者が応分の負担をするものとする。

投稿枚数は、題目、要旨、キーワード、図表、注、参考文献等を所定の枚数の中に含めて算定することとする。

### 2) 投稿申込および原稿提出の期限

投稿申込の期限は毎年12月28日とし、原稿提出の期限は毎年1月末日とする。なお、当該日が休日の場合、次の勤務日を期限とする。

### 3) 審査および掲載の可否

投稿された原稿は、センター運営委員会で掲載の可否について判断された上で紀要に掲載されるものとする。場合に応じて、加筆、修正、削除を求めることがある。

### 4) 原稿の提出

原則として、原稿はワープロソフトを使用して作成し、プリントアウトしたもの（1部）とファイルを保存したメディアを提出する。

①プリントアウトは以下の書式で作成する。

- ・用紙はA4縦とする。
- ・ページレイアウトは横書きとし、上30mm、左右20mm、下20mmの余白をとる。
- ・1ページあたり、40字×40行とする。
- ・カラー印刷を希望する場合、その旨を明記する。

### 5) 参考文献

参考文献は原稿末尾に掲載する。雑誌の場合、著者・文献名・巻・号・出版年月・ページを、単行書の場合には、著者・書籍名・出版社・出版年・ページを記入する。

### 6) 校正

校正は一枚を原則とし、必要最低限の訂正、修正に留めるものとする。

### 7) 別刷

別刷は原則として50部とする。50部を超える別刷を希望する場合には、執筆者が刊行費用について応分の負担をするものとする。

## 2. 高等教育開発センター運営委員会名簿

委員長	山下 茂	高等教育開発センター長（教育福祉科学部）
委員	岡田 正彦	高等教育開発センター次長（大学開放推進部門長）
委員	中川 忠宣	高等教育開発センター専任教員（生涯学習支援システム部門長）
委員	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員（FD・授業評価部門長）
委員	末本 哲雄	高等教育開発センター専任教員（メディア・IT活用部門長）
委員	財津 庸子	教育福祉科学部
委員	丸山 武志	経済学部
委員	北野 敬明	医学部
委員	前田 寛	工学部
委員	吉田 和幸	学術情報拠点運営会議
委員	氏家 誠司	地域共同研究センター運営委員会
委員	松岡 寿	研究・社会連携部長
委員	清水 博人	学生支援部長

### 新規授業・カリキュラム開発部門

部門長	山下 茂	高等教育開発センター長（教育福祉科学部）（部門長）
センター員	岡田 正彦	高等教育開発センター次長（大学開放推進部門長）

### メディア・IT活用部門

部門長	末本 哲雄	高等教育開発センター専任教員（部門長）
センター員	鄭 娥敬	教育福祉科学部
センター員	藤井 弘也	教育福祉科学部
センター員	藤村 賢訓	経済学部
センター員	井上 亮	医学部
センター員	濱川 洋充	工学部
センター員	吉田 和幸	学術情報拠点

### FD・授業評価部門

部門長	牧野 治敏	高等教育開発センター専任教員（部門長）
センター員	末本 哲雄	高等教育開発センター専任教員
センター員	甘利 弘樹	教育福祉科学部
センター員	市原 宏一	経済学部
センター員	高見 博之	経済学部
センター員	横井 功	医学部
センター員	緑川 洋一	工学部

### 大学開放推進部門及び生涯学習支援システム部門

部門長	岡田 正彦	高等教育開発センター次長（大学開放推進部門長）
部門長	中川 忠宣	高等教育開発センター専任教員（生涯学習支援システム部門長）
センター員	山崎 清男	教育福祉科学部
センター員	藤原 耕作	教育福祉科学部
センター員	仲本 大輔	経済学部
センター員	藤木 稔	医学部
センター員	後藤 真宏	工学部



Memo

A series of horizontal dotted lines for writing.

平成 22 年度

大分大学高等教育開発センター報告書

発 行 平成 23 年 4 月

編 集 大分大学高等教育開発センター

〒870-1192 大分市大字旦野原 700 番地

Tel/Fax(097)554-8509

<http://www.he.oita-u.ac.jp/>